
麻帆良に来た召喚士

ぎゅりこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麻帆良に来た召喚士

【Zコード】

Z93720

【作者名】

ぎやりこ

【あらすじ】

テイルズオブファンタジアのクラスがネギまの世界に行くお話。

プロローグ～新たな旅立ち～（前書き）

どうしても書きたくなり書いてしまいました。

プロローグ 新たな旅立ち

「これでエターナルソードの封印は終わりか…。帰る前に精霊の森に行くか」

彼の名前はクラース・F・レスター。世界の脅威だったダオスを倒した时空戦士の一人だ。彼は今、時の魔剣「エターナルソード」の封印を終えたところだつた。

精霊の森

「相変わらず凄い木だな」

彼が見ているのは大樹ユグドラシル。たつた一本で世界中に満ちるほどのマナを生み出している木だ。

「さてそろそろ帰らないとな…！？なんだ！？」

クラースが帰ろうとすると突如ユグドラシルが光出した。

「マーテルか？」

彼が大樹の精霊の名を呼ぶと光が強くなり、その光が消えたときそこには誰もいなくなっていた。

？？？

「… てください。… きてください。… 起きてください」

「ん、ここは？」

彼が目を覚ました場所は白い世界。所々赤や青などいろいろな色の光が浮いている。

「起きましたか」

「マーテルか？ここはどこなんだ？」

クラースの目の前にいたのは緑色の髪をした女性。彼女こそが大樹の精霊マーテルである。

「「」」は大樹の中です。クラース。あなたに頼みたいことがあります」

「精靈が人に頼み事か？それに頼りになる奴なら他にいるのだろう。あいにく私は早く家に帰りたいんだが」

「あなたにしかできないのです」

「…話を聞こうか」

「実は…」

この世界とは違う世界に大樹ユグドラシルと似たものがありその世界の大樹から助けを求められたらしい。その世界では近いうちに何かが起こる。それを阻止して欲しい。これがマーテルの言葉のすべてだ。

「にわかに信じられないが、あなたがウソを言つはずもないしな。だが、一つ聞きたいなぜ私なんだ？精靈がいなければ私は何の役にも立たないぞ。」

クラースの疑問にマーテルが答える。

「心配には及びません。向こうの世界とこちらの世界はわずかではありますかが精靈が行き来できる程度には繋がっています。それに向こうの世界に行かせることができる人間はもつとも私たち精靈に近づいてきた召喚士のあなたにしかいません」

「…私にしかできないのだな？」

「はい」

「わかつた。何をすればいい？」

「ありがとうございます。それではこれを受け取つてください。」

マーテルが渡してきたのは六枚のカード。

「これは？」

「あなたの仲間の力の一部を譲り受けたものです。これを使えばあなたは彼らの力を使うことができます」

カードを見るとかつての仲間たち、クレス、ミント、チェスター、

アーチェ、すずの姿が描かれていた。そして最後の一枚には…。

「おいおい、これは何の冗談だ？」

そこに書かれていたのはダオス。クラース達が倒したデリス・カラーンの戦士の姿が書かれていた。

「彼も力を貸してくれました」

「責任重大だな」

「それではあちらの世界に送ります。こちらに」
マークルがそう言つと彼女の隣に扉が出てきた。クラースが扉の前に来ると彼はマークルに行つた。

「ひとつ頼みたいことがあるんだが…」

「なんでしょう？」

「あいつに…ミラルドに必ず帰ると伝えてくれ」

「わかりました」

その言葉を聞き、クラースはその扉を開けた。

プロローグ～新たな旅立ち～（後書き）

感想待つてます。

召喚士、麻帆良に降り立つ（前書き）

クラスが吸血鬼と出会います。

召喚士、麻帆良に降り立つ

クラースが目を開けると田の前には大樹があった。

「これがマーテルの言つていた大樹か。確かに似ているな。それにしても…」

クラースは周りを見渡す。田に見えるのは前の世界の未来で見たような建物と一つだけの木。

「本当に異世界に来てしまったようだな。まずは人を探すか」「その必要はないぞ」

「誰だ！？」

クラースが振り返るとそこには小さな女の子と耳に機械のような飾りをつけた女の子がいた。

警備なんてめんどくさかったが今夜は面白くなりそうだな。田の前にいるのは青い髪の男。体の所々に刺青をしている。おそらく魔法の効果を高めるものだらう。そして何よりもあの指輪。かなりの魔力を感じる久しぶりに面白い戦いができるそうだ。

「ふんっ。あいにく侵入者に名乗る名前はない。茶々丸お前は手を出すな。」

「ハイ、マスター」

さあ、私を楽しませて見せり！

「行くぞっ！」

くそっ！この世界に来ていきなり戦闘とはついてない。とりあえず距離を取るか。

「逃がさんっ！氷結・武装解除！－！」

うまくいくてくれよ

「私を守れ！ノーム！－！」

ノームが地面を操り壁を作る

パキイイイン

なんとか使えたか

「面白い術を使うなこれならどうだ！氷爆！！」

相手が使うのは氷の魔術かなら

「奴の魔術を防げ！イフリート！！」

イフリートは火の精霊生半可な氷の魔術は効かない。

「イフリート、時間を稼いでくれ！」

「了解した。岩をも融かす我が炎を見せてやろつ。」

なんだ奴が召喚したこいつの魔力量は！？並の魔法使いを軽く超えるほどの魔力だぞ！それをああも簡単に召喚するとは…少し本気を出すか。

「いいぞ面白くなりそうじゃないか！」

精霊の複数同時召喚はあまり使いたくないんだがな。これが今の私の全力だ。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック。来れ氷精大気に満ちよ。白夜の国の凍土と氷河を。こある大地！！」

「まさか火の精霊である我が凍るとわな…」

火の精霊か…なかなか楽しめたぞ…！？なんだこの魔力は！？

「死を暗示する方位には破壊を司る物を招くがよい。生命の息吹を感じたならそこは誕生を司る者の場所である。逝く者に涙する乙女は死を左手に感ずる場に招かれよ。風は乙女と向かい時の流れのよう等しくみなに吹き抜けん…」

「そつ！間に合わない！」

「指輪の契約のもと我が呼び声に答えよ！」

まさかイフリートが凍らされるとはな。だが地水火風の精霊の同時召喚。これなら精霊同士がお互いを高めあい先ほどとは比べ物にな

らない。

「テトラコーダーーー！」

まさしく四方を固められた。しかも先ほどより力が上がっているだと！？どうする？たとえ茶々丸が加わったとしてもここに勝てない。

「そこまでだ。」

まさかエヴァがやられるとは…、それに周りにいる四体の精霊かなりできる。僕でも勝てるかどうか…。

「彼らを下がらしてくれないか？」

素直に聞くならよし、聞かないなら術者を仕留める。

「そこにはおじょうちゃんが手を出さないでくれるならかまわないが。」

「お、おじょうちゃんだと…。この私をおじょうちゃんだと…？貴様覚悟はいいだらうな…」

「覚悟も何も私はまだ君の名前を知らないのでな、それとも初対面と思ったのは私の間違いだつたかな？」

「むつ…。エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルだ。」

「私はクラース・F・レスターだ。エヴァンジエリン手を出さないでくれるのかな。あまり無益な戦いをしたくないのだが」

「わかってる。今の私ではこいつらに勝てない」

エヴァがそう言うとエヴァの四方を囲んでいた四体の精霊が消えた。

「クラスさん僕はタカミチ・T・高畠。悪いけど僕たちのトップにあつてもらいたいんだけどいいかな？」

「構わない」

「それじゃついてきてくれ

学園長室

「異世界から来たか…。」にわかに信じられるの？

「これが普通の反応だらうな。記憶でも見せられれば簡単なんだが…。
「この世界の魔法で私の記憶を見せることはできないのか？」
「できないことはないがいいのか？」

「プライベートなことを見ないでくれるならかまわない。」

「それなら大丈夫じゃ。この魔法は君が見せたい記憶を見るものじ
やからな」

「ならいい。始めてくれ」

思い浮かべるのはあの旅のこと。クレス達と出合った。世界を回り。
時を超える。世界を守り。奴の想いを知り。あの星のことを探つた。
「なるほどなの。確かにウソは言つてなことじやない。やじつもわかつ
た！君を教師として雇つことにしよう」

今何といった？

「教師？私が？」

「つむ、これからこの世界で生活するのじやろ？それなら職は必
要じやろう？」

頭が痛くなつてきた。

「色々言いたいことはあるがまあいい。それより時間をくれ。この
世界のことによく調べたいのでな。」

「うむ、教師の件は来年からにしよう。それで住むといふじやが…」

「つむで預かるわ。」

エヴァンジエリンがそう言つてきた。

「うむ、わかつた。エヴァに頼むことじよ。クレス君もそれ
でかまわなかの？」

「ああ

「それじゃあ、ついてこい」

「随分とたくさんの人形があるんだな」

「ゴ主人 NANDA GOITSUHA」

並べてある人形を見ていると一体の人形がしゃべりだした。

「エヴァンジェリンなんだこいつは？」

「そいつは私の初代パートナーだ。もつとも今は魔力が足りなくて動けないがな。チャチャゼロ。そいつは異世界から来たクラースだ。しばらく家で預かることにした」

「クラース・F・レスターだ」

「チャチャゼロダ。ヨロシクナ旦那」

挨拶を終えソファに座る。茶々丸は台所に向かった。おそらく夕食の準備だろう。

「それにも召喚術か興味深いな」

「私としては人間でも使える魔法の方が興味深いがな。それよりエヴァン…」

「エヴァアでいい。長つたらしいだる」

「じゃあエヴァア、チャチャゼロを借りても良いか？」

「かまわないが何をする気だ？」

「こっちでも契約できるか試してみたいんだ」

「面白そうだな」

そう言ってエヴァアはチャチャゼロを取りに行つた
「確かにここに契約の指輪が…」

旅の中で集めた契約の指輪を机の上に並べる。

「ナニスンダ？」

並べ終えたところでエヴァアがチャチャゼロを持ってきた。

「今からお前にクラースと契約してもらう。つまくいけば自由に動けるようになるぞ」

「ウマクイカナカツタラドウナルンダ？」

「さあ…？」

「オイ！ チョットマテ！」

「冗談だ失敗したら何も起こらんよ。好きな指輪を選んでくれ」

「ソコノラピスラズリガイイ」

「わかつた」

ラピスラズリの指輪を指にはめほかの指輪をしまつ。

「じゃあ、始めるぞ」

「オウ」

「我、いま意思持ちし人形に願い奉る。指輪の盟約のもと、我に彼女を従わせたまえ。我が名は… クラース・F・レスター」

光がチャチャゼロを包みしばらくして消えた。

「成功したのか？」

「オオ動ケルゼ！」主人！アリガトナ、旦那

チャチャゼロが立ち上がり机の上を歩きながら言つ。

「よかつたですね。姉さん」

そういうながら茶々丸が夕飯を持つてきた。

「旦那、一杯ヤンネ工力？イケルロダロ？」

チャチャゼロがいつの間にか酒を持つてきていた

「おっ！いいねえ！」

エヴァとチャチャゼロとともにグラスを上げる。

「新たな出会いに…」

「新タナ友ニ…」

「新たな世界に…」

「…乾杯！」

次の日

「ダラシネエナア、旦那」

「チャチャゼロ、耳元で飛び跳ねないでくれ頭に響く…」

召喚士、麻帆良に降り立つ（後編）

感想待つてます。

☆彌十、修行をする（前書き）

別荘で修業します。

召喚士、修行をする

「う～む…」

マーテルからもらったこのカード今のつむこちゃんと扱えるようこ
したいんだが。

「ドーシタンダ、旦那？カードトーラメリコシテ？」

「チャチャチャゼロか…。ここら辺に魔法を使っても大丈夫な場所つ
あるか？」

頭の上のチャチャチャゼロに話しかける。

「ソレナラ」「主人ニ頼ンテ別荘出シテモラウカ」

「別荘？」

「俺ガ聞イテキテヤルカラココト待ツテロ」

「ああ」

「！」の世界の魔法はすごいな…

あの後エヴァに地下室にあるボトルの前に立たされたと思つたらボ
トルの中に転移していた。

「ここでの一日は外での一時間になる。修業にはうつてつけだろ」

「ありがとう。エヴァ」

「かまわんさ」

「さて、さつそく使ってみるか…」

ポケットから一枚カードを取り出す。

「我に力を与えよ。クレス・アルベイン！」

カードが光り私を包む。

「ナカナ力強ソウジヤネエカ」

「それがクレス・アルベインか」

「すごいな。頭に体の使い方が流れ込んでくる」

剣や盾の構え方からアルベイン流剣術までそのすべてが頭に流れ込

んでいく。

「ほかの者たちのも試してみるか」

数時間後

「だいぶ使いこなせるようになつて来たな」

「エヴァか…」

「どうだ私と実践稽古しないか?」

「ケケケ、俺モ混ゼロヨ」

「二対一はさすがに無理だろ」

「一対一なら何とか召喚できるが一対一はきつい」

「ナラ俺ハ旦那ニツクゼ」

「なら茶々丸は私につけ」

「ハイ、マスター」

「それじゃ、始めるぞ…始め！」

合図とともにチャチャチャゼロと茶々丸がぶつかり合つ。その後ろでエヴァが詠唱を始めている。

「喰らえつ魔法の射手連弾・氷の17矢!!!」

「いでよつノーム！全て撃ち落とせ！」

地面から出たノームがミサイルのような形状になりエヴァの攻撃を撃ち落していく。

「狡猾な魔界の住民よ、契約に従い我に従え！グレムリンレナー！チャチャゼロをサポートしろ！」

トカゲに似たグレムリンレナーが八匹チャチャゼロの周りに現れる。四匹はチャチャゼロのサポートをし、残りの四匹はエヴァに向かう。「なかなかやるじゃないかだがこの程度では私には勝てないぞ！氷神の戦鎧！」

エヴァが巨大な氷塊によつてグレムリンレナーをつぶそうとしたがグレムリンレナーが持ち前の速さで避ける。

「ちつ、ちょこまかと！」

「我に力を与えよ。アーチュ・クライン！」

エヴァがグレムリンレアに手こすつているつりに第で上に跳ぶ。

「これなら避けきれまい。魔法の射手連弾・氷の199矢！！」

199もの矢にエヴァと戦っていたグレムリンレアがやられる。

「クラースはどこに行つた！？」

「蒼溟たる波濤よ、戦禍となりて厄を呑み込め！タイダルウェーブ！」

クラースの真下、ちょうどチャチャゼロの前から巨大な津波が現れる。

「しまつた！」

「避けきれません」

「三対一でもよかつたんじゃないのか？」

実践稽古の後エヴァがそう言つてきた。

「無茶言つな。今回私が勝てたのは優秀な前衛がいたからだよ」隣に座つて いるチャチャゼロの頭を軽く叩きながら言つ。

「ケケケ、アリガトヨ」

「ふんつ、私は奥で休むが貴様らはどうする？」

「私も休むとしよう。さすがに疲れた」

「ではお部屋に案内します」

部屋に向かおうとしたらチャチャゼロに呼び止められた

「オイ旦那、サツキノトカゲ出シテクレヨ。切リアツテミテヨ」

「グレムリンレア。チャチャゼロの相手をしてくれ」

一匹だけだし部屋へと向かう。さすがに疲れた。

別荘の中で「旦過」し外に出たら丁度タカミチが来た。

「警備？」

「そう、世界樹とか貴重な魔道書とかを狙つて外から侵入者が来ることがあるんだ」

「別にかまわないが」

「そうか、それじゃ夜の十一時に世界樹前の広場に来てくれ。ほかの警備の人達と顔合わせするから」

そう言つてタカミチは走つて行つた。

世界樹前広場

「今日から警備に加わるクラース君じゃ」

ここにいるほとんどが魔法使いか。向こうの世界では考えられないな、人が魔法を使うなんて。

「クラース・F・レスターだ。よろしく頼む」

「実力を見てもらうためにタカミチ君と模擬戦をしてもらひ」

「お手柔らかに頼むよ」

「こちらこそ」

タカミチと握手をしたあと十分に距離を取る。

「ござ尋常に、始め！」

ヒュンッ！

顔に向かつてきた目に見えない何かを顔をそらして避ける。

「まさか初見で居合拳を避けられるとは思いませんでした」

「生憎この程度避けないとあいつには勝てなかつたからな。こつちも行かせてもらう。闇黒を渡り歩く影よ、契約に従い我に従え！ シャドウ！ 我を守れ！」

タカミチが攻撃してくるがシャドウが作り出す闇の中に吸い込まれていく。

「元素を統べる老爺よ、契約に従いその力を我に貸し与えよ！ マクスウェル！」

クラースの背後に学生帽をかぶり杖を持つ老人のような姿をしたマクスウェルが現れ光となり指輪に吸い込まれる。

「宇宙に散らばる無数の星々よ我が願いを聞き入れ我が眼前に降り注げ！ うまく避けてくれよ…。シューティングスター…！」

空からマクスウェルの魔力で造られた無数の光の球がタカミチに降り注ぐ。だがタカミチはそのほとんどを居合拳で撃ち落とした。
「そこまでークラース君の実力はわかつたじゃろ今日はこれで解散じゃ」

広場にいる魔法使いが帰つていく中タカミチが来た。

「さすがですね。世界を救つただけのことはあります」

「私はただ精霊たちの力を借りてるだけだよ。一人では何もできない」

「クラース君」

タカミチと話していると学園長が話しかけてきた。学園長の後ろには褐色で長身の少女と髪を横で結んだ刀を持った少女がいた。

「彼らが警備の時に君のパートナーとなる」

「龍宮真名だ。よろしくクラースさん」

「桜咲刹那です。よろしくお願ひします」

「クラースだ。よろしく」

二人と握手を交わす。

「オイ、旦那。早ク家帰ツテ一杯ヤロウゼ」

チャチャチャゼロが頭に乗りながら話しかけてくる。

「わかつた、わかつた。それじゃ、また」

帰ろうとすると学園長に腕を掴まれた。

「それはそうとクラース君。広場に空いた穴をどうにかしてくれんかね?」

学園長の指差す先にはショーティングスターで空いた無数の穴が並んでいる。

「私がか!？」

「まさかこんなになるとは思わなくてのう。それじゃあ後は頼むぞい」

そう言うとかなりの速度で走り去つて行つた。その場に残つたのはクラース、チャチャゼロ、真名、刹那の四人だけ。

「手伝おうか? クラースさん」

「私も手伝います」

「いやかまわないよ。奔放なる大地の精よ、契約に従い我が前に現れろ！ノーム！」

「にゅーん」

四人の目の前に手足のないモグラのような姿をしたノームが顔を出した。

「ノーム。この広場に空いた穴をふさいでくれ。」

「りょーかーい」

その言葉とともに穴がどんどんふさがっていく。

「しゅーりょー」

「ありがとう。ノーム」

「またねー」

そう言ってノームは土の中に消えた。

「模擬戦でも思つたけど、クラースさんの召喚術はすごいね」

「私はすごくないさ。一人では何もできないからな」

「オイ、トットト家一帰ローゼ」

「そうだな、じゃあ、また」

「うーん

「ドウシタンダ？」

「いや、何か忘れているような気がしてな…」

「ソノウチ思イ出スダロ」

「それもそうだな」

「我、何時まで、ここ、いる？我、何、守る？クラス、何処、いる？」

「クラスさん！精霊一人（？）忘れてます！」

丘陵土、修行をする（後書き）

感想待つてます。

召喚士、先生になる（前書き）

先生になります。

召喚士、先生になる

あれから一年の時が流れ私は教師になることになった。そして今、私が担当する2・Aの前にいるのだが…。

「肉まん一個ちよ～だい」

「一個ねオケよ」

「じゃお願ひです」

「あいあい」

「新任美形だといいけど」

「ネタにするんでしょ」

「…騒がしいな」

隣にいるタカミチに言つ

「元気があつていいじゃないか。それじゃあ、僕が呼んだら入つて来て」

「わかつた」

それにしても先生か…あつちの世界ではミラルドに頼りっぱなしになつたからな。こんなことなら少しは協力しどくんだつたな。

「それじゃあ、入つて来てくれ
さて、いくか。

ガラツ！

「今日から君たちの副担任になるクラス・F・レスターだ。担当
教科は数学だ。よろしく」

「…」

嵐の前の静けさつてか。

——カツコイイ！！！！！！！」

洪くて素敵かも」

まつたく三十路前のおつやんに何を夢見てるんだ?

TEは今、先生への質問が、以下三つあります。

「質問がある奴は手を挙げろ」

「はいっ！…！」「

一
じやあ、
神楽坂

夕方三尹から名簿を借りて名前を呼ぶ

「ヨハネを教えてください」

卷之三

「アーマーは一挺あるか？」

「腐れ縁の幼馴染がいる

なんで残念そうな顔をする？

「次、大河内」

「目の下や手にある刺青はなんなんですか?」

我が家に伝わるおまじないだと

次
古

「引ひあるたゞ」

「次里乙文」

「中学生と付き合つ」とはあり得ない

「次、
綾瀨」

「趣味はなんですか?」

一 読書と料理だ

キーン」「ーンカーン…

「もうないみたいだね。それじゃあ、H.R.はこれでおしまい
やつと終わった。よくもまあ、質問のネタが尽きないもんだ。それ
じゃあ、明日の準備をしてから図書館島に行くか。

図書館島

この世界の科学力はすごいなテレビ」と言いパソコンと言いあつちの
世界のトールぐらいの科学力はあるんじゃないか?いやさすがに大
陸を浮かせたり時間転移をしたりはしないか。

「あの~」

電球ぐらいならあつちの世界でも作れるか。電気はヴォルトを使え
ば。

「すいませ~ん」

この図書館島もす~いな王立学院を軽く超える量の書物があるなん
て。

「クラスせんせー」

「ん、富崎か?すまんな本に夢中になつてた」

「だ、だいじょ~ぶです。えと、今お時間ありますか?」

「ああ、ちょうど読み終わつたところだ」

「なら、きょ、教室に来てください」

「わかつたそれじゃあ行こうか」

教室

ガラ!

「~ようこそ!クラス先生ー!」「

歓迎会かそういうえは向こうでも子供たちが何回かやつていたな

「ササ、主役は真ん中に~」

「ふう

「どうだいこのクラスは？」

タカミチが飲み物を持ってきた。

「まるで、アーチェがたくさんいるみたいだよ」

「ハハハツ」

「ふむふむアーチェ、それが恋人の名前ですか？クラース先生」

「アーチェは知り合いのお転婆娘だよ」

「じゃあ、恋人はどんな人なんですか？クラース先生

「さあな、私のことなんか調べてないでみんなで騒げ」

「今日のところは引き下がるけど絶対スクープ取るよ」

「まったく退屈しそうにないなこの世界は、

夜

「今日は龍宮とか」

「よろしく頼むよクラース先生」

「おいおい、こんなところまで先生とか言わないでくれ」

「了解、クラースさん」

しばらく見回つて何もなかつたので龍宮と別れた。

エヴァ 宅
ガチャ
「帰ツタカ旦那」
「ただいまチャチャゼロ」
「今日モ別荘使ウノカ？」
「ああもう少しで新しい技が完成するんだ」
「老ケルゾ」
「ほつとけ」

召喚士、先生になる（後書き）

感想待つてます。

四十九、少壯の勇氣 (繪畫)

ネギが出ます。

「ウホールズに？」

朝学園長に呼ばれて学園長室に行つたらウホールズに行くよう言わ
れた。

「そ、うじゅ、魔法学校の卒業生の修行の内容が教師をする」と
うちの学校で預かることになつた。今回は顔合わせみたいなもんじ
や」

そう言つて学園長が書類を渡してきたが…。

「学園長、子供に教師をやらせる気か？」

書類には9歳と書かれている。

「大丈夫じゅよ。ネギ君は優秀じゅし。ワシらが導いてやればいい
じゅる」

「わかりました。」

「それで飛行機のチケットじゅが…」

「それなら大丈夫だ。向こうに近づくに行くと伝えてといてくれ

「うむ、わかつた」

英雄の息子か…。

エヴァ宅

「…とこつことでウホールズに行くことになつた」
家に帰りエヴァに話すと

「ふんつ、サウザンドマスターの息子か

不機嫌な顔でつぶやいた。

「私に登校地獄とか言う不愉快な呪いをかけたやつの息子だよ…い
や待てよ奴の子の血なら私の呪いも解けるか？」

「おいおい、女子供は殺さないんじゅなかつたのか？」

「世間知らずのガキに現実を教えてやるのを…それよつどつやつて
ウホールズに行くんだ」

「ん？ああ、エヴァにはまだ見せてなかつたな。別荘に行けば分かるよ」

別荘

「なんだ？これは？」

そこには鳥を模したが機械があつた。

「これはレアバード。ヴォルトの魔力を使つて動く飛行機械だ。魔科学の産物だよ」

「また、魔科学は大量に魔力を使うんじゃないのか？」

「レアバードはヴォルトの魔力で十分動くからな。大丈夫なはずだ。それに茶々丸に協力してもらつて改造してたからな」

「茶々丸が？」

エヴァが後ろにいる茶々丸を見る。

「ハイ、この世界の技術を取り込みより少ない魔力で動くようにしています」

「そういうことだ、この世界の飛行機より早いからな。それでエヴァ、明後日には出発するつもりだからその時に認識阻害魔法で一般人には見えないようにしてくれ」

「まあ、いいだろう。その代わり貴様の血をもらうぞ」

「わかつた。それじゃ頼むぞ」

魔法学校

「手紙には今日来るつて書いてあるけど……」

どんな人が来るのかな。手紙には優秀な人が来るつて書いてあるけど。

「どんな人が来るのかしらね」

「少なくともネギよりは頼りになる人よね」

お姉ちゃんとアーニャと話していたら空から大きな機械の鳥が下りてきてそこからたくさん刺青をした人が下りてきた。

「君がネギ君だね？」

「私はクラース・F・レスターだよろしく
「ぼ、僕はネギ・スプリングフィールドです。よろしくお願ひしま
す」

「私はネカネ・スプリングフィールド。ネギの姉です」

「私はアンナ・コーリエウナ・ココロウア。ネギの幼馴染よ。私の
ことはアーニャって呼んでくれていいわ」

「よろしく一人とも」

その後しばらく魔法学校のことや麻帆良学園のことを互いにしてい
たがネギ君が意を決したように聞いてきた。

「クラースさんはどんな魔法を使うんですか?」

「残念ながら私は魔法は使えない」

そう答えたならネギはものすごく驚いたような顔をした。

「でも、タカミチはすごい魔法使いつて」

タカミチか、別に召喚のことを言つてもかまわなかつたんだがな。

「私が使つるのは魔法じゃなくて召喚術だ。どれ、一つ見してやろう
シルフでいいか…」

「翠の風まとう姉妹よ、契約に従い我が前に現れる!・シルフ!・」

目の前に小柄な少女の姿をしたシルフが一人現れる。

「彼らと遊んでくれ」

そう言つとシルフは風でネギたちを浮かばせる。ネギたちは最初は
戸惑つっていたが今では笑顔で遊んでいる。

「それが異世界の力かの?」

後ろを見ると威厳漂う老人が立つていた。

「あなたは?」

「ワシはこの魔法学校の校長じゃ、君についてはコノエモンから話
は聞いておる。ネギのことをよろしく頼みますぞ」

「見本となれるように頑張ります」

その後この世界の魔法について聞いているとネカネが話しかけてき
た。

「あのクラスさんどねぐらこ」の町に滞在するつもりですか？」

「2・3日ぐらいだが」

「なにか泊まりませんか？ネギもあなたのことを気に入っている
ようです」

「好意に甘えるとしそうかな」

ネギの家

「クラスさん。僕に召喚術を教えてください」

夕食を頂いた後くつろいでいたらネギ君にそう言われた。後ろには

アーニャちゃんもいる。

「悪いがそれは無理だ」

そう言うとネギ君とアーニャちゃんが詰め寄ってきた。

「なんですか！？」

「けちけちしないで教えなさいよ！」

「理由を言つから落ち着け一人とも」

そう言うと素直に下がってくれた。

「召喚術は魔法が使えない私が少しでも魔法使いに近づくために研究したのだ。精靈と語りあうために体中に刺青を施し、精靈と出会うために世界中を渡り歩いた。精靈に認めてもらうために力を示した。ここに来るまで約30年かかった…。君たちには魔法がある。私と違つて才能がある。ならばその力を極めるように頑張れ。そうすれば私なんかよりすごい魔法使いになれるさ。」

「わかりました！クラスさんに負けないぐらこす」魔法使いになつて見せます！」

「いい返事だ。」

そう言ってネギ君たちの頭を撫でて寝室に行く。

寝室

「やはり、精靈を体に取り込むのは危険だな…。なら、精靈を鎧の
ように体にまとわせるか。これなら体への負担も少なくて済むか…。」

なら詠唱は…ネギか？」

後ろを見るとそこにはネギ君がいた。

「そんなとこにいないでこっちに来たらどうだ？」

「何をしているんですか？」

「私のメモを見ると尋ねてきた。

「召喚術の新しい技術を考えているところだ」

「新しい技術ですか？」

「ああ、私の召喚術は接近戦に弱いからな。それを補うためのものを今考えているところだ」

「何か僕にも手伝えることはありますか？」

「いや特にないな…」

「そうですか…」

「そんな顔をするな。何かあつたら頬らせてもらひつわ。それより早く寝た方がいい。明日はいろんな精霊を見せてあげるから。」

「はいっ！」

ネギ君はそう返事すると自分の部屋に帰つて行つた。

「私もそろそろ寝るか」

「クラースさん、こいつちです」

「早く来なさいよ、クラース」

「無茶言うなよ、私はそんなに若くないんだ」

息を切らせながら坂を上がりそこから下を見ると湖と森があつた。

「ここの景色だな」

「ここが僕たちの修行場です」

「ここなら彼女の力を使えるか。」

「早く呼びなさいよ！」

「そう急かすなよ」

「そろいいポケットから指輪を出しあげる。」

「それは？」

「これは精霊たちとの契約に必要なもので召喚術の際、発動媒体と

なる契約の指輪だ」

さてと呼ぶか。

「古代松の守り手よ、契約に従い我が前に現れる！アレフ！」

目の前に現れるのは濃い茶の髪の女性。

「久しぶりですね御主人様。何の御用ですか？」

「アレフ、下の森で3個ほど琥珀を作つて来てくれないか？」

「わかりました。しばしあ待ちを」

そう言つて下に降りて行つた。

「クラース、今のはなんの精靈なの？」

「古代松の精靈アレフだ」

「ふーん、なんか弱そう」

まあ確かに強そうではないが…。

「すべての精靈が攻撃に特化しているわけではないからな。だが戦えないわけではないぞ、森の中とか木がたくさんあるところなら樹脂を使って相手を琥珀の中に閉じ込めることもできる」

説明しているうちにアレフが戻ってきたその手の中には四つの琥珀がある。

「それじゃあ、面白いものを見せてやる」

アレフから一つ琥珀を受け取ると湖に向かつて思いつきり投げた。しばらくするとぽちちゃんと小さな音が聞こえた。

「ああ！？」

「何しているのよもつたいない！」

二人の言葉を無視してアレフに語りかける。

「アレフ、あの琥珀から見える景色を私たちに見せてくれ」

「かしこまりました。少々お待ちを…」

アレフが目をつむり両手を前に出すとそこには湖の中を移す水晶玉大の琥珀が現れた。

「「すご~い！」

「アレフは琥珀を通して世界を見ることができるんだ」

その後、アレフによつて世界中に散らばる琥珀の景色を3人ですつ

と眺めていた。

「もう帰っちゃうんですか？」

「一日後帰ることになった私を、ネギ、アーニャ、ネカネの3人が見送りにきてくれた。

「私にも教師の仕事があるからな」

「元気いっぱいの2・Aの生徒が頭に浮かぶ。

「また精霊見せてよね」

「また会いましょう」

「そつちにネギが言つたらよろしくお願ひします」

「ああ、それと君たちにプレゼントだ」

「ポケットに入っていた物をネギに渡す。

「これは琥珀のペンダント？」

「ああ、良ければ大事にしてくれ。それじゃ、また逢つ田まで！」

レアバードに乗り飛び立つ。

「英雄の息子か……。そこのへんの子供と変わらないな……あのくしゃみがなければ」

召喚士、少年と田舎つ（後書き）

アレフは小説に出てきた精霊です。ほかにもモンスター や オリジナルの精霊も出すつもりです。
感想待っています。

召喚士、新技開発（前書き）

新技が完成します。

召喚士、新技開発

「やつとできた…」

「ケケケ、ナカナ力強ソウジヤネエカ。サッソクヤリアウカ？」

「勘弁してくれ。もう一日も寝てないんだ」

別荘

「ご機嫌じやないかチャチャゼロ。何かいいことあったのか？」
今にも鼻歌でも歌いそうな顔で刃物の手入れをしている。

「アア、旦那ガヤツト新技ヲ完成サセタンデナ。ヤツト切リアエルゼ」

「そいつは面白そつだな。で？あいつは今どこにいるんだ？」

「寝テル。」

「そうか…」

私も久々に本氣で暴れるか…。

「なんで二人は獲物を見るような眼で私を見ているんだ？茶々丸」
二人と目を合わせないように近くにいる茶々丸に訊ねる。

「ハイ、二人ともクラースさんの新技に興味があり戦つてみたいようです」

「ハハハッ！クラース！今日は茶々丸を貸してやるー貴様の新技と
やらで私たちを満足させてみろー」

「ケケケケケケ！早クヤリアオウゼ？」

なんだか震えが止まらない…。

「そういうことですので今回ばかりしくお願ひします
「はあ…」

「さあーいつでも来い！
しうがない…。

「焰王の従士よ！契約に従い我に力を与えよ！フランベルグ！全てを灰燼と化す焰を我に纏わせ鎧と成せ！ブレイズメイル！」

真紅の鎧に包まれ手には炎をかたどったような剣が握られる。

「これが私が編み出した精甲術だ！」

「精靈を自分で纏つての身体強化か。なかなかやるじゃないか！最初から全力で行くぞ！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！契約に従い我に従え氷の女王！」

エヴァが空を飛び右手を上げ呪文を唱える。

「ゴ主人俺ラモ巻キ込ムツモリカヨ！？」

「広範囲完全凍結殲滅呪文、回避します！」

呪文を聞いたチャチャゼロと茶々丸が急いで離れる。

「…陽炎」

「来れ！とこしえのやみ！えいえんのひょうが！…！」

いくつもの氷柱が現れクラースが凍る。

「どうしたクラースその程度か！？全ての命ある者に等しき死を其は安らぎ也！…おるせかい」

「では、そろそろ行かせてもらおうか」

「何！？」

エヴァの後ろにはクラースと炎でできた数体の分身。

「さすが魔王を倒したことだけはある。チャチャゼロお前も…ちらに来い！久しぶりに心躍る戦いだ！」

「茶々丸、来い！」

「ケケケ！」

「ハイ、クラースさん」

空中に4人が集まる。

「フランベルグよ！彼女に其の力を貸し』『えよ！茶々丸！できる限りその一人を押さえる！」

「了解」

茶々丸もクラースと似たような鎧をまとい、炎をかたどった双剣を持つて二人を押さえる。

「粗暴な紅蓮の猛者よ、翠の風まとう姉妹よ、奔放なる大地の精よ、
蒼き水流の女傑よ、地水火風を司りし四大精靈よ…」

「まずい！ チヤチヤゼロ止めろ！」

「通しません」

チヤチヤゼロがクラースに向かつたが茶々丸に阻まれる。

「我に仇名す敵を封じる堅固な牢と貸せ！ テトラプリズン…！」

四大精靈が作り出す四面体にエヴァとチヤチヤゼロを閉じ込める。

「くつ！ エクスキューショナーソード…！ この程度の牢など壊してくれる！」

エヴァがテトラプリズンに鱗を入れているが遅い。

「精靈の統括者よ、契約に従いその力を我に貸し『えよ！ オリジン！』

クラースの後ろに四本の腕を持った人間の姿をしたオリジンが現れ光となつて指輪に吸い込まれる。

「輝く御名のもと 地を這う穢れし魂に裁きの光を雨と降らせん安息に眠れ 罪深き者よ！ 耐えて見せる！ ジヤッジメント…！」

無数の光が落ちる直前にテトラプリズンが壊れる。

「くつ！」

「アブネエ！」

ジヤッジメントの光を一人が避ける。

「どうした！ エヴァ、お前の全力はこんなものか！？」

立ち上がったエヴァが指を動かすとクラースが何かに縛られた。

「くつ！ ？糸か！ ？シルフ！」

「ふんつ！」

縛っている糸を切ろうとシルフを呼び出したがエヴァの魔法の射手にやられてしまう。

「ハッ！ つまるところ詠唱さえ止めてしまつたら私の敵ではないと
いうことか」

エヴァが近づいてきながら笑う。

「…油断は禁物だぞエヴァ。開放、フラムベルグ」

クラースの鎧が解かれフラムベルグが現れる。

「なつ！？」

「詰めが甘かつたな、エヴァ！鋭く咆哮する雷鳴よ…」

糸を切りエヴァに向かつたフラムベルグを見て詠唱を始めるが…。

「クラースさん！後ろです！」

「旦那ハ全体ノ把握ガ甘カツタナ

「ゴンッ！」

振り返つたクラースの脳天にチャチャゼロのみね打ちが叩き込まれた…。

「つつ！？…ここは？」

「ヤツト目覚メタ力、旦那」

周りを見ると隣にチャチャゼロが座っていた。

「…ああ、お前にやられたんだつたな」

「ケケケ、久シブリニ熱クナレタゼ」

酒を飲みながら答えるチャチャゼロの体には所々鱗が入つていた。

「エヴァは？」

起きながらチャチャゼロに聞く。

「旦那ガ最後ニ出シタヤツニヤラレテ氣絶シテルヨ」

「ならあの勝負は引き分けか。オリジン」

チャチャゼロにダイヤモンドを近づけ鱗を直す。

「氣ガ利クジヤネエカ。ツイデニ妹ノモ直シテクレヤ」

チャチャゼロが歩き出すのでそれについていく。しばらく歩くと広い部屋についた。

「姉さん。クラースさんも」

茶々丸はエヴァの看病をしていた。その体にもチャチャゼロと同じような日々があつた。

「妹、オ前ノ傷モ田那一直シシテモラヒ」

「ハイ、わかりました」

「そう言つて」ひむらを向く。その体にはチャチャゼロ以上の鱗があつた。

「オリジン」

チャチャゼロと同じように直していく。

「ありがとうござります」

「んつ」

茶々丸を直し終えたところでエヴァが田を覚ました。

「今回は引き分けだつたな」

田を覚ましたエヴァにそう言つと。

「バカ言え。あのままやつていればチャチャゼロが茶々丸を倒してたはずだ。と、言つことで私の言つことを一つ聞いてもらつた」

「待て！そんな約束はしてないぞ！？」

「敗者は勝者に従つものだろ？？」

「じゃあ、前回の勝負の時は！？」

「茶々丸をレアバードの改造の時に貸してやつた

「待て！その時は血をやつただろ！？」

「あれは認識阻害魔法の対価だ」

「くつ！わかつたよ。私は何をすればいいんだ？」

「とりあえず、田をつぶれ」

エヴァの言つとつ田をつぶるとエヴァに顎を持たれた。この体勢はまさか！？

チユツ！

目を開けるとエヴァに唇を奪われていた。

「なんなんなんなんあなにをする！？」

「くつくつくつ、どつした顔が赤いぞ？今のは仮契約の一一番簡単な方法だ」

「仮契約？」

「貴様の契約と似たようなものだ。貴様が魔力を与えて精靈を強化

するのと同じように従者に魔力を与えて身体能力を強化することができる。しかもアーティファクトというマジックアイテムも手に入る

「アーティファクト?」

「このカードを持つてアーティファクトと唱えてみろ」

渡されたカードを見るとクラースの周りに指輪が浮いており、クラースの後ろには精霊たちが描かれていた。

「アーティファクト」

「アーティファクト！」

「これは契約の指輪か？」

「随分とあるな、精霊という奴はそんなにあるのか？」

エヴァが指輪を一つ手に取つて眺めながら聞く。

「私が文献で見たことがあるのはセルシウス、レム、ヴェリウスくらいか…だが精霊としか契約できないわけではないしな数が多いに越したことはないだろ?」

「それもそうだな、しまつ時はアベアットだ」

「アベアット」

指輪がカードに戻る。

「さて、そろそろ外に出るか。クラースもほどほどにしどよあんまり引きこもつてると老けるぞ」

「ほつとけ」

「ナア、切リアオウゼ」

この日から、チャチャゼロからのラブコールが増えた。

召喚士、新技開発（後書き）

契約して欲しいオリジナルの精霊、モンスターを募集します。
感想待つてます。

召喚士の設定（前書き）

クラスがかなり強くなっていますが異世界補正とかそんな感じで納得してください。

召喚士の設定

ネギまの世界に来る前の設定
ダオスを倒してから元の時代に戻りしばらくしてからエターナルソードの封印の旅に出る。その時にいくつか新しい契約をした。その後ユグドラシルに行きネギまの世界へ。

クラスの能力の設定

召喚術：精霊や魔族、モンスターなどと契約し使役するもの。
主な使用法として、召喚し戦わせる、魔力を借り魔術を放つ、召喚し補助行動（穴のあいた地面の修復、レアバードに電力の供給など）をさせる、などがある。

精甲術：精霊や魔族、モンスターなどを武具として体に纏う。
主に接近戦の時に使う。またまとつた精霊などの一部を誰かに纏わせたり精霊などを開放して戦わせたりもできる。

ユグドラシルカード：マーテルからもらったカード。時空戦士とダオスの力の一部を秘めている。

主な使用法として、カードの力を使いクラス自身が彼らになる、カードから力を借り力の一部を借りる（身体能力や初級魔術など）、魔力を込め召喚する（異世界から呼ぶのではなく魔力で形を与えるので魔力量によって力に違いが出る）。

クラスが契約しているもの

シルフ…風を司る精霊。契約の指輪はオパール。

イフリート…炎を司る精霊。契約の指輪はガーネット。

ウンティーネ…水を司る精靈。契約の指輪はアクアマリン。

ノーム…地を司る精靈。契約の指輪はルビー。

マクスウェル…元素を司る精靈。契約の指輪はターコイズ。

ルナ…月を司る精靈。契約の指輪はムーンストーン。

ヴォルト…雷を司る精靈。契約の指輪はサードニックス。

アスカ…光を司る精靈。契約の指輪はトパーズ。

シャドウ…闇を司る精靈。契約の指輪はアメジスト。

オリジン…根源を司る精靈の王。契約の指輪はダイヤモンド。

グレムリンレア…魔界の住人。契約の指輪はサファイア。

プルート…冥界の王。契約の指輪はエメラルド。

フラムベルク…炎の剣の守護者。契約の指輪はカーネリアン。

フェンビースト…氷の剣の守護者。契約の指輪はカイナイト。

ワイバーン…ドワーフの守護者。契約の指輪はサー・ペンティン。

アレフ…古代松の精靈。契約の指輪はクリスタルアンバー。

チャチャゼロ…意思持ちし人形。契約の指輪はラピスラズリ。

移動手段

リアバード：ネギまの世界の技術を取り入れかなり少ない魔力でも飛行できるようになった。

召喚士の設定（後書き）

今のところはこんな感じです。フラムベルク、フエンビースト、ワイバーの契約の指輪それっぽいのを見た目で選んでみました。感想待っています。

召喚士と警備とバカレンジャーと（前書き）

警備をします。

夜

「さてと始めるか…」

伸びをしながら歩き出す。今日は私とチャチャゼロ、龍宮、桜咲の四人で警備の日だ。

「ケケケ、早クナンカデネエカナ」

「ふわあ～あ、私は出ない方がいいけどな」

うずうずしているチャチャゼロの言葉に久伸をしながら答える。

「クラスさん。少しば警戒してください」

「警戒はしてるよ、ただここのことろ徹夜が続いててね」

「徹夜して何をしてるんだい？」

「何エヴァと戦ってるだけだよ」

話に入ってきた真名にそう答える。

「あのエヴァンジエリンとかい？」

「ここ最近ずっとだよ」

精甲術が完成してからというものが前の頭にはそれしかないのかつてくらいに。

「マア、旦那トノコンビナラ今ノトコロ負ケナシダゼ」

「エヴァンジエリンにもかい？」

「ゴ主人ト妹ノコンビデモ俺達ニハ勝テネエヨ」

さて戦闘準備を始めるか。

「蒼き水流の女傑よ！契約に従い我に力を与えよ！ウンデイーネ！敵を蹴散らす激しき水塊を我に纏わせ鎧と成せ！アクアメイル！ウンディーネよ！彼女に其の力を貸し与えよ！」

海のような青い鎧で身を包み手には大剣が握られている。チャチャゼロは同じような鎧に双剣を構えている。

「精霊を使った肉体強化か…」

「さて警備の仕事を始めましょつか」

クラースがそう言つとチャチャゼロが答えた。

「ドウヤラ団体サンガ来タミミテヨダゼ」

チャチャゼロが見る方向には数十体の鬼がいた。

「斬岩剣！」

これで三十体目。どんどん増えてくる、きりがないな…。それにしても。

「ケケケケケケケケ！モット俺ヲ熱クサセテクレヨー！」

「荒れ狂う流れよ！スプラッシュ！煮え湯を飲ませてやう！」レイジングミスト！

チャチャゼロさんがクラースさんの周りの敵を流れるような剣舞で切っていく。クラースさんは防御はチャチャゼロさんにすべて任せかなりの敵を殲滅している。負けなしこうのにも納得がいく。

「きりがないな…。あれをやるか。」

桜咲にも疲れが見えるしな。

「慈悲深き夜の女王よ、恵み豊かな光の精よ、契約に従いその力を我に貸し与えよ！澄み渡る明光よ、罪深きものに壯麗たる裁きを降らせよ！ レイ！」

空から無数の光が降り注ぎ殲滅していく。

「これで最後だ！靈冥へと導く破邪の煌めきよ 我が声に耳を傾けたまえ 聖なる祈り 永久に紡がれん 光りあれ グランクロス！」

敵が集まっていた場所に巨大な十字架が現れ敵を殲滅する。

「龍宮、術者は見つかつたか？」

『「ああ、今とらえ終わつたとこだ。学園長への報告は私がするから先に帰つていいよ』

「よろしく頼むぞ。チャチャゼロ、帰るぞ」

「モウ終ワリカヨ、旦那切リアオウゼ」

「勘弁してくれ、早くベットに飛び込みたいんだ」

「ショウガネエ、今日ハ勘弁シテヤルヨ」

次の日の放課後

「ということでいつものように君たちが残つたわけだが…」
目の前には綾瀬、長瀬、クー、佐々木、神楽坂の五人。通称バカラ
ンジャーがそろつた。

「君たちを見ると私に教師の才能がないといつことがよくわかる
よ…」

「いーのよ別に勉強なんかできなくても、この学校エスカレータ式
だから高校まで行けるのよ」

神楽坂はそう言うがな。

「別に進学のために勉強しろと言つてるんじゃないんだ。君たちには
は好きなことがあるだろ？友達とお喋りすることだつたり、部活で
頑張ることだつたり、好きな人のことを思うことだつたり、学生の
うちはそういうことに励めばいい。それはいいことだ。だけど、頭
の固いやつが偶にいるんだ。学生の本分は勉強だ。とかそんなこと
してる暇があるなら勉強しろ。とか自分たちの思い通りに学生たち
の未来を決めようとするやつらがな」

「クラスさんがそうだったんですか？」

綾瀬がマシユマロカレースープという紙パックジュースを飲みなが
ら聞いてくる。

「私はどうしても恩師の研究を受け継ぎたくてな。その研究は他の
奴らからは不可能だとかあり得ないとか言っていたがな」
いつも大事にしてある帽子を撫でながら言う。

「話がずれたな、まあ、私が言いたいのは好きなことをしてみたい
なら、勉強ぐらい軽くこなしてみろつてことだ。今日の補習はこれ
で終わりだ」

「クラスさん一つ聞いていいですか？」

綾瀬が相変わらずジュースを飲みながら聞いてくる。

「その研究はどうなつたんですか？」

「頭の固いやつの驚く顔は傑作だつたや」
綾瀬の頭を軽く叩きながら教室を出る。

図書館島

「綾瀬か…どうした?」

「数学教えてくださいです」

綾瀬がノートと教科書を開きながら私の向かいの席に座る。
「で、なんで急にやる気出したんだ?」

「学校の勉強なんかに私の好きなことお邪魔されたくないですし、
頭の固い人を驚かせるほどの研究にも興味あるです」

「そうかそうか、そう言つてもらえるのはうれしいが私の研究を教
えるわけにはいかないな」
「なぜです?」

「君はまだ若いんだもう少し世界を見る必要がある」

「くだらない世界をですか?」

「ふつ、確かにくだらない世界かもしれないが、少なくとも君の周
りはそんなことないと思つけどな」
「……」

「まあ君がいろんな世界を見てそれでも私の研究が気になつたら私
のところに来い。少しなら教えてやるつ」

エヴァ宅

「クラース、手紙だ」

「手紙?」

エヴァから手紙を受け取るともつすぐにひらひらと音「ひねギ君か
らのものであつた。
「随分とうれしそうじゃないか?」
「そうか?」

「まあ、私もだがな、これでやつと悪々しい呪いが解ける!」
ネギ君。まあ、その、なんだ。こうあはいろいろ大変だから覚悟し

ておけ。

召喚士と警備とバカレンジャーと（後書き）

次回原作突入です。
感想待つてます。

召喚士、少年のサポートをする（前書き）

原作突入です。

召喚士、少年のサポートをする

学園長室

「では指導教員を紹介しよう。入っていいぞい」「失礼します」

「久しぶりです！クラスさん！」

「久しぶりだなネギ君。元気にしてたか？」「ネギ君の頭をなでてやる。

「クラスさん。そいつの知り合いなんですか？」

「ああ、一度会ったことがあってね」

神楽坂の質問に答えている。

「そうそうもう一つ。このか、アスナちゃん、しばらくはネギ君をお前たちの部屋に泊めてもらえたんかの？」

「げ」

「え、」

「ええよ」

三者三様の反応をした後、神楽坂は学園長に猛抗議し始めた。

「なんで私たちの部屋なんですか！？クラスさんの部屋でいいじゃないですか！」

「あ～、神楽坂。私は居候の身でなネギ君を止めることができないんだ」

「そんな～、と言ひながら座りこむ。

「クラス君には少し話があるから残つたくれるかの。三人は教室に向かいなさい。しずな先生頼むぞい」

「ネギ君にあのクラス担任をやらせるんですか？」

学園長に話を聞くと今日から教師になるネギ君が2・Aの担任なるようだ。

「つむ、あのクラスならネギ君にいい影響を与えると思つしの、そ

れに君の近くの方がいいじゃろ」「わかりました」

少し遅れて教室に向かうと丁度ネギ君が入るところだった。

「失礼しま……ん？」

ふわりつ。

何やつてるんだ！？なぜ障壁なんか張つてる…？

ボフッ。

「ゲホゲホ！いやー、引っかかっちゃたなあ。ゴホ！」
気付いたか…やれやれ、先が思いやられるな。

「へふつ！？あぼーああああああああ、ぎやふんつ！？」
このトラップは春日と鳴滝姉か、特別課題だな。その後ネギ君の自己紹介が終わりクラスの皆さんにもみくちゃにされている。

「クラス先生。マジなんですか？」

「学園長が大マジだ。まあ、私がサポートするから大丈夫だとは思うが…。あ、それとあのトラップは春日と鳴滝姉だよな？」

「そうです。…子供が先生つて」

長谷川が頭を抱えて席に戻った。あの子には学園長が言つていた認識阻害魔法が聞いてないみたいだな。

ちなみに授業はいつの間にか始まつた神楽坂と雪広の喧嘩のせいで失敗に終わった。

「やつぱりネギ君を担任にするのは早すぎるだろ…ん？あれは…」
少し離れたところでネギが神楽坂に連れていかれていった。あとには散らばつた本と富崎が呆然としている。

「どうした？ 富崎」

「あ、クラスせんせー。さつき、階段から落ちたとこをネギせんせーにたすけてもらつたんですけどアスナさんが…」

「あー、もういい大体はわかつた」

おそらく魔法がばれたんだろう。初日でばれるとは…あとでネギ君

に注意しないとな。

たのか？」

「やえたちは歓迎会の準備があつて、ネギ君の歓迎会か。

「そういうときは私を頼れ。いいな？」

「は、はい！」

「何処まで運べばいいんだ?」

参 飯堂にお願いする事

『一七九』

「なんで」

「あなた」

ネギ君 これ以上問題を起こさないでくれ…

ネギ君の歓迎会が無事（？）に終わり解散となつた。

「ええ、どうぞ、アーマー機械」

「どうしたの?」

「ネギ君。魔法のことばれただろ？」

をひきと芥井君かかなに焦り始めた

「クラスさんも魔法使いなの！？」

「落ち着け——人とも」

その後どうして魔法かはれたかを聞いた。

「宮崎を守るために…なら仕方ないな。だが、ここでは必要以上に魔法を使うな。ここはあの村と違つてほとんどが一般人なんだから

「うん」

ネギの頭を軽く撫でてやる。

「で、神楽坂」

「心配しなくとも魔法のことは言わないわよ」

「いや、そうじゃなくてな。ネギ君は頭はいいがまだ人として未熟だ。だから君たちで導いてくれちゃんとした人になれるようにな」
ネギと同じように頭を撫でながら言う。

「私が言いたいのはそれだけだ。また明日な」

夜

「どうしたんだい？ クラース先生。難しい顔をして？ 子供先生のことかい？」

夜の警備をしている時考え方をしていたら龍宮が聞いてきた。

「いや、桜咲のことだ」

「わ、私ですか？」

いきなり名前が出た桜咲が聞き返してきた。

「さつきまで小テストの採点をしてたんだがな……綾瀬の点数が上がって来てて桜咲の点数が下がって来てるんだ。このままだとバカレンジャーのメンバー入れ替えになりそうだぞ」

「そ、それは、お嬢様の護衛で勉強に身が入らなくて……」

「そうか、私の授業では桜咲の手の甲に近衛を狙う鬼が現れるのか授業中刹那が手の甲をつねつて眠気を飛ばしてゐるのを何度も見たことがある。」

「そ、それは……」

「くくっ、それは大変だな刹那。なんなら私が撃ちぬいてやろうか？」

「ケケケ、俺ガ切ツテヤルヨ」

「待て、一人とも。相手は桜咲でも手こする相手だぞ。こにはタ力ミチにも協力を頼んで……」

うろたえる桜咲を三人でいじつていると

「これからはしっかり聞くので、もう勘弁してください！」

そろそろ許してやるか。

「まじっ

プリントを一枚、桜咲に渡す。

「これは？」

「お前が寝そなつてた授業の要点をまとめたものだ。しつかり復習しとけよ。今度のテストで点数落とすよつなら補習組に入れるからな」

「わかりました…」

さてと、もう少し遊ばせてもらつか。

「しかし、どうするクラス先生？もしかしたらすでに刹那は鬼に乗つ取られているかもしけないぞ？」

「そうか、その可能性を考えてなかつたな…」

「コイツゴト切り刻メバイイジャネエカ」

「それは最終手段だチャチャゼロ。私が以前見た文献に心の精霊について書かれていた、そいつと契約できれば…」

「そんなこと悠長な」と言つてゐる場合か！？」こつなつたら核がある左手を撃ちぬいて…」

「もうやめてください…！」

召喚士、少年のサポートをやる（後書き）

感想待つてます。

召喚士、画倒事に巻き込まれる（前書き）

新しい精霊が出ます。

召喚士、面倒事に巻き込まれる

「理論的にはこれでいいはずなんだが…」

足元には巨大な魔方陣とその中心にある狐のぬいぐるみ。

「随分と面白そうなことをやっているじゃないか?」

「エヴァか…」

「で、何をするつもりなんだ? また新しい技でも開発したのか?」

「残念ながらそれはまだだ」

「クラースさん。これでいいでしようか?」

エヴァと話していると茶々丸が円柱状の台を四つ持つててきた。

「ああ、それでかまわない。それをさつき言った場所に並べてくれ

「ハイ、わかりました」

茶々丸が四方に台を並べる。

「よし。魔方陣から出ててくれ。…地水火風の精霊たちよ。汝らの力の一部を我に貸し与えよ」

エヴァたちを外に出し地水火風の精霊の力の一部を茶々丸が置いた四つの台の上に召喚する。すると魔方陣が光出した。

「おい、何をする気だ?」

「心の精霊を呼び出す」

右手で印を結びながら答える。

「呼び出すだと? 可能なのか?」

「ほかの精霊と違い心の精霊は人間が生み出した精霊だ。ほかの精霊よりは呼び掛けにこたえてくれるだろう。では、始めるぞ」

『我、いま人が生み出し精霊に呼びかける。我が声が届くのならばその姿を現せたまえ。我が名はクラース・F・レスター人と精霊を繋ぐものなり…』

クラースが唱え終えると魔方陣の光が増し、その光がおさまると巨大な狐の姿をした精霊がいた。

「私は心の精霊ヴェリウス。あなたが私を呼んだのですか?」

「そうだ。あなたと指輪の契約を交わしたい」

クラースが呼びかけるがヴェリウスはクラースのことをじっと見ている。

「どうしたんだ？」

「…あなたはなぜ精靈と契約を結ぶのですか？」

「私は…」

何のためだ？恩師のため？あいつのため？マーテルのため？エヴァのため？ネギ君のため？それとも私の自己満足のためか？

「いいでしょ。あなたの心からは悪しき思いは感じられません。

カルサイトの指輪を」

「…ありがとう。…我、いま心の精靈に願い奉る。指輪の盟約のもと、我に精靈を従わせたまえ…。我が名は…クラース・F・レスター

」
ヴェリウスが光となり契約の指輪に宿る。

「…悪しき思いか」

エヴァが何かつぶやいていた。

次の日

「…じゃあ、一時間目を始めます。テキスト76ページを開いてください」

エヴァの隣に座つてネギ君の授業を見ている。ネギ君はどんな授業をするのかな？

「The fall of jason the flower .

…

さすがに発音はいいな。

「じゃあ、今のところを誰かに訳してもらおつかな」
ほとんどの生徒が顔をそらす。神楽坂なんかそんなに回して大丈夫なのか？と思つぐらにそらしている。

「……じゃあ、アスナさん」

「なんで私なのよ！？」

ネギ君。少しは察してあげなさい。まあ、私もあてたことはあるが

……。

「えーと……ジエイソンが……花の上……に落ち春が来た？……」

「アスナさん勉強だめなんですねえ」

「なつ！？」

今のはダメだなネギ君。

ゴンツ！

持つてた本（もちろん背表紙）でネギ君を殴る。

「…………！？何するんですか！？クラースさん！」

「神楽坂は勉強はできないが誰かのために動くことができるやさしい子だ。いい先生になりたいなら学力だけで生徒を判断するな」

そういう席に戻るとエヴァが話しかけてきた。

「なかなかいいことを言つじゃないかクラース先生？」

「私の幼馴染の言葉だよ」

放課後

やれやれテキストを忘れてしまつとわな。

「あつ、クラース先生。家庭科で野菜ジュース作つたんですけど飲みませんか？」

神楽坂が赤色の野菜ジュースを渡してきた。

「丁度のどが渴いていたんだ、ありがとう」

ゴクッゴクッ！

なんか変わつた味だな？

「なんにも起こんないじゃない」

「おつかしーな」

何か一人で話てるがどうしたんだ？

「クラース先生……」

「どうした？近衛」

「先生つてよく見ると、なんかすゞいかつこえーなー」

「よく見ると他の生徒も顔を赤くしてこっちを見ている。」

「先生、どうぞこれを…」

「先生これ食べてー。家庭科で作つたの一ー」

「明らかにおかしいな。」

「ネギ君に神楽坂、後で聞きたいことがあるー…?」

「パンツ!」

「おいおい龍宮その銃で何をするつもりなんだ?それと桜咲、なぜ刀を抜いてるんだ?」

「くそつ!」

急いで教室から出る。

「「「クラースせんせーーー!」」」

「くそつ、どんどん増えてくる。どこか身を隠せる場所はないか?」

「クラースさん!こっちです!」

ネギ君がいる部屋に駆け込むとアスナが扉を閉め鍵をかけた。

「はあはあはあ…一応聞いたくがさつき私が飲されたものはなんだ?」

「ほ、惚れ薬です」

「なんでそんなものを作つたんだ?」

「実は…」

朝のお詫びに神楽坂が前に欲しいと言つてた惚れ薬を作つたが、神楽坂はそんな怪しいものはいらないと思つて丁度來た私に飲ませたと。

「ネギ君ここでは魔法を使うなといつたひ、それと神楽坂、そんな怪しいものを人に飲ませるな」

「本で一人の頭を軽くたたく。」

「「「」めんなさい」」

「まあ、過ぎたことを言つてもしうがないか。二人は誰も入らなにようにしといてくれ」

「こんなことに精霊の力を借りたくないが…」

「心を見し狐よ、契約に従い我に力を貸し与えよ。ヴェリウス！」
「うまくいっててくれよ。

「心を司りし精霊よ、不浄を退ける力となれ、リキュペレート！」
「これで大丈夫なはずだ。

「神楽坂みんなが元に戻ってるか様子を見てきてくれ」
「わかったわ」

「それでも疲れた。

エヴァ宅

「今日は随分と楽しそうだつたじゃないか？」

「家に帰るなりエヴァがそんなことを言つてきた。

「エヴァも同じ立場になつたらそんなこと言えなくなるぞ」
一般の生徒はともかく龍宮や桜咲まで武器持参で来たんだ。

「あの二人にハートを撃ち抜かれそうになつたからな。殺意がない
分逆に怖かった」

召喚士、面倒事に巻き込まれる（後書き）

感想待つてます。

召喚士、図書館島に行く（前書き）

期末試験です。

召喚士、図書館島に行く

学園長室

「ネギ君への最終課題ですか？」

「つむ、それで君には『お届け』でもらいたいんじゃ

「くつ？」

地底図書室

「本当にこんなところに来るのか？」

学園長に言われたとおりに変装はしたが、魔法の本のうわさだけでここまで来るとは思えな…。

ザッパーん！

どんな行動力だまつたぐ。

「ん、じじは？」

「…つて、じじはじじなの…！？」

よひやく起きたか。

「よひこそ地底図書室へ」

「誰です？」

「私はここの中の管理人の一人、藤林すずです」

「管理人さんか？」

「なら、早く出口教えてよ～」

全く生徒のためとはいえないんでこんなことを…。

「それはできません。あなた方にはこれからテストまでここで勉強をしてもらいます」

「なぜで？」「やるか？」

懷から魔法の本を出す。

「あなた方はこれを求めてじじに来たのでしょ？」「…」

「メルキセデクの書…」

ネギ君、魔法関係のやたらといつんじやない。

「魔法の本につられてここまで来た者には特別補習を行つことになつてます」

「そんな」とバカレンジャーがへたり込む。

「それでは勉強スペースに案内します」

すると後ろからぐぎゅ~っ!と音が鳴つた。振り返るとバカレンジャーが顔を赤くして俯いている。

「ここにいる間のお食事は私が準備します。朝食の準備もできていますよ」

「「「やつた~」「」」

どうやらしつかりできてるな。私も手伝つつもりだったがネギ君一人で大丈夫か。この分ならテストで最下位脱出も大丈夫だろつ。

「すず殿。ちょっとといいでござるのか?」

「どうしました?長瀬さん」

大体聞きたいことはわかるが…。

「お主は忍者でござるな?」

「そう言つあなたもそうでしょ?」

「甲賀中忍、長瀬楓ござる」

「伊賀栗流、藤林すずです」

「聞かない流派でござるな?」

「この世界では私しか使い手はおりません」

「フム、いつか手合させ願いたいものでござるな」

「ええ、いつか。それより勉強の方はいいのですか?」

「にんにん、大丈夫でござるよ、では」

戻つたか、そろそろ食事の準備をするかな

テスト前日

「きやあああああああつ!」

「なにがあつた!?」

「フォフォフォ」

目の前には水浴びをしていたと思われる、佐々木、クー、長瀬の三人と佐々木を捕まえていた学園長の声を発するゴーレム。学園長にはお仕置きが必要だな。

「あれは地底図書室を荒らすゴーレムです。クーさん。長瀬さん。あれを倒すのを手伝ってください」

任せ
せるアル！」

「了解でござる」

「アホ！？」

ケーが足を殴って動きを止めた瞬間長瀬が佐々木を助けて出す

二人とも下がってください 忍法・雷電！」

ప్రశ్న

「みなさん! 滝の裏に非常口があります。そこに向かってください」「つかひ 一二〇。みんな行こう。

卷之三

卷之三

「おまえ、おまえが何者かは分ったが、どうが？」

「なに。ちょっとしたお茶目じゃね」

そですか なん 忍法・兜雷也！ 来し！

「ちゅうじつしたお茶田ですよ園長、

テスト当日

「まったく、あの子らは遅刻ですか」

「新田先生が時計を見ながらつぶやく。

「新田先生。彼女らのことは私に任せて教室に行つてください」

「それじゃあ、クラース先生頼みます」

キーンコーンカーンコーン

「遅刻！？」

「やつと来たか。お前たちは別教室だついてこい」

「あつ、クラース先生」

別教室

「さて、テストを始める前に神楽坂、綾瀬、クー、長瀬、佐々木の

五人に言いたいことがある」

五人がこちらを見る。

「地底図書室の管理人から話は聞いた。よく頑張つたな」

「「「「「はいっ！」」」」

「それじゃあ、テストを始める。試験時間は…」

クラス成績発表後

「どこに行くんだ？ネギ君」

「荷物をまとめて駅に向かうネギ君を呼びとめる。

「故郷へ帰ります」

「君の夢はそんなに簡単にあきらめられるものなのか？」

「それは…」

「それに君のために頑張ってくれた彼女たちに何も言わないのは失礼じゃないのか？」

そう言つて後ろを向く。そこにはネギを止めるために走ってきたバ

カレンジャーと図書館探検部の皆が。

「いまさら会わせる顔がないです」

逃げようとするネギ君を捕まえ、彼女たちに渡す。そして後ろから歩いてきて言う学園長のもとへ行く。

「学園長。その合計し忘れた彼女たちの点数を早く彼女らに伝えてやつてください」

「クラス君は見ないのかの？」

「地底図書室で彼女らの世話をしたのは私です。見なくともわかります」

召喚士、図書館島に行く（後書き）

感想待つてます。

召喚士、彼女を想う（前書き）

お楽しみください。

召喚士、彼女を想う

春休みのある日の夜

クラースの荷物の中に入っていた森を思わせる深緑色の宝石が輝きだした。

「エレメントオープが光っている？…まさかっ！？」

その輝きを見るなりクラースはあるところへ向かって走り出した。

「おい、クラース。そんなに慌ててどこに行くんだ？」

「世界樹だ！」

世界樹

「世界樹が光ってるだと？」

私の後ろについてきたエヴァが光り輝いている世界樹を見て驚きの声を上げる。

「マーテル！そこにあるんだろ！？」

エレメントオープを掲げ、大樹の精靈に呼び掛ける。すると、世界樹の光が一か所に集まりマーテルの姿となる。

「世界を渡りし召喚士、クラースよ。よく来てくれました」

「あなたがここまで来たんだ。何か問題が起きたのか？」

「この世界もしくはあちらの世界で何かが起こったのか？」

「心配ありません。どちらの世界でも何も起つてません。今日はあなたに渡したいものがあつてきました」

「私に渡したいものだと？」

「はい。一つは時の魔剣です。いざれ必要になる時が来るでしょう」

マーテルが渡してきたエターナルソードを苦笑しながら受け取る。

「せつかく私が封印したのにな」

「もう一つはミラルドからです」

「ミラルドから？」

マーテルの足元にはたくさんの書物が置かれていた。

「あなたにこれから必要だと言われておりました」

そこには私が集めた魔道書や古文書、論文などがあった。

「やうやく限界のようです。『つか』の世界に悲しみの涙が流れないよ。…」

そう言い残すとマークは光に戻り世界樹の中に入つて行った。世界樹は2、3回点滅を繰り返すといつもの世界樹に戻った。

「悲しみの涙が流れないよ。…。か

エヴァが後ろでポツリとこぼした。

エヴァ宅

『クラースへ

元気にしてますか？誰かに迷惑をかけていませんか？変な意地張つたりしていませんか？まあ、返事は無事帰つて来てからでいいわ

『相変わらずだな』

『私は元気です。学校の方も順調です。ただ、生徒たちが帰つた家の中がいつも以上に広く感じます』

『……』

『早く帰つて来て未来についてあなたの話を聞かせてください』

『…まだ、先になりそうだな』

『まあ、精霊さんに頼んでまで帰ると書いてくれたのでその日が来るまで待つてあげる』

『必ず帰るよ』

『この手紙と一緒に精霊さんに送つてもらつたのは、あなたが集めていた本とあなたが旅に出ている間に見つけた役に立ちそうな本です。足引つ張らないようにしつかり研究続けるように』

『言われなくてもわかつてゐる』

『あと、あなたが好きなチエリーパイのレシピも送つてもらつたから。自分で作るなり、誰かに作つてもらうなりしてください。それでは、また会える日まで。』

ミラルドより』

読み終わり手紙をしまつているとキッキンからいい匂いが漂つてきた。

「チエリー・パイが焼けました」

茶々丸が焼きたてのチエリー・パイを持つてキッキンから出てきた。

「うまいな

エヴァが一口かじつてそう呟く。私も一切れ取り口へ運ぶ。私の好きな甘さ控えめのチエリー・パイが口の中に広がる。私、エヴァ、チヤチャゼロ、茶々丸の四人で食べ、チエリー・パイはすぐになくなつた。

召喚士、彼女を想う（後書き）

感想待つてます。

召喚士、氷の精靈と出合つ（前書き）

感想、ありがとうございます。

精靈を過小評価していると書かれてましたが、設定としてはクラスは詠唱を短縮しているので威力は抑えられています。

クラスの強さとしては『紅き翼』の連中と同等かそれ以上。前衛がいれば負けることはない。

という感じです。

召喚士、氷の精霊と出合づ

朝起きたら山が凍っていた…。

「…ヒヴァ。おまえなんかやつたか？」

「私は今封印されているんだぞ。おまえの精霊じゃないのか？」
まわりにはかなりの数の野次馬がいる。異常気象だの、化学兵器だ
のいろいろな憶測を並べ立てている。

「とりあえず、学園長のところに行くか」

「せうだな」

学園長室

「せつぱりわからん」

学園長に山のことを見たが案の定の呪詛だった。

「むしろ、ワシが聞きたいくらいじゃ。クラース君。こんなことできる精霊はあるのかの？」

「氷の精霊、セルシウスならできるかもしれないが今のところとも言えないな情報が少なすぎる」

「そうじゃのう。このことはクラース君に任せても良いかの？ ほかの先生たちは野次馬を納めるのに手いっぱいなんじゃ」

「かまわないが…」

「それじゃあ後は頼んだぞい」

エヴァ宅

「やはり情報が足りないな」

わかったことは山が凍ったのは深夜に一瞬として凍つたらしい。これは天文部の那波に聞いたものだ。後はまあ凍った場所はイフリートの力でどうにかなるということだ。原因を取り除かなければ意味がないが。

「ん？ そう言えば長瀬があの山で修業していたな」

ポケットから携帯を出し長瀬に電話をかける。

『クラース殿何か用でござるか？』

「ああ、氷漬けになつてゐる山つて長瀬の修行場だつたよな？何か最近変わつたことはなかつたか？」

『特に何も……いや一つあつたでござる』

「なんだ？」

『昨日、山から下りる時、不思議な御仁を見かけたでござる』

「どんな奴だ？」

『肌が氷のようになつて青くて、青色の狼のような動物を横に連れておつた』

「わかつた、ありがと」

『あいあい。このくらいお安い御用でござるよ。それでは…』

電話を切り古文書を開く。

『氷のような肌に狼か…』

次々とページをめぐり、新しい本を開いていく。

『これも違つこれも…ん？…これだ！』

ページをめぐつていた手の動きが止まる。

『氷の精霊は、氷の肌を持ち蒼き狼を従えるか…』

やはり氷の精霊か…しかしながらこんなところに？精霊は本来自らを奉るところから動かないはずだが。シルフのようになつてゐるのか？いや精霊が本氣を出せば学園都市まで凍つてゐるはずだ。ということはまだ自我が残つてゐるのか？どちらにせよじつかり準備しないとな。

『やはり精霊か？』

エヴァが後ろから覗きこみながら言つ。その言葉に頷きながらケータイを開く。

『龍宮か？氷漬けの山の件で仕事だ。…ああ、刹那もいるなら呼んでくれ。…請求は学園長に頼む。…それじゃあ、エヴァの家の前に来てくれ。それじゃ』

ケータイを操作し学園長にかける。

「クラースです。氷漬けの山は精霊の仕業だと思われます。それですねおそらく戦闘になると思いますので周りに結界の準備をしておいでください。お願ひします」
それじゃあ準備を始めるか。

エヴァ 宅前

あの旅の時と同じ服に着替えて外に出ると丁度一人が来た。
「さて、クラースさん私たちは何をすればいいんだい？」
銃を持つた龍宮が訪ねてくる。

「これから氷の精霊と戦いに行く」

「氷の精霊が山を凍らせたのですか？」

「おそらく、漏れ出た冷気が山を凍らせたのだろう」

桜咲の疑問に答えると龍宮が焦った声で聞いてきた。

「漏れ出た冷気だけで山を凍らせるつて、本気を出したらどうなるんだ？」

「少なく見積もっても学園は簡単に凍るだろ」

二人が信じられないという顔をしている。

「そんな相手に勝てるんですか？」

桜咲が刀を握りしめ言う。

「心配することないぞお前たち。クラースはそんな相手と同等以上の力を持つものを使役できるんだからな」

いつの間にか来ていたエヴァが一人に言う。

「そう言つことだ二人とも。今回は精霊の状態が不安定だから念のためにお前たちを呼んだんだ」

そう言つと一人が胸をなでおろした。

「さて、それじゃあ準備を始めるか。この魔方陣の中に入ってくれ自分の足元に書かれている魔方陣の中に龍宮、桜咲、それとチャチャゼロを招き入れる。

「粗暴な紅蓮の猛者よ、焰王の従士よ、一時の間、汝らの力を我らに貸し与えよ。我らの剣となり、盾となれ。イフリート！ フラムベ

ルク！

四人に紅蓮を想わせる紅い鎧がつけられる。また、クラースの手には紅い大剣。チャチャゼロには双剣が持たされた。龍宮と桜咲もそれぞの武器に赤い光が纏つた。

「それじ、せいかにいりか

凍つた山

「誰だ!? そこにはいるのは!」

クラス達が頂上にたどり着くと青い肌をした女性が氷づけされた
巨大な狼の前に座っていた。

「私はクラス・F・レスラー。召喚士だ」

「そうかお前が……。私はセルシウスだ。クラス。おまえを優秀な

召喚士として頼みがある。我が従者フェンリルを殺してくれ」

なせた

「フェンリルは大量の瘴気を喰らい体内に取り込んでしまった。も
はや助かる見込みはない。それにそろそろ私の方も限界だ」

そつ言つセルシウスは今にも倒れそうだ。

頼む
龍宮
セリシウスを安全な場所へ
その後は遠くから探詰身騒ぎ

「了解」

そう言うとセルシウスを抱えて山を下りていく。

後ろに下がりながらそう言つ。

- はし = !

「アーヴィング、お前がアーヴィングだ！」

「いぐぞ！ 吼えよ！ 古の炎！ 不淨の生命を灰燼へと誘え！ エンシェントノヴァー！！」

浄化の炎が氷で動けないフェンリルに炸裂する。

「斬空閃！秘劍・百花繚乱！！」

シタハ備ニ熱クサセテクレニ!

怯んだすきにチャチャゼロと桜

「**「
いけるか？焰の御志よー？くつー**」
みし

詠唱を始めようとしたら氷から出てきたフヨンリルが突進してきた。

「一二二ハラバハラ番ハ

「行わぬか！」

「イクゼエ！」

桜咲とチャチャゼロが切りかかるが巨体に似合わぬ俊敏さで避けら

ないみたいだ。まずは動きを止めるか。

崩せ！

『GAA!』

ハリムによる「アモリル」が崩れ、アモリルが体勢を崩す。

その「おおむね」が、

『GAAAAAA ! ! !

「一人とも離れろ！業火よ、焰の檻にて焼き尽くせ！イグニート！」

リズン！」

「焰の御志よ！汝に触れし者を全てを滅さん！」エクスプロード！炎でフエノリルを囲む。

!

上空から大型の火の玉が落ちてきてフェンリルに当たった瞬間大爆発を起こした。

爆発が収まるとそこには何も残っていなかつた。

絶れ一
たた

エヴァ宅

「あ、かとハリヤーおじた」

「わかりました。それではアズライトの指輪を

「我、いま氷の精に願い奉る。指輪の盟約のもと

せたまえ。我が名は… クラース・F・レスター」

これで終わりか。
。

小学数学

「あれ? どうも、かの」「え? あれ? どうも、かの?」

「隕石衝突か!?」

「一晩にして山が凍るという不可思議な事件が起つた裏山だがそ

らかの関係があるのではないかと思われます。一部では隕石隕落や
化学兵器など様々な憶測が……」「

召喚士、氷の精靈と出会い（後書き）

感想待つてます。

新学期です。

新学期です。

今日から新学期またあの騒がしい彼女たちの相手をするのか。

全く朝から元気だな。これが若さか。

「えと……改めまして3年A組の担任になりました。ネギ・スアリン
グフィールドです。来年の三月までの1年間よろしくお願ひします」
「副担任になつたクラスだ。よろしく」

Γ Γ Γ ΤΖΟΖΛΛΑ — Γ Γ Γ

エヴァがネギを鋭い目で見てる。…ああ呪いのことだから。そんなことを考えていたらしづな先生が教室に来た。

「ネギ先生 ケリー先生 今日は身体測定ですよ 3-Aの誰もすぐ準備してくださいね」

「あ、そうでした。ここでですか!?」わがりました。しかし、先生」何か嫌な予感がするので廊下に出る。

問題発言だぞネギ君。

「間違えまい」といふ

そう言いながらネギ君が廊下に飛び出してきた。

一 落ち着きが足りないそ。
ネギ君」

「そうですね。みんなの先生なんだからもつとしつかりしないと…」「その意気だ、ネギ君。私はやることがあるので後は頼んだぞ」

「はい」

ネギ君の頭を撫でて職員室に向かつ。

桜通りを通りると近衛が裸の宮崎を抱えてわたわたしていた。

「近衛どうしたんだ？」

スーツを宮崎に掛けながら近衛に聞く。

「とりあえず、宮崎を運ぶぞ」

「わかつたえ」

全くエヴァめ。私の仕事を増やしあがつて。女子寮につき宮崎を近衛に頼んでネギ君たちの様子を見に行くことにする。

「ウチの苗族に向すんの女——つ

すごいなアスナ。エヴァの障壁を破るなんて。

「どうあえず連れて帰るか」 乃一 チエ

筈は乗り出すと茶々丸を回収して家に帰る
ついでアラナが何か

エヴァ宅

「なら私の血を吸え、魔力の

「それは私側に着く気になつたといつ」とでいいのか?」

前はモ言つたとおり和は中立が命の危険がない限りは出でな

「ふんつ、まあいいや… ではいたゞくところ

二
日
後

ネギ君が方にオコジヨを乗せていた。あれが以前文献で見たオコジヨ妖精か……。また今度見せてもらうか。それより。

「今日も待つたりサボらせてもらつよ。」

「残念ながら1時間目の私の授業は強制参加だ」エヴァを猫のように持ち上げ教室に連れていく。

「クラス！？何をする放せ！」

「教室に着いたら放すさ」

教室で話した後、茶々丸に頼んで逃げないようにしてもらつた。

放課後

チエリー・パイを食べながら街をぶらつく。チエリー・パイは春休みからよく茶々丸が作ってくれるようになった。

「どこに行くかな…。そう言えば茶々丸が言つてた猫広場つてこのあたりだつたよな」

しばらくしてたどり着くとそこでは戦闘が行われていた。

「魔法の射手連弾・光の11矢！！」

「追尾型魔法、至近弾多数…避けきれません。すいません、マスター…。もし、私が動かなくなつたらネコのエサを…」何やつてるんだ！！

「ノーム！彼女を守れ！」

地面が盛り上がり茶々丸を守る。

「え、クラスさん！？」

ネギ君が驚いてこちらを見る。神楽坂やオゴジヨも同様にこちらを見る。

「やいてめえなんで邪魔をするんでえ！」

オゴジヨが何か言つてるが無視して茶々丸に話しかける。

「大丈夫か？」

「ハイ。ありがとうござります」

「なら先に帰つている。私はネギ君たちに話がある」

「わかりました」

そう言つて家に向かつて歩き出す茶々丸。それを見送つた後ネギ君と向かい合つ。

「…クラースさん。クラースさんもエヴァンジエリンさんの味方なんですか？」

ネギ君が杖を握りしめながら聞いてくる。

「私は中立だ。命の危険がない限り手は出せない」

「兄貴騙されちゃあいけませんぜ。奴もさうとエヴァンジエリンの仲間だ今のうちに姉さんと二人で倒すんだ！」

なるほど！」のオゴジヨがネギ君を…。

「少し黙つてくれないか、オゴジヨ君。話がややこしくなる。とりあえず座ろうか」

近くのベンチを指せしながら言つた。

「クラースさんはエヴァンジエリンさんとはどういう関係なんですか？」

ベンチに座るなりネギ君が聞いてきた。

「友達以上家族未満つて感じかな。教師になる1年ぐらい前から一緒に住んでる」

「じゃあ、やっぱエヴァンジエリンさんの仲間なんですね」

「さつきも言つたがこの件に関しては命の危険がない限り中立だ」

「じゃあなんでさつき手を出したんでい」

オゴジヨが言つがそんなの決まつてる。

「もちろん命の危険があつたからだ」

そう言つとネギ君がびくつと身を震わせた。神楽坂も俯いている。

「でも、相手はロボットですぜい」

「ロボだろつと私が知つてゐる茶々丸は彼女だ。たとえ姿が同じだろつと記憶を持つていよつとも作りなおされたのならそれは私の知つてゐる茶々丸ではない

オゴジヨも黙つてしまつた。

「そう言つことだネギ君。他人の言葉に惑わされずに自分で考えて行動する。それと神楽坂、ネギ君が間違えたときには君が教えて導いてあげるんだ。それじゃあな」

ネギたちの頭を軽く撫でて家に帰る。

エヴァ 宅

「さつきはありがとうございました。しかしなぜ私を助けてくれたのですか？私が壊れても記憶のバックアップはしてあるので何度も直せます」

「ネギ君達にも行つたが、私が知つてゐる茶々丸は君だけだ。たとえ記憶があつても作りなおされたのならそれはもう別人だ」

「…よくわかりません」

「理解しなくても良いさ。私が好きでやつたことだ」

「…クラースさん。今日の夕飯は何が食べたいですか？」

「さつきまでと話がつながらないぞ。

「急にどうしたんだ？」

「お礼をしたいんです」

お礼か。

「やつつか…。ならマー ボーカレーが食べたいな」

「マー ボーカレーですか？」

「向こうの世界の食べ物だ。確かこの前チエリー パイのレシピと一緒に送られてきたはずだが…あつた。これだ」

この前送られてきた本の中からレシピを探し出して茶々丸に渡す。

「わかりました。では夕食を楽しみにしててください」

夕食

「うつうまい！？茶々丸おかわりだ！」

やはりうまいなマー ボーカレーは。

「茶々丸私もおかわりだ」

「ハイ、クラースさん」

「ほんとうにうまいな…。しかも何かが回復しそうなつまさだ」

エヴァが満足げに語つている。

「RPGで言うならHPとTPだな」

「どれくらい回復するんだ？」

笑いながらエヴァに聞く。

「もちろん全回復だ！これさえ食べればボス戦も楽勝だ！」

「私たちは味噌おでんを食べたがな。今度リクエストしてみよつ。

マー ボーカレーをつまみ食いしまくったのはここに思い出です。 もうそろそろなくなるんじゃね？といつぐらいて食べました」というふうに食べました。ボアと戦つころには鳳凰天駆を覚えてました。感想待つてます。

召喚士、見守り看病する（前書き）

エヴァが風邪をひきます。

召喚士、見守り看病する

田羅口。ネギ君がどんな答えを出したのか聞きに行こうとしたら神楽坂とオコジヨが走ってきた。

「どうした？ そんなに急いで」

「あ、クラースさん。ネギ見なかつた？ セツセ飛び出して言ひちやつて」

どうやらまだ答えを見つけてないようだな。まあ、これくらいは手伝つてやるか。

「神楽坂。ネギ君は琥珀のペンダントをしていたか？」

「琥珀のペンダント？ 確かつけてたよつな……」

なら大丈夫か。

「アレフよ。ネギ君のところまでこの指輪を導け」

そう唱えると契約の指輪から光が伸びる。

「！」の光の先にネギ君がいる。指輪はまた今度返してくれればいい「神楽坂に指輪を渡しながら言つ。

「ありがとう。クラースさん」

そう言つなり神楽坂は走つて行つてしまつた。

「私も様子を見に行くか…すず」

そう唱えると木の葉が舞い上がりそれが収まるころにはクラースの姿はなくなつていた。

翌朝

『ありがとう、長瀬さん。ぼく…なんとか一人で頑張つてみます』
そういうネギは簾に乗つて飛んで行つてしまつた。それにしても一人でか…まだ少し周りが見えてないようだな。まあ、すぐに気付くだろう…。

「そろそろ…」

「帰るで」¹やるか？」

考へて いるうちに後ろに回られたみたいだ。

「ええ、今回の任務は終わりましたから」

「では、手合せをお願いしたい」

長瀬が構えを取る。

「いいでしょ……忍法・不知火！」

一瞬で長瀬の後ろに回り込む。

「むつ！」

振り返った長瀬ののど元に小刀を当てる。

「いつの間に拙者の小刀を？」

「後ろに回り込むついでに盗らせていただきました」

「拙者もまだまだ修行が足りぬでござるな」

「あなたは強いです。ですが私のいた場所に比べてこの世界は易し過ぎます。忍者は……非情でなければ務まらないのです

「非情でござるか……」

「私はそう育てられました。あなたは違うのですね。……少しうらやましいです。では、またいつか

木の葉が巻き上がる。そのうち長瀬から離れ、山を下りる。

「なんで私はあんなことを言つたんだ?……もしかしてすずの感情が

……」

次の日

「吸血鬼が風邪とはな」

私の目の前には顔を赤くしているエヴァが寝ている。

「魔力の減少した状態のマスターの体は10歳の少女のそれと変わりありませんので

メイド姿の茶々丸がそう答える。それを聞きながらケータイを取り出す。

「それじゃあ、私も看病するか……もしもし、学園長か?エヴァ

の看病をするので今日は学校を休む。それじゃ

「フォツ？とか、ちょつ？とか言ってたが何とかしてくれるだらう。

「よかつたのですか？」

「別にかまわないさ。授業も今日は2・Aだけだしネギ君が何とかしてくれるだらう」

実際予定よりも先に進んでるから一日ぐらい休んでも平氣だ。

「いえそうではなく、学園長が何か焦つっていたようでしたので」

「大丈夫だろ」

何度も頼みを聞いてやつたんだ一日ぐらい別にいいだらう。

カラソ「ロン

誰か来たみたいだな。

「茶々丸。誰か来たみたいだぞ」

「では見できます。クライスさん。マスターの」とお願いします

エヴァの言葉で茶々丸が下に向かう。

「まつたぐ、私が風邪とはな」

『うわっ！？びっくりした！ち、茶々丸さんですか！』

「この声は…」

「ネギ君か」

リビング

「不老かつ不死である彼女が風邪なんか引くわけないでしょ？」

「そのとおりだぞ。私はこの通り元氣だぞ」

そんなこと言つなら後ろで支えているこの手離していいか？

「え、エヴァンジェリンさん！」

ネギ君が懐から何かを出す。

「……なんだそれは？」

「果たし状ですっ！僕ともう一度勝負してください！」

それが君の答えか、ネギ君。

「ならここで決着をつけるか？私は一向に構わないが……」

「…いいですよ。その代わり僕が勝つたりちゃんと授業に出てくださいね！」

さて、これ以上はダメだな。

「そこまでだ

エヴァを本で軽くたたくと氣を失つた。それを肩に抱いで寝室に運ぶ。

寝室

「クラースさん、ネギ先生、私は薬をもらつてきますのでその間マスターを見ていていただけませんか？」

「わかった

「ええっ！僕ですか！？」

ネギがなぜだか知らないが焦つてゐる。その間に茶々丸は言つてしまつた。

「僕は敵なんですね？」

なんだそんなことか。

「帰りたければ帰ればいいわ。だけど君は風邪で寝込んでる生徒を見捨てることはしないだろ？」

「そ、そうですけど」

そんなことを言つてるとエヴァ咳をし始めた。

「コホッコホンッ…ハアハア…のどが…」

「のどが渇いたんですね。クラースさん台所は…」

ネギ君がこつちを見て固まつてゐる。

「どうした、ネギ君？」

「何やつてるんですか？クラースさん」

今、私はエヴァを抱き上げ膝の上に座らせてゐる。

「ああ、この方が飲ませやすいんだ」

「ちうちう…」

エヴァが私の首筋から血を飲んでいる。さてそろそろいいだろ。エ

ヴァの背中を軽くたたき飲むのをやめさせてから寝かせる。

エ

「ハアハア寒い…」

「どうしよう汗でパジャマがぐつしょりだ」

「シルフ。エヴァを着替えさせてくれ」

エヴァを着替えさせている間部屋の外に出る。

「それじゃあ、私はお粥でも作るから後は頼むぞ」

「ハイ、わかりました」

「クラスさん。マスターは？」

茶々丸が薬を持って帰ってきた。

「今ネギ君が見てるんだが…」

『何を見た！？どこまで見たんだ、言え貴様――――――――』

「あ…マスターが元気に…よかつた」

「まあ、ぶり返すかもしれないしな。もう少し寝かしとくか

本を持って寝室に向かう。

召喚士、見守り看病する（後書き）

感想待つてます。

石工士、見習い（前書き）

短いです。

召喚士、見学する

夜

『こちらは放送部です。これより学園内は停電となります。学園生徒のみなさんは極力外出を控えるようにしてください』
さて、そろそろエヴァが動くか。確か大浴場だつたな…。

「言つただろう?私は悪い魔法使いだつて。…ふふ、一人で来たことを後悔させてやる!」「うう、一人で来た

結局ネギ君は一人で来たのか…。十分な装備をしてきたようだが…。

「やれ。我が下僕たちよ」

エヴァが操つている生徒に脱がされていく。

「彼女たちは後で何とかするとしてオゴジヨの方を見てくるか」
ネギ君が何とか体勢を立て直すのを見てからその場を離れる。

女子寮前

神楽坂がオゴジヨを肩に乗せて出てきた。

「ネギ君の所に行くのか?」

「クラスさん」

神楽坂が私に気付いて立ち止まる。

「いいのか?せつかくネギ君が君を巻き込まないよう一人で向かつたのに。その覚悟を無碍にして」

「クラスさんが言つたんじゃない。君たちが導けつて。一人で無茶しようとしてるあいつに手を貸してくれる人がいるつてことを教えてあげなきや」

「いい答えた」

ウイングパックからレアバードを出し乗り込む。

「乗れ。ネギ君のところまで連れてつてやる」

橋の入口のところにレアバードを下す。

「私が送れるのはここまでだ」

「ありがとう。クラースさん」

「恩に着るぜ旦那」

そう言うと凄まじいスピードで走つて行つた。それと入れ替えてチヤチャゼロが歩いてきた。

「どんな感じだ？チヤチャゼロ」

「アンナノ子供ノ遊びダ。全然熱クナレネエヨ」

チヤチャゼロが私の頭の上に乗りながらつぶやく。

「子供相手なんだからしようがないだろ」

「そういい遊び場へと脚を進める。

ネギ君とエヴァが魔法の矢で撃ち合いをし茶々丸と神楽坂が離れたところで『テコ・ピンの打ち合いをしている。確かに子供の遊びだな。

『ラス・テル・マ・スキル・マギステル。来れ雷精、風の精！』

『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック。来れ氷精、闇の精！』

これが最後の打ち合いになるかな？エヴァは余裕の笑みを見せ、ネギ君は困惑を見せる。

『雷を纏いて吹きすさベ南洋の嵐』

『闇を従え吹雪け常夜の氷雪。来るがいいぼーや！』

完全に遊んでるなエヴァの奴。

『雷の暴風！！！』

『闇の吹雪！！！』

二人の魔法がぶつかり拮抗する。だがこの勝負エヴァの勝ちかな？ネギ君はもう限界みたいだ。

『ハックシュン！』

あ、エヴァ負けたな。

「オイオイクシャミニ押シ負ケタゼゴ主人ノ魔法」

まあ、あれはただのくしゃみじやないからな。

「武装解除の魔法が暴走したものだからなあれば、
「いけないマスター！戻つて！！」

チャチャゼロと喋つてると茶々丸が焦つた声を出した。

「予定より7分27秒も停電の復旧が早い！…マスター…！」

「ええいつ。いい加減な仕事をしあつて！きやんつ」

麻帆良に次々と明かりがともり、エヴァの体に電気が流れ川へと落ちていく。

「エヴァンジエリンさん！！」

ネギ君と茶々丸が川に向かうが間に合わない。

「アスカ！…エヴァを助ける！」

大きな光の鳥が現れエヴァと魔力切れのネギをその背中に受け止める。

「…なぜ助けようとした？そんな魔力も切れて飛べない体で…
「え…だ、だつて…エヴァンジエリンさんは僕の生徒じゃないですか」

「…バカが…」

「えへへ。さあ、これでほんとに僕の勝ちですよー。もうこれで悪いこともやめて授業にもしつかり出でもらいますからね」

ネギ君うれしそうだな。名簿取り出して何か書いてる。おおかた「僕が勝つた」とかだろ。あ、エヴァが止め出した。

「さてそろそろ帰るかチャチャゼロ」

「ソウダナ、一杯ヤロウゼゴ主人ヲ冷ヤカシナガラ」

「いいねえ」

召喚士、見参する（後書き）

感想待つてます。

召喚士、世界を作る（前書き）

新技が出ます。

日曜

「さて、修学旅行の準備でも……ん？」
買い物にでも出かけようとしたら目の前を小さな人が横切って行った。

「子供？ それにしては筋肉がつきすぎているし髪もある。ちょっとついて行ってみるか」

その小人の後をしばらくついていくと森の中にある洞窟についた。その中を覗くと。

「これは…すごいな」

洞窟の中には妖精やドワーフ、ホビット、ロロポックル、ブラウニーなどがたくさんおり一つの世界として独立していた。

「小人の世界といったところか？」

「あなたは誰ですかな？」

小人の世界に見とれていると一人の年老いたドワーフが話しかけてきた。

「私はクラース・F・スター。召喚士だ」

「ワシはコーディーンと申す。この小人の国の代表をやつておる。クラース殿はなにようでこの国に来たのだ？」

「たまたま、ドワーフを見かけましてね。気になつてついてきたんですよ」

「ふむ。クラース殿。一つ聞きたいのだがこの森の外はどうなつておるのだ？」

「森の外？ この森も含めてここ一帯、麻帆良学園都市といつ都市になつてゐるが」

「そりか…ならここで生活するのも限界かの」

「住む場所に困つてゐるのなら私にアテがあるのだが」

「本当かの…？」

「ああ、ユージーンさんちょっとついてきてくれ」

エヴァ 宅

「クラース、なんだ後ろのドワーフは？」
エヴァが後ろにいるユージーンを見て言う。

「あとで話す。それより前使ってない別荘があると言つてたな。あれを私にくれ」

「かまわんが中はただの荒地だぞ？」

茶々丸に持つてくるよう指示しながら私に言う。

「そこは私に考えがある。それで彼のことだが…」

茶々丸が別荘を持ってくる間ユージーンと小人の国について簡単に説明した。

「小人の国ね。よく今まで見つからなかつたものだ」

別荘内

茶々丸が持つてきた別荘の中は見事に何もなかつた。

「それでは始めるか。…精靈たちよ！汝らの力で命なき世界に命を！不变の世界に変化を！世界に始まりを！創世の輝きを今此処に！イノセント・ガーデン…！」

詠唱が終わるとともに世界が一変した。荒地だつた大地は海に呑み込まれ、沈んだ大地では火山が噴火し新たな大地が出来上がり、新たな大地には無数の植物が生まれ成長し、そこに無数の命が生まれた。

「なるほど、一から精靈たちに作らせることで世界の隅々まで魔力がいきわたつている」

「ユージーンさん。この世界なら人間には見つかりませんよ
確かにここなら安心して過ごせそうじゃの」

その後洞窟に向かいすべての小人が別荘の中に入つて行つた。

「さて代償をもらおうか」

別荘を部屋に置いてから戻つてくるとエヴァがそんなことを言つてきた。

「今日はなんだ？」

「そうだな…私とチャチャゼロそれと茶々丸の三人と戦つてもらうことにして。しばらく戦つてなかつたしな」

「おいおい、さすがにそれは「チャチャゼロに聞いたぞ? また、新技を完成させたそうじやないか?」おい、チャチャゼロ」

「ケケケケッ！ イイジャネエ力。俺達ガ実験台二ナツテヤルツテンダカラヨ」

エヴァの別荘内

「さあ、来るがいい！」

「しょうがない、腹をくくるか。

「私は依り代。精靈を我が身に宿し戦う者なり。翠の風まとう姉妹よ、今こそ我が身に宿り汝が力を我に貸し与えよ。ひと時の間我を精靈に昇華せよ！ シルフ・エレメンタル！」

詠唱が終わると同時にエヴァたちが動き出した。チャチャゼロがナイフを首に、茶々丸がパンチを胸に、エヴァが糸を四肢に、それぞれ放つてきた。が。

「「「なつ！？」」

「それぞれの攻撃はクラースの体を素通りしていつた。

「悠久の時を廻る優しき風よ 我が前に集いて裂刃と成せ！ サイクロン！」

クラースを中心とした巨大な竜巻が起ころ。がすぐに消え去つてしまつた。クラースもその中心で倒れている。

「どうしたんだ？ おい！ クラース！」

数時間後

「んつ。ここは？」

「私の部屋だ」

声のする方に顔を向けるとエヴァたちがいた。

「お前に聞きたいことがある。さつき使ったあの技はなんだ？」

「あれは簡単にいえば精霊そのものになつたんだ」

「精霊そのものに？」

「精霊を取り込むことによつて一時的にその精霊と同格の存在になるんだ」

「しかしだだの人間にそんな真似が…」

「これは私なりの推測だが…マーテルはこの世界と前の世界が精霊が行き来できる程度につながつてゐると言つていた。ならば私がこの世界に来れたのは精霊、少なくともそれに近いものに一時的になつていたと考へるべきだ。その私の体なら精霊の力を取り入れても大丈夫だと思つたんだ。で、前やつてみたら思つた通りで來たんだ」「じゃあ、なぜ今回は失敗したんだ？」

「ただの魔力切れだろ？よくよく考えてみたら。曲がりなりにも世界を作つた後だぞ？そりや魔力も切れるぞ」

「それもそうだつたな。今日はゆつくりと休め

そつと歸部屋を出て行つた。

その夜

「やはりあれは拒絶反応だな。一度精霊たちと対話するか

召喚士、世界を作る（後書き）

新技は簡単にいえば精靈を使った闇の魔法です。
感想待っています。

召喚士、京都にて着ぐ（前書き）

修学旅行編です。

召喚士、京都に着く

京都

修学旅行が始まり京都についた。新幹線の中で何かあったようだが寝ている間にネギ君が解決したようだ。今は清水寺にいるのだが。

「京都お———っ！！！」

「これが噂の飛び降りるアレ！」

「だれかっ！！飛び降りれっ！」

「では、拙者が…」

「おやめなさいっ！！！」

うちのクラスの生徒がいつも以上にテンションが高い。

「若いっていいね～」

「いや、あんたも止めろよ。クラスさん」

「長谷川か、お前はいつも以上にテンション低いな

「あんたはいつも通りだな」

長谷川とはパソコンやケータイなどのことで助けてもらひて以来話すようになつた。

「それはそうと前から気になつてたんだがいつもその帽子がぶつてるよな。なんか意味でもあるのか？」

「それは私も気になるです」

長谷川の質問に綾瀬も乗つてきた。

「これは…」

「最近薄くなつてきた頭頂部を隠すためだつたね。クラスさん」

時が止まつた。

「龍宮、お前はそんな目で私のことを見てたのか？」

「軽いジョークだよ、クラスさん。だからその手の本を閉まつてくれないか？」

軽く小突き話を戻す。

「これは恩師の帽子だ。彼を忘れないように毎日着けてるんだ」

「そのおかげで頭頂部が…。ちゅつ…？」

「バン！ズン！バシ！」

有無を言わさず本で振り下げ 突き 振り上げの三コンボを叩き込む。綾瀬が目を光らせて私の本捌きを見ている。

「龍宮。次その話を言つたら角でやるからな」

「…さすがクラースさん。見事な本捌きだ」

「勉強になります」

「いや、使い方間違つてるだろ…」

「別におかしくはないだろ？どいかのRPGじゃストローや羽根ペンや水瓶で戦つてんだから」

「どこの伝説を紡ぎだすRPGの話をそれで…」

「そんなことより早くいぐぞ」

長谷川たちを連れて音羽の滝に向かう。

音羽の滝に着くと一人ほどが酔いつぶれていた。しかも運が悪いことに新田先生が。

「ん…なんかお酒臭くないですか？」

「あーーー！新田先生これは…」

「すいません、新田先生。向こうの店でお酒の試飲をやつてたから

つい…」

「はつはつはつ。クラース君のお酒好きには困つたものですな。あんまり生徒の前で飲まないでくださいよ？さつちやんの店でならいつでも付き合いますから」

普段から一緒に飲んでて良かつた。

「ありがとうございます。クラースさん

「いいからさつさとバスに押し込め

やれやれゆっくり観光できそうにないな。

風呂に向かう途中ロビーでネギ君たちが話していた。

「私は…お譲様を守れれば満足なんです」

「刹那さん…」

「……よーし、わかつたよ桜咲さん。あんたがこのかのこと嫌つてなくてよかつた。それがわかれば十分!! 友達の友達は友達だからね。私も協力するわよ」

「よし、じゃあ決まりですね。3・Aガーディアンエンジニアーズ結成ですよ!! 関西呪術協会からみんなを守りましょう!!」

守るのは結構だが…。

「少しば大人を頼れよ、お前ら」

「「「クラースさん」」

「クラースの旦那」

「とりあえずお前らにこれを渡しておく」

懐から琥珀のペンダントを一つだし桜咲と神楽坂に渡す。

「これってネギのと同じ…」

「何かあつたらそのペンダントに念じろ。助けに行くから。それじや、私は温泉に入つてくるから」

風呂の時間ぐらいは休ませて欲しいものだ。

『クラースさん。このかさんが!!』

「アレフ! ネギ君たちの様子は! ?」

アレフが映し出す映像ではネギ君たちが巨大な炎の足止めを喰らっていた。仕方ないな。距離はあるが行けるだろう。

「イフリート! お前の炎とあの炎をつなげてくれ! 」

「了解した」

その後イフリートが作り出した炎に飛び込んだ。

「ホホホ。並の術者ではその炎は超えられまへんえ。ほな、さいな
ら」

「悪いがそうはいかない。シルフ！邪魔な炎を吹き飛ばせ！」

「な、なんやーー？」

「「「クラースさん！」」

転移を終えた瞬間シルフで炎を吹き消す。

「さつさと行けお前ら！後ろの奴は私がやる」

後ろにはいつの間にか鬼と白髪の少年がいた。

「まさか気付かれるとはね」

「これでも英雄と呼ばれていたんでね」

「あなたが英雄？そんな情報はなかつたはずだけど」

白髪の少年と話しながら指輪をつけていく。

「まあ、どうでもいいけどね。ルビカンテ、あの人を倒して

鬼が剣を持って飛んでくる。

「舐められたもんだな。フェンビースト！奴を倒せ！」

フェンビーストが現れ鬼を切り裂き消える。

「！相打ちとはね。それなりに強力なんだけど……」

「悪いが終わらせてもらつ。蒼き水流の女傑よ！契約に従い我に従え！ウンディーネ！奴を切り裂け！」

ウンディーネが作り出した水の刃で切ろうとするが障壁によつて止められてしまう。

「！」は引かせてもらつよ。召喚士さん

ウンディーネが呼びだした水で転移する白髪の少年。ネギたちの方を見ると桜咲がこちらに向かつて走ってきた。

「どうしたんだ、桜咲？」

「何でもありません」

「桜咲さん。明日の班行動一緒に奈良回りつねー。約束だよーつ
全く。

「明日はおそらく敵も来ないだろ？からしつかり楽しめよ

刹那の頭を軽く撫で旅館に向かう。

「…刹那、こつから旅館はどう行くんだ?」

「ひとつです…」

召喚士、京都に着く（後書き）

ここでアンケートを取りたいと思います。

次回でおそらく「ラブラブキッス大作戦」を書くと思いますのでそのことについてアンケートを取りたいと思います。

その一、誰と仮契約をさせたいか？

その二、アーティファクトはどんなものがいいか？

この一つです。

また出して欲しい精霊やカツコイイ詠唱などは隨時募集します。感想待つてます。

アンケート（前書き）

アンケートを取ります。

アンケート

いくつかアンケートを取ります。

その一、クラスと生徒を仮契約させたいかさせたくないか。

その二、仮契約させたいなら誰とさせたいか。まだどんなアーティファクトがいいか。

その三、敵の仲間にテイルズキャラを出したいか出したくないか。

その四、出したいなら誰がいいか。

その五、味方にテイルズキャラを出したいか出したくないか。

その六、出したいなら誰がいいか。

その七、生徒との日常風景を描くとしたら誰がいいか。

の七つです。

全てに答える必要はありませんがどれか一つでも答えてくれると嬉しいです。

アンケート（後書き）

感想待つてます。

召喚士、一人で観光する（前書き）

アンケートに答えてくれてありがとうございます。
出来る限り反映したいと思いますが、イノセンス、ヴェスペリア、
ハーツ、グレイセス、テンペスト、ラタトスクの騎士はプレイしたことがないので登場させることはできません。本当にすいません。
今のところ決定しているのは敵にバルバドス。見方にディセンダーの一人です。おそらくヘルマン編ぐらいで登場すると思います。
アンケートの答えは随時募集しています。

召喚士、一人で観光する

修学旅行。二日目之夜

昼間はネギ君とは違い誘つてくれる生徒がいなかつたので一人でそちらへんを観光していた。ネギ君が宮崎に告白された以外にこれといった事件はなかつたがさつき朝倉に魔法がばれたらしい。よりにもよつて麻帆良のパラッチにばれるとは…。

「もーダメだ。あんた世界中に正体ばれてオコジョにされて強制送還だわ」

「そうですね」

「そんなん〜〜つ一緒に弁護してくださいよ。アスナさん、刹那さん、クラースさん

「大丈夫だ」

ネギ君の肩に手を置く。

「クラースさん…」

ネギ君は顔を明るくし…

「君がオコジョになつたら私と契約しよう」

一気に青ざめる。

「うわ〜ん」

とネギ君の涙腺が崩壊したところで朝倉が来た。話を聞くと秘密を守ることに協力してくれるらしい。

カモと仲良くしていることが不安だがまあ大丈夫だろ〜。

11時頃

外の見回りを終えてロビーに行くと新田先生が長谷川と明石を正座させていた。

「どうしたんですか新田先生？」

「ああ、クラース先生。彼女たちが勝手に部屋から抜け出していた

んで正座させてるんですよ」

「なら、私が見てますので新田先生は見回りを続けてください」

「やつですか。なら頼みますよ」

そう言って新田先生が見回りに行つた。

「さてと長谷川は足を崩していいぞ」

「ちよつとクラスさん。何で千鶴ちゃんばかり蠱脛するのか？」

明石が文句を言つてくるが。

「どーせ、またクラスでゲームでもしてるんだろう？長谷川はお前と違つて積極的に参加しないから巻き込まれでもしたんだろう？」

そう言つと文句を言つのをやめたが今度は長谷川が文句を言つてきた。

「なら私は部屋に戻つても良いだろ？」

「だめだ。新田先生に説明するのもめんじへせこしな

「おこ」

「いいじやないか。コーヒーおこるから私の話しだ相手になつてくれ」

「そういう長谷川にコーヒーを渡す。

「クラスさん私には？」

明石が涙目でこつちを見るからテキトーに選んで渡す。

「パナシーアボトル？」

紙パックの裏面には『ナンデモ癒す万能の薬…』と書かれている。

「まずい」

まあ、薬だから健康時に飲むものではないな。それにしても向こうの世界の薬がジュースになつてるとはな…

しばらくたわいもないことを話しているとネギ君が外から戻ってきた。それに合わせ富崎と綾瀬もロビーにやつてきた。そのまま私たちには田もくれず話し始めた。どうやら富崎の告白に対するお友達からとこつお決まりの返事となつたみたいだ。…ん？おい、綾瀬。

何をたくさんでる？あつ。足かけてネギ君が支えよつとしてキスか。

あー仮契約かなるほど。さて、後は…。

「全員朝まで正座一つ！」

「つなるわな。

次の日、シネマ村

今回も誰にも誘われなかつたので一人でシネマ村を楽しんでいると
堀を超えて桜咲が近衛を抱えて入つてきた。金は払つたのか？まあ、
そんなこと気にしてゐる場合じやなさそつだな。一様私も動けるよう
にしておくか。

「…すず

シネマ村、日本橋

「何があつても私がお嬢様をお守りします」

「ひやつときやーおー

そろそろ助けに入るか。

「忍法・児雷也！来い！」

上から児雷也を落として半数ほどの妖怪を還し、さりに炎でほとん
どの妖怪を還す。

「あなたは！？」

「すずちゃん？」

「桜咲さん。近衛さんを連れて逃げてください。彼女の相手は私がします」

「誰ですか～？」

「伊賀栗流、藤林すず。我が主の命により近衛嬢あなたをお守りします」

「ここは任せました」

そう言つて桜咲が近衛を連れて走つていく。

「忍者はんが相手ですか～？ウチを楽しませてくださいね～」

「快樂のために戦うのですか。哀れな…。忍法・飯綱落とし！」

高く飛び相手の上から回転切りを行う。相手の剣士は危なげもなく捌いていく。

「にと～れんげきせんてつせ～ん

「遅いつ！忍法・鎌鼬！」

後ろに回り込みいくつもの真空波を相手に放つ。

「なかなかやりますな～」

そういうながら刀で全て弾いている。まわりの観客が騒ぎ出したのでそちらを見るとお城の上に鬼が三対と術者が一人。よりもよつてあんなところに。

「よそ見はあきまへんえ」

「くつ」

相手の斬撃をかわしつつ桜咲たちの様子をうかがう。

「あ～ん。じつち見てくれないとややわ～」

今は桜咲を信じるしかないか。

「ざんがんけ～ん」

「忍法・五月雨！」

相手の懷に入り忍刀による三連撃を放ち蹴り上げ切り払いと繋げてゆく。

「忍法・曼珠沙華！」

さらに炎を纏わせた手裏剣で追い打ちをかける。その隙に桜咲の方を見ると近衛を抱き上げて走っているところだつたどうやらうまく逃げれたようだ。

「なかなかやりますな）。ウチ楽しくなつてきましたわ～」

「御免！忍法・葉隠！」

木の葉にまぎれて桜咲の後を追つ。

「あ～ん。逃げるんですか？」

いつまでもこんな戦闘狂の相手なんかしてられるか。とりあえずネギ君たちの様子を見に行つてみるか。

召喚士、一人で観光する（後書き）

感想待つてます。

召喚士、京都で戦つ

「ファーストエイド」

ネギ君に向けて法術を使う。これでだいぶ楽になるはずだ。

「ありがとうございます」

「てつゆーより、なんで助けに来てくれなかつたのよー。」

神楽坂がギヤー、ギヤー騒いでいるが、私も戦つていたしなにより呼ばれなかつたんだから気付くはずもない。

「私も戦つていたんだよ。桜咲の方で」

「えつ？ でも向こうにクラースさんらしき人はいませんでしたよ？」

「私は見てないかも知れないがこの子は見ただろ？」

懐から一枚のカードを出して見せる。

「すずちゃんのカード？」

「このカードの力ですすの姿を借りて戦つたんだよ」

「やつなんですか～」

その後、桜咲と近衛それとなぜかともにいた朝倉、綾瀬、早乙女達と総本山に向かうことになつた。

近衛の実家である総本山でネギ君は無事親書を渡し、西ノ長の計らいで今日は泊まつていいくことになつた。今は西ノ長の近衛殿と一緒に風呂に入つてゐる。

「クラースのことのお義父さんから聞いていますよ。何でも異世界の英雄だとか

風呂場の岩の後ろ

「クラースのことのお義父さんから聞いていますよ。何でも異世界の英雄だとか

『異世界の英雄？刹那さん何か知つてる？』

『いえ、私も知りませんでした』

まあ、魔法使いがいるんだから異世界があつても不思議じゃないけど…。

「英雄といつても私は精靈たちの力を借りていいだけですよ。…そうだ。近衛さん。陰陽道の召喚について聞きたいのだが…」

「それなら召喚に関する文献を差し上げましょう。明日になりますがよろしいですか?」

「ああ、恩に着るよ近衛さん」

『そう言えばクラースさんて強いの?』

『かなり強いです。話によると本氣のエヴァンジェリンさんと茶々丸さんを同時に相手にできるとか…』

『エヴァちゃんを…それはすごいわね…』

「それじゃあ、私はそろそろ上がります」

そう言つてクラースさんが風呂場を出て行つた。

部屋

それにしてもあるの白髪の少年…。おそらくかなりの実力者だ。ここには簡単に手を出せないだろうがこれで諦めるとは思えん。少し用心しておくか…。ヘルマルドと念のため地水火風の契約の指輪は着けておくか。

コンコン

「ん?誰だ?…お前は!…」

「悪いが眠つてもうひつよ。石の息吹」

「しまつ!…」

部屋の中に煙が充満した。

「これで大丈夫だろ?」

白髪の少年はそう言つてどこかに行つてしまつた。

本山近くの森の中

「どうする刹那の姉さんと仮契約したはいいがまだかなり悪い状況だ」

風の障壁の向こうには100を軽く超えるほどの大魔たちがいる。一人だけを残していくのはやっぱり不安な状態だ。

「クラースさんがいれば…」

兄貴の言つたことはもつともだがクラースの刹那はあるの…。

『呼んだか?』

「えつ。クラースさん?」

風の中から出てきた私を見てネギ君たちがぽかーんとしている。

「どうした? 幽霊でも見たような顔をして」

「クラースさん、石にされたんじゃ…」

「無効化するのに時間はかかったが今はそんな」と言つてゐる場合じやないだろ?」

「クラースの刹那がいりやあ百人力だ! もうきの作戦でいけるぜ」
力モの作戦はネギ君以外がここで鬼たちをひきつけておいてその隙にネギ君が近衛を奪還すると言つたものだつた。

「仕方ないそれでいいだろ。桜咲、外の鬼の数は?」

「少なく見ても500はいるかと…」

「500か一応あいつを呼んでおくか。…契約のもと我が下へ来い。チヤチヤゼロ!」

「ケケケッ。ドーシタ刹那? 召喚ナンテ珍シイ」

「500ほどの鬼とな戦いだ。さつさと終わらせるが」

「ナラアレ出セ。アノトカゲノ鎧」

「トカゲッて…。彼女の鎧と化せ、グレムリンレアー」

そうするとチャチャゼロの体がグレムリンレアーを模した鎧に包まれ、手足には鋭い爪が現れた。

「私は後方で援護する。我に力を与えよ。アーチェ・クライン！」

そう言うとクラースの姿がピンク色の髪をした魔女っ子になつた。

「じゃあ、道はアタシが作るから」

「えつ！？あつはい」

「雷雲よ我が刃となり敵を貫け！サンダー・ブレード…！」

そう唱えるとアーチェの頭上から雷の刃が敵に突き刺さりに十体ほどを還す。その隙にネギ君が杖にまたがつて飛んで行つた。

「落ち着いて戦えば大丈夫です。せいぜい街でチンピラ五百人に絡まれた程度だと考えてください」

「それってケツコ一危ないでしょ」

「ケケケッ！安心シロヨ。オマエラノ後ロニハ英雄ガツイテルンダ。コノ程度ノ敵、屁デモネエゼ」

「我が傭なる虚空の彷徨い星よー落つこちろーメテオスオーム…！…んどうかした？」

どこからか降つてきた五つの隕石で敵の半数が潰れた。

「…」

「ア…、サツキノ訂正ナ。オマエラノ後ロニハ破壊神ガイルンダ。死ニタクナケリヤ、サツサト終ワラセニ行クゾ」

「ハイ（涙）」

その後三分ほど500体ほどいた鬼たちは70体ほどになつた。

「結構いいコンビだな、二人とも」

「マア、俺タチホドジャナイガナ」

私は今、元の姿に戻つて精靈の鎧を身につけて警備の時にチヤチャゼロと共に戦つている。なんで元の姿に戻つているかというとアーチェはまあ、あの、なんていうか大雑把過ぎて地形が代わりそうだから気軽に使えないんだ。

「じつ五百の兵が三分で10分の1だと！？化物かこの譲ちゃん達」「天敵の神鳴流はともかくあのハリセンとからくりと西洋魔術は反則ですぜ、オヤビン」

「それはともかく…すかあの下に肌着をつけんのが最近のはやりかいな？」

学園長室

「ははははっ！突然チヤチャゼロが行つたと思つたら面白いことになつてゐるじゃないか」

クラースが置いて行つた琥珀の球を見ながら笑う。くくく。この球は便利だなチヤチャゼロを勝手に連れて行つた代償としていたぐか。

「それよりまだかじじい。早くしないとクラースが終わらせてしまう」

「やれやれ、せつかちじやのう。もう少し待てんのか」

京都

やばいな。桜咲は鬼と狐女に、神楽坂は鳥族に、チヤチャゼロは剣士、ツクヨミだつたかにそれぞれ足止めされてるし、さすがに何十体も相手にしながら召喚はできないな。そんなことを考えているとそれぞれ足止めしていた敵が何者かに狙撃されている。いやこんなことができる奴は一人しかいないか。

「クラースさん、いくらで私を雇う？」

「あのデカいの本物アルかー？強そうアルねー」

「そこには龍宮とクーがいた。」

「学園長にもらえるだけもらつとけ」

『……からか『ちゅつー・?・マジー・?』と聞こえたが氣のせいだな。

学園長室

『学園長にもらえるだけもらひとけ』

「ちゅつー・?・マジー・?」

『ならたつぱりもらひとするか』

あの様子じゃ本当に限界までもらいに来るかも知れんのう。
「ははは。やつとしないから余計な出費を出すことになるんだ」
ナギの奴め力任せに術をかけおつて。

召喚士、京都で戦つ（後書き）

感想待つてます。

召喚士、鬼神を倒す（前書き）

私の好きな精霊？が出来ます。

召喚士、鬼神を倒す

鬼は龍宮たちに任せて今はネギ君のところに向かっている。桜咲と神楽坂は先ほどネギ君に召喚されて先に行つた。

「たくつ。次から次へと」

見据える先にはかなり巨大な鬼が召喚されている。

「あれは鳥？」

巨大な鬼の前には白い翼が羽ばたいてる。そして鬼の肩あたりにいる人物から何かを奪い去つた。

「桜咲と近衛か？」

月をバックに天使のような桜咲とそれに抱えられている近衛。鬼の方に目を戻すと鬼が結界に拘束されている。よく見ると茶々丸が銃を構えているのが見える。

「となるとあの小さいのがエヴァか」

エヴァが何かを詠唱し鬼が氷漬けにされた。

『クラース見てるか？』

「ああ、今そつちに向かっているところだ」

エヴァからの念話をカードを額に当てながら答える。

『トドメはお前に譲つてやる。本当の召喚といつものを奴らに教えてやれ』

「わかつたよ。そつちに召喚してくれ」

目の前が白く染まりそれが治まるとネギ君の前に召喚された。

「ぼーや。クラースをよく見ている。英雄と呼ばれるものがどういうものかよくわかる」

『アデアット』契約の証・エメラルド』エヴァ、魔力を借りるぞ

「存分に使え」

そう唱えるとカードが光となり契約の指輪に宿る。クラースのアーティファクトの能力は契約したものの方の一部を開放するというものの。解放する力は主の魔力に依存する。

「テイルズ・マーク・エターナル」

「始動キーとはもともと精霊たちに呼び掛けるために使うものだ。別に魔法が使えないでも精霊の力を借りることはできるだろ？」

「私は召喚士クラス・F・レスター。世界を繋ぐ扉なり」

クラスの足元に魔方陣が浮かび上がる。

「我が繫ぐは闇。全てを覆い隠す永久の暗黒」

詠唱が進むと同時にクラスの周りの雰囲気が暗く重いものに変わつっていく。

「我が願うは力。善と惡どちらにも染まらぬ圧倒的な力」

ケラースの足元から紫色の霧が広かる。

我が呼ぶは王。冥界を統べる誇り高き帝王

氷に鰯が入り何かを感じ取った鬼が暴れる

契約に従い我が呼び声に答えよ！ブルート！！」

現れたものを一言で表現するとしたら誰もが迷わずこつ答えるだろ
う。魔王と。

「こいつがプルート……」

その姿はマントを羽織つた蛇のような姿をしていた。腕を胸の前で交差させて周囲に青紫の炎を浮かばせている。

『他人の力を借りたとはいえ我の力をここまで引き出すか。 クラー
スよ』

「フルート。あいつらに世界の違いを見せてやつてくれ」

全力ではないと言え『えいえんのひょうが』を破るとは。

『なんだ』の木偶が。我に歯向かうとはいい度胸だ。冥界の炎で全て焼きつくしてくれる!!!!

始まつたのは戦いではなく一方的な殲滅。ブルートの周りに浮かんでいた炎が無数に増えスクナを焼きつくしていく。そこに救いはなくスクナはただただその身を焼かれるのみ。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

スクナがどれだけ叫んでもその炎は消えることはない。むしろその叫びに答えるように新たな炎が生まれる。

『……幕を引くとしよう……無慈悲なる超重力の深遠……ブラックホール』

黒い渦はスクナを飲み込むと何事もなかつたかのようにその場から消えた。

「まさかスクナを跡形もなく消し去るとわな」

「これが英雄…」

手も足も出なかつたあの鬼がいとも簡単に。

「ぼーや、見ていたか？この圧倒的な力を。时空戦士と呼ばれた英雄の力を…」

エヴァンジロリンさんがクラースの方を見ながら話しかけてきた。

「は、はい…」

どうやつたらあんな力を手にすることが…。

祭壇

「いいか、ぼーや。今回のことをRPGに例えるとだな。最初の方のダンジョンで死にかけたらなぜかラスボスが助けに来てくれたようなものだ」

「何それ

「私はラスボスか？」

まあ、ダオスからみればラスボスか…。

「ようは私たちの力をあまりあてにするなということだ」

「は、はい…！？エヴァンジロリンさん…！」

ネギ君が突然走り出しエヴァを庇うように抱き締めた。そこには水たまりから顔を出した白髪の少年が…。

「バカどけっ」

「障壁突破・石の槍」

ドシコツ

「ぐつ！」

「がはつ…？」

エヴァの腹と私の左腕を石の槍が貫く。

「エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルにクラース・F・レスター。『人形遣い』に『召喚士』か…」

「エヴァンジエリンさん…！クラースさん…！」

「エヴァちゃん！－クラースさん！－！」

油断したか…だが。

「そう『不死の魔法使い』さ」

そういう蝙蝠になつて少年の後ろにエヴァが回り込んで一撃加える。

「セルシウス・エレメンタル！」

氷の精霊を取り込み吹っ飛んだ少年の目の前に移動する。

「なるほど。相手が吸血鬼の真祖では分が！？」

「さつさと帰れ！獅吼爆碎陣！！」

獅子の形をした鬪氣を三度少年に叩き込む。

「まさかここまでやるとは…今日のところは引くとしよう

そう言つと少年の体は水となつて消えた。

「逃げたか…つ！？がはつ」

血を吐きその場に崩れ落ちる。

「くつ！拒絶反応が…」

そこで私の意識は途切れた。

召喚士、鬼神を倒す（後書き）

感想待つてます。

召喚士、麻帆良に帰る（前書き）

修学旅行編終了。

召喚士、麻帆良に帰る

光を感じる。何か温かいものに包まれて居る。そういう時はマナのよ
うな光。

目を開けるとエヴァがいたその後ろには茶々丸がいる。

「エヴァ…？」

「目を覚ましたか…」

周りを見回すとネギ君たちもいた。おそらく近衛とネギ君が仮契約
したのだろう。

「明日はゆっくりと回れそうだな…」

「当り前だ。明日は私の京都観光に付き合つてもいいだ

違う意味で慌ただしくなりそうだな。

本山

「で、なんで私は今睨まれているのかな？」

屋敷に戻つてからすぐ休もうと部屋に向かおつとしたらエヴァに連
れ去られた。

「言わないつもりか？」

「あの技のことか？それなら麻帆良に帰つてから言いつもつだつた
が…」

「そんな悠長なこと言つてる場合か？あの技は確実にお前を喰らう
つくすぞ。あの技はただの人間には過ぎた力だ」

「問題点も対処法もわかってる。それに今の私はただの人間ではな
い」

「ただの人間ではないだと？自惚れるなよ人間」

まあ、私でも信じられないが…。

「うぬぼれてはいないよ。実際私も信じられないがな。…この世界に
来てから年を取らないんだ」

「年を取らないだと？」

「ああ、この前茶々丸に頼んで私の体を調べてもうつたが、この世界に来たころとほとんど変わらないんだそうだ」

エヴァが茶々丸の方を見る。

「本当です。99 - 89%一致します」

「不老になつたのか？」

「不老というよりは半精霊化だな」

「確実に化物になりつつあるなお前は。それで問題点とは何だ？」

「半精霊化している私がどの属性にも属さないといつ点だ」

「?どういうことだ?どの属性にも属していないのならむしろどの精霊ともつまくいくだろ?」

「どうやら半分残つている人間の部分が拒絶するらしい」

「はつ。それはそうだ」

「で、対処法としてはそれぞれの精霊に頼んで私の体に呪文処理してもらひ」

「まあ、精霊になるよりは現実的な方法だな。しかしそんな簡単にいくのか?好戦的な奴が多かつたが…」

「それぐらいのリスクは背負ひた。まあ、最初は話が通じる奴からだけどな」

「わかつた。もう、いいぞ。あと明日はわかつているだろ?な?」

「京都観光に付き合え、だろ?わかつてんさ」

「そういう部屋に戻る。」

「…顔を見れば辛くなりますから」

「なんだもう行くのか？」

「…クラースさん」

さつて いく 桜咲を呼びとめる。

「そんな顔するなら残ればいいだる」

桜咲の眼には涙が浮かんでいる。

「一族の掟ですから。…あの姿を見られた以上仕方ありません」

「なら私と契約するか？…我が名はクラース・F・レスター。桜咲

刹那が一族の掟を破棄し、我と新たな契約を交わすことを望む」

「そ、そんなことを言われても…」

「刹那さんっ！…！」

突如現れたネギ君によつて契約の件は有耶無耶になつた。どうでもいいが、ネギ君。生徒に抱きつくるのは先生としてどうだらう。必死なのはわかるがもつと落ち着いて説得できないのか？…いやこれが若さか！？

「「若いっていいよなー」」「

「こきなり老けこまないでください。マスター、クラースさん

はあ～。お茶がうまい。

その後、旅館に送つていた身代わりの紙型が暴走したのですぐに戻ることになつた。もちろん桜咲も一緒に。

エヴァに連れられ京都観光（ほとんど私が回つた場所だが）を終え、西ノ長の案内によつてサウザンドマスターの別荘に向かうことになつた。そこでネギ君たちはサウザンドマスターの話を聞き、私は召喚に関する文献をもらつた。

その夜、麻帆良

「もうすぐ生まれる…。世界を見つめるもう一人の私が…」

召喚士、麻帆良に帰る（後書き）

感想待つてます。

少女の靈、友達ができる（前書き）

作者のネギまで好きなキャラが出ます。

少女の靈、友達ができる

みなさんはじめまして。私、相坂さよ。地縛靈はじめて60年程になります。60年も幽靈やつてますが影が薄いってゆーか、存在感がないってゆーか、誰にも気付いてもらえません。只今友達募集中です…。

こんな私がですが最近気になる人ができました。その人は…。

ガラツ

（ひつ、誰ですか！？）

「あ〜、やつぱりここにあつたか」

（何だクラスさんですか…）

この人がさつき言つた気になる人。3-Aの副担任のクラス・F・レスター先生です。好きというわけではないんですがなぜか惹かれるものがあります。たまにぼ〜っとしているといつの間にか着いてしまいます。で、この前つっかり家までついて行つてしまつて…そしたらなんとすごいことがわかつてしまつたんです！なんと！クラスさんは魔法使いだつたんです！それだけでなくクラスメイトのエヴァンジエリンさんは吸血鬼でもあるんですね！話によるとネギ先生も魔法使いだとか！…………そんなすごい人たちにも気付いてもらえない私つて（涙）

あつ、クラスさんが教室から出でいきます。どうやら置き忘れた教材を取りにきたみたいですね。一人でいるのは寂しいのちよつとついて行つてみます。

エヴァ宅

「クラスさん。チエリーパイが焼けました」

「ああ、ありがとう」

クラスさんはよくチエリーパイを食べています。何でも恋人の得意料理なんだそうです。それにしてもおいしそうですねえ…。

「やはり最初はシルフか…他の四大精霊は…ブツブツ」
何やら難しい本を読みながらブツブツ言っています。少し本を見て
みましたかが全くわかりませんでした。

カラソコロン

誰か来たみたいですね。

「何?私の弟子にだと?アホか貴様」
どうやらネギ先生はエヴァンジエリンさんに弟子になりたいようで
す。

「京都での戦いをこの田で見て魔法使いの戦い方を学ぶならエヴァ

ンジエリンさんしかないと!」

京都で何かあつたみたいですね~。

「ねえ、クラースさんはネギに魔法を教えてあげないの?エヴァち
ゃんより強いんでしょう?」

「私が使ってる魔法はネギ君たちの魔法とは違つからな。魔法使い
として学ぶならエヴァの方がいいわ」

ネギ君たちが話している横でクラースさんとアスナさんが話してい
ます。あつ、エヴァさんがネギ君に向かつて足を突き出しまし
た。何するんでしょう?

「まずは足を舐める。我が下僕として永遠の忠誠を誓え。話はそれ
からだ」

(ぶつ!?)

「アホかーッ!!」

スパー———ン!

「へふう!?

ピコッ!

「ペボ!?

アスナさんとクラースさんがハリセンとペコペコハンマーではたき
ます。あつ、お星様が…。

「あああ、神楽坂アスナ！！真祖の障壁をテキトーに無視するんじやないつ！！」

あ～取つ組み合いが始まつてしましました。どうしましょ～。

「あ、あのー……」

あつ、ネギ先生のおかげで止まりました。よかつた～。

「わ、わかつたよ。今度の土曜日もう一度ここへ来い。弟子に取るかどうかテストしてやる。それでいいだろ？」

「え…あ…ありがとうございます！」

よかつたですね～。

「クラース。前から気になつてたんだがお前には見えてないのか？」
エヴァンジエリンさんがクラースさんに話しかけてます。見えてないのかつて何のことでしょう？

「何のことだ？」

どうやらクラースさんもわかつてないみたいです。

「お前の後ろだ」

後ろを見ますが特になんにもないです。前を向きます。

「本当に見えてないようだな…」

「だから何の話だ？」

「お前の後ろに相坂さよがいるんだよ」

(相坂さよ？あ～私のことですね……つて見えているんですかエヴァンジエリンさん！？)

「ああ、見えてるし聞こえているよ」

(やつた～！地縛靈はじめて60年やつと私のことを見る人に会えました～！)

「私には見えないが…」

でも、クラースさんには見えてないみたいですね。

「ふむ。クラース。幽靈と契約できるか？」

「相手が受け入れてくれれば可能だが…」

「やうが。相坂さよ。 클래스と契約し。つまく。けば姿が見えるようになるぞ？」

（やります。やらせてください…）

「決まりだなクラス。指輪を出せ」
エヴァンジエリンさんが言つとクラスさんがたくさんの指輪を出します。どれもきれいですね~。

「相坂。好きな指輪を選んでくれ」

（悩みますね）。あつそのグリーンのがいいです）

「クリソプレーズか。宝石言葉は新たな始まりだつたか？お前にぴつたりだな」

「それじゃあ、相坂。私の前に来てくれ」

（あつ、はいわかりました~。…いいですかね？）

「いいぞ、クラス。始めろ」

「我、いま少女の靈に願い奉る。指輪の盟約のもと、我に彼女を従わせたまえ…。我が名は…クラス・F・レスター」
光が私を包みます。…なんだかすゞ安心します。光が収まるとみなさんが私のことを見ていています。

「あの、私のこと見えてますか？」

「ああ」

「うむ」

「ハイ、見えています」

エヴァンジエリンさん、クラスさん、茶々丸さんが私の眼を見てしつかりと頷いてくれました。

「あ、あの。私の友達になつてくれませんか？」

「もちろんだ」

「ハイ、私でよろしいのなら」

「まあ、なつてやつても良いぞ」

長年の夢が……今、叶いました。

月曜日

「　　かわいい～」「」

「クラスさん。誰その子?」

「あれ?足ないじゃん!?」

「静かにしろ～。ほら血口紹介」

クラスさんに言われて前に出ます。
「出席番号一番、相坂さよです。地縛霊ですがよろしくお願いします」

今年はクラスさんのおかげでいつもより楽しい年になりそうです。

少女の靈、友達ができる（後書き）

感想待つてます。

召喚士、テストを行う

「いいだろ？ 我が力を貸してやる」
人間と同じくらいの大きさのプルートが田の前にいるクラースにそう言つ。

「驚いた。お前が一番手を貸さないとと思つたんだが…」

「人の身で我と契約し、人の力を借りたとはいえあそこまで我が力を引き出したのだ。認めぬわけにはいかまい」

そう言つた後プルートは組んでいた腕をほどき何かを描くようにクラースの周りをなぞつていく。なぞつた跡は一瞬ひかり消えていく。

「これでいいだろ？」

「ああ、ありがとう。プルート」

クラースからの言葉を聞くとプルートは消えていった。

「さて、そろそろ外に出るか…」

エヴァ 宅

「やつと出てきたか」

今は金曜日の四時。学園長に無理行つて仕事を休ませてもらい別荘内で約三ヶ月間、精霊たちと対話（一部戦闘）していた。

「ああ、すまなかつたな」

「別にいいや。対価は血…いやほーやの弟子入りテストの相手をしてもらおう」

ああ、魔法使いの弟子入りの件か。

「それはかまわないが、私が手加減するとは思わないのか？」

「テスト内容も合格条件も自由にしてかまわないが、私の修行についてこられないよつたな甘い内容にだけはするなよ」

「ふむ、それなら…。」

「茶々丸。ネギ君がどこにいるかわかるか？」

エヴァの後ろに立つて居る茶々丸に聞く。

「おそらく、世界樹近くの広場かと…」

「わかつた。ありがとう」

とりあえず様子を見てくるか。

世界樹近くの広場

広場ではネギ君とクーが中国拳法で組み手を桜咲と神楽坂がハリセンと木刀でこちらも組み手。近衛はその様子を見て、佐々木もりボンをくるくる回しながら同じように見ている。

「がんばってるな、みんな」

声をかけると全員こちらに注目した。

「クラースさん。用事はもういいんですか？」

「ああ、さつき終えたところだ」

「クラースさんは何しに来たんや～？」

「ああ、ネギ君の弟子入りテストの相手をすることになつてな」

そつ言つた途端神楽坂と佐々木は『クラースさんなら手加減してくれるから大丈夫だね～』と言い。ネギ君も『そうですね』と言つている。はあ～本当に大丈夫か？

「言つとくが甘い内容にするつもりは一切ないからな。それだと意味がないからな。しつかり鍛練しろよ」

神楽坂と佐々木が「ケチ～」とか「鬼～」とか言つているが気にしない。

「ネギ君。テストの時間は日曜の午前0時場所はエヴァの家だ。同行者は神楽坂、桜咲、近衛、富崎、クー、長瀬、のみ認める。一般人は連れてくるな」

そつ言い残しエヴァの家に戻る。

午前0時

「ネギ・スプリングフィールド、弟子入りテストを受けに来ました」時間通りにネギ君が来た。その後ろには神楽坂、桜咲、近衛、富崎、クー、長瀬それに龍宮が来ていた。龍宮が来るとは意外だな。

「私は見学だよ。クラースさん」
「どうやら顔に出ていたらしい。」

「それじゃあ、場所に案内するからついてきてくれ」

「そういう森の中に入つていく。」

森の中の開けた場所

「よく来たなぼーや達」

そこにはエヴァと茶々丸、チャチャヤゼロがいた。

「ぼーやはそこにいる。ほかの奴らは私の後ろに来い」

そうエヴァが言うとネギ君を残しエヴァの所へ向かう。私はそれを見ながら20メートルほど離れた場所でネギ君と向かい合つ。

「では、始めようか。テストの内容は簡単だ」

懐からカードを出し言葉を紡ぐ。

「我がマナを宿しその姿をここに現せ！ 藤林すず！」

カードが光り輝きすずがそこに現れる。

「ネギ君の使える力をすべて使いすずに一撃入れてみろ」

「その条件でいいんですね」

「ああ」

そう言い残しエヴァのもとへ行く。

エヴァの後ろへ立つとエヴァが開始の合図を言った。

「では始めるがいい！！」

その言葉とともに二人の距離は0になつた。

すずさんの拳を受け流し裏拳を放つ

八極拳・転身膝打！

その攻撃はすずさんの肩に当たり吹き飛ばす。……はずだった。

「消えた！？」

あたる直前すずさんの体が靈のように揺らめいて消えてしまった。

「さやあつ！？」

この声はアスナさん！？声のした方に田を向けるとアスナさんがすずさんにクナイをつきつけられていた。

「アスナさんに何をするんですか！！！」

怒りのままそつちに行こうとすると隣から声が聞こえた。

「怒り。それは、冷静な判断を失わせるものと知れ」

隣に顔を向けようとしたらものすごい衝撃に吹き飛ばされた。くそついつの間に僕の隣に！？

「卑怯ですよ！アスナさんを人質に取るなんて！」

「……」

そう言つてもすずさんはなんにも言いません。

「なら。ラス・テル・マ「忍法・不知火」！？」

魔法を放とうと杖を手にした瞬間後ろから現れたすずさんに杖を奪われた。

「……」

杖を奪つたすずさんは僕に背を向けたまま無造作に杖を投げ捨てました。

「ああつ！？僕の大切な杖……」

「悲しみ。それは、力を失う元と知れ」

「ぐつ！？」

投げられた杖を見ていると僕を見ていたすずさんに蹴り飛ばされた。

すず殿戦いはまさしく忍びの戦い。私情を持ちこまづ、相手をだまし、影を渡り歩く。一度も本体を現さぬとはいやはや。忍者は非情でなければ務まらぬ……でござるか。

「楓、刹那。彼女に勝てると思つか？」

そう考へてると真名殿にそう聞かれた。

「私では無理だな。お嬢様を人質に捕らわれて冷静さを失くしたところを背後から一撃といったところだ」

「拙者も似たようなものでござるな。あそこまで非情にはなれない

で「Jされる。そういう真名殿はどうしてJされるか？」

「あそこまで徹底して姿を隠されたらお手上げだな」
真名殿でも無理か…あの年でこれほどとはどんな試練をぐぐりぬけてきたのか気になるでJされるな。

「これで終わりです」

すずさんがまっすぐJつちに走つてくる。今だ…!
「契約執行90秒間ネギ・スプリングファイールド」
すずさんが伸ばしてきた腕を引っ張りすずさんに肘鉄を喰らわせる。

八極拳六大開「頂」？打頂肘…！

「ぐつ…？」

技が決まりすずさんがその場にうずくまる。

「やつた――ツ！クラスさんこれで合格ですよね？」

そういうクラスさんの方を見るとそこにすずさんが…？

「喜び。それは、他人にねたまれる元と知れ」

そつ言われ僕はまた吹き飛ばされた。

「なかなか意地悪な試験を用意するじゃないか？」

そういう隣のクラスを見る。

「当然だ。世界はそんなに優しくできていない」

まあ、問題はそれにぼーやが耐えられるかどうかだな。

くつ。どうすればすずさんに一撃入れられる？

「あやああああああ…！」

そんなことを考えていると急にすずさんが目の前に吹き飛ばされてきた。胸元には鋭い爪で切り裂かれたような傷跡が。

「大丈夫ですか…？今手当てを…」

「あわれみ。それは、自分の死につながるものと知れ」

また！？

「何よこれ…」

「こんなのは試験なんかじゃない。ただのいじめだ。

「クラースさん！」これはどういつ」と…？「このただのいじめじゃない…！」

「黙れ小娘。私に弟子入りするならこの程度耐えられなければ意味がない…それにこちらの世界はそんなに優しくない」

だからつてこんな…

どうすればすずさんに…

『ネギ君の使える力をすべて使いすずに一撃入れてみる』

僕の使える力…

魔法、中国拳法…

そう言えば…

『私はただ精霊たちの力を借りてるだけだよ。一人では何もできない』

そうだ！

「みなさん！力を貸してください！」

「おい、あれはいいのか？」

エヴァが助けに入る神楽坂達を指しながら言つ。

「現実を知り自分に力を貸してくれる存在を再確認した。十分じゃないか」

「本物は後ろですネギ先生」

「魔法の射手・光の1矢！」

魔法の射手がすずさんの右手に当たる。そしてアスナさんたちが相手をしていた分身も消える。クラースの方を見ると笑顔でこつちを見ていた。

「「「やつたーー。」」」

「笑い。それは、心のスキを見せるものと知れ」

「！？」

また！？

「答えは一つにあらず。」口の心の思つまま、それが答えなり。…あなたが進む道それがあなたの答えです」

そう言い手を出してきた。その手を握り返す。

「合格だよ。ぼーや。いつでも私の家に来い。…ああそれとカンフーは続けておけ、どの道体術は必要だしな」

そう言いエヴァたちは家に戻つて行つた。

「さて、お前らちょっととこっちに来い」

ネギ君たちを私の前に集める。

「ミント」

そつ咳せきの姿になる。

「紡ぎしは抱擁、莊厳なる大地にもたらされん光の奇跡にいま名を
与づる。リザレクション」

私の足元に巨大な魔方陣が浮かび上がり輝きだす。光が収まるにつ
にはネギ君たちの傷が全て治つていた。

「よく頑張つたなネギ君」

元の姿に戻りネギ君の頭をなでてやる。

「はーっ！」

「クラスさん……いくら必要なことだとしてもあれはやりすぎで
しょ！？ネギはまだ子供なのよー…？」

「アスナさん。僕は大丈夫ですか…？」

「あなたは黙つてなさい…ネギはまだ子供なんだから…（ガニガニ）

「あつ～」

ネギ君諦めないでくれ私の足はもう限界だ。後ろのお前たちがつこ
かしてくれ。あつおいつ田をそらすな。龍田。餡蜜でもなんでもお
ごつてやるから。

「聞いてるんですか！？」

「ハイ」

朝食の準備を終えた茶々丸が私を呼びに来るまで神楽坂の説教は続
いた。

召喚士、テストを行つ（後書き）

感想待つてます。

世界樹の落とし穴、生まれる（前書き）

ティセンダーの名前募集します。テイルズキャラの名前以外でお願いします。

世界樹の落とし子、生まれる

この世界とは違う世界の昔々のお話です

その世界の始まりには世界樹しかありませんでした

世界樹は大地を作り大地からは精靈が生まれました

それから動物や人々を生み出しました

その世界には様々な命が溢れ世界樹の生み出すマナの恵みを受け幸せに暮らしていました

しかし人々はいつしかおおらかさを失いさらなる豊さを求めるマナを奪い合つて争い始めました

精靈は人々の前から消え人々の争いは次の争いを呼び世界はどんどん疲れ果てて行きました

世界樹はこのままではいけないと1人の人間を生み出しました

世界樹から生まれた勇者“ディセンダー”です

生まれたばかりのディセンダーは世界の事も自分の事でさえも何も知りません

そして不可能も恐れも知りません

ディセンダーは人々の助けに応じるかのように小さな手伝いから

始めました

そして人々のマナを巡る争いを終わりに導きテイセンダーはまた世界樹へ帰つて行きました

いつもこつまでもその世界を世界樹と『イセンダー』が見守っているのです

ネギ君がテストを受けている！

「行きなさい。ディセンダー。彼のもとへ……」

その頃麻帆大、世界樹をこよなく愛する会

吉長 世界樹ガ

「！？光が上空に向かって飛んでい

「今すぐ世界樹に向かうぞ！他の壁は映像の解析だ！」

翌朝學園長室

「で、何の用だ？学園長

茶々丸が作ってくれた朝食を食べ終わると、ここには学園長がひっそりと学園長室に来るようになっていた。

「くだらない用事だつたら帰るぞ」

「エヴァは呼んでないんじゃがのう…まあいいわいタカミチ君、彼

女を「

学園長がそう呼ぶとタカミチが入ってきた一人の女の子を連れて。
「おい、ジジイ。なんだこの小娘は？」

女の子はアーチェと同じくらいの背丈だ、髪の色は茶々丸と同じ少し薄い緑、長さは肩にかかる程度。瞳の色は海のような青。そして昔のすずのような無表情。

「ワシが知りたいんじゃがの。彼女は世界樹から来たそうじゃ、クラース君何か知らないかのう？」

「世界樹から？」

もう一度女の子を見る。女の子はじっと私のことを見ている。世界樹から来たか…。私の世界の住人か？しかしそう簡単に来れるはずはないんだが…。

「名前は？」

フルフル

「わからないのか？」

コク

「世界樹から来たこと以外にわかることはあるか？」

スツ

「…あなたを手伝つよつ言われた」

私を指さしてそう言った。私を手伝つよつて…しかしまーテルからは何も…。もしかすると…。

「君はディセンダーか？」

コク

やはり。

「そろそろこっちにもわかるよつにしてほしいんじゃが。ディセンダーとは何かの？」

女の子と話していると学園長が聞いてきた。

「まあ、私の世界にあつた御伽噺なんだが、簡単にいえば世界樹が世界を見るために生み出す分身だ」

「世界樹の分身かの？」

「おや、らくな」

「で、君の目的はなんなのかの？」

学園長が女の子に話しかける。

「…私は彼を手伝つよう言われた」

「誰にかの？」

「…世界樹」

「う～む。ウソは言つてなこよつじゅのい」

「…」

「それじゃあ、戸籍とかはいひで用意するとしてしばらへはエヴァ
アのところで預かってもらつとあるかの」

「なぜ私のところなんだ？」

「彼女はクラース君に懐いてるようだしおのひ」

隣を見るといつの中にカタカミチの隣から私の隣に来ていた。

「まあ、いいだろつ。こべぞクラース」

「ああ」

そう言い学園長室を出てこくつこて行く。女の子も私の隣をぴったりとついてくる。

エヴァ宅

「ふむ、なかなか興味深い話だな」

ディセンダーの物語を読み終えたエヴァがそう言つた。

「まあ、お前のことはおこおい聞くとしてまずは名前だな

「それもそうだな」

「プレセアなんてどうだ？」

「いやいやゲームのキャラから決めるなよ。確かに雰囲気は似ているが

「なら、お前は何かあるのか？」

「そうだな…。キティなんて…なんでそんなに睨むんだ？」

「その名前はやめろ」

「う～ん。茶々丸は何かあるか？」

「私は...」

世界樹の落とし穴、生まれる（後書き）

感想待つてます。

伝説の玩具、その名は…（前書き）

ディセンダーの名前決まりました。

伝説の玩具、その名は…

「よし。では、始める。刹那、気は抑えておけ。相応の練習がなければ魔力と気は相反するだけだ」

「ハイ。エヴァンジエリンさん」

「いきます」

エヴァの修行一田田。ネギ君の前には桜咲、神楽坂、富崎、近衛が並んでいる。

「契約執行180秒間！ネギの従者、近衛木乃香、富崎のどか、神

楽坂明日菜、桜咲刹那」

「うひやひやひそばーーー」

「あう…」

「慣れないのよねコレ」

「そうですか？私はそれ程…」

魔力供給を受けた四人は程度の差があるものの皆顔を赤くしている。「よし次だ。対物・魔法障壁全方位全力展開！」

「ハイ！」

「次！対魔・魔法障壁全方位全力展開！！」

「ハイ！」

「そのまま3分持ち堪えた後北の空へ魔法の射手199本！…結界張つてあるから遠慮せずやれ！」

「うぐッ…ハ、ハイ！…」

「光の精霊199柱、集い来りて敵を討て」

ネギ君の放った光の矢が障壁に当たりネギ君が倒れた

「あうう…」

「ふん。この程度で気絶とは話にならんわ！いくら奴譲りの強大な魔力があつたとしても使いこなせなければ宝の持ち腐れだ…」

「よーよーエヴァンジエリンさんよお。そりや言いすぎだろ。兄貴

はまだ十歳だぜ。四人同時契約三分 + 魔法の矢199本なんて修学旅行の戦い以上の魔力消費じゃねーか。気絶して当然だぜ。並の術者だつたらこれでも十分…

「黙れこの下等生物が並の術者程度で満足できるか。……煮て喰うぞ？」

そう言わるとカモが神楽坂に抱かれて震えだした。

「ふん。クラース手本を見せてやれ」

「私がか？」

「そうだ。私と茶々丸とチャチャゼロそれと刹那に魔力供給を6分間。対物・対魔・魔法障壁を全方位全力展開。その後北の空へそれなりの攻撃魔法を放て」

「違うがないな…」

「いくぞ。刃に秘めし聖なる力よ、彼等に更なる力を分け与えたまえ…アグリゲットシャープ！」

秘めし力よ刃に纏え…アグリゲットシャープ！絢爛たる光よ、惨禍を和らぐ壁となれ…フォースフィールド！」

このまま6分。

「見せてやろう…ダオスレーザー！」
パリーン！

「あつ」

「アホか……………ツ！？「あつ」じゃないわ「あつ」じゃ！弱つてているとはいえ真祖の結界を簡単に壊しあつて！」

エヴァが私の肩を掴みブンブン振つてくる。

「いやあ。待て待てエヴァ。私なりに考えたんだよ。手本になりならイメージしやすいように似たような技の方がいいだろ？それで私ができる手から出す術はあれしかなくてな。あとは何て言うかノリ？あの技使うならこの程度の結界は破らないとな」

「ノリ？じゃないわぼけ……………ツ！？ええい、今日という今

日は頭に来た！貴様の血を吸いつくしてくれる！」

「ははは。今のお嬢ちゃんにそれができるかな?」

「きつ貴様あ…」

「ケケケ。俺モ混ゼロヨ」

「茶々丸さん。止めないんですか?」

「さよさん。私が言つて止められる可能性は28%そのうち27%, 9%の可能性で私はスクラップです」

「ですよね。私もあそこに行つたら靈体とか関係なく消滅せられそうです。」

トントン

「…止めたほうがいいの?」

「この子はクラスさんの親戚のコノ・G・レスターさん。物静かな人で今度から3-Aに転校することになりました。というのは建前でなんとその正体は世界樹から生まれたディセンダーという世界樹の分身なんだそうです。まだ一歳にもなつていないので私と茶々丸さんで勉強を教えることになつたんですが、物覚えのよさと好奇心の高さで中学三年の勉強をあつという間に終わらせて今では大学で習つような勉強を始めてます。私はそこまでは教えられないで一般常識などを教えています。」

「あつと、話がそれてしましました。」

「止められるんなら止めたほうがいいですけど…」

「…わかった」

「そう言いコノさんはクラスさんたちの方へ向つていきます。」

「…ピコハン」

「何！？」

「ぐうー？」

- ケケケ

לְפָנָי

またた！！また…」

卷之三

「...」

לְפָנָי כְּפָנָי כְּפָנָי כְּפָנָי כְּפָנָי כְּפָנָי

「負けるわけには…」

111

「エターナルスロー」

ՀԱՅԱՍՏԱՆԻ ՀԱՆՐԱՊԵՏՈՒԹՅԱՆ ԿԱռԱՎԱՐՈՒԹՅՈՒՆ

卷之三

עטיפה - עטיפה - עטיפה - עטיפה - עטיפה - עטיפה

卷之三

شیخ مسلم بن عاصم

ミーティングの議題を決める際には、必ず議題を決める会議を設ける。

卷之三

「…」

「…」

「…」

「…大丈夫なんですか？」

「…大丈夫よね？」

「…大丈夫だと思いますが

「…あわわわわ」

「…ユノさんやりすぎじゃないですか？」

「その後彼らの行方を知る者は誰もいなかつた…」

「…大丈夫。まだ生きてる。…多分」

「…たぶん…!？」「…」「…」

「…ん？」

目を開けるとそこは見たことのない世界だった。

そこは荒野だった。

私以外の生命はそこになかった。

空を見上げればそこにあるのは巨大な歯車。

絶えずその身を回し続ける。

まるで何かを生み出そうとするかのようだ。

目の前に視線を戻すとそこには半透明の翼を持つた金髪の天使がいた。

彼女はこっちを振り向くと…。

「あれ？間違えちゃつた？」

「は？」

その言葉とともに地面から無数の...。

「△△ハンー？」

夢
か。

伝説の玩具、その名は……（後書き）

感想待つてます。

召喚士、南の島へ行く（前書き）

前回のラストは某鍊鉄の英雄の心象風景を参考にしてみました。

召喚士、南の島へ行く

ネギ君たちに誘われて海に来たわけだが…。

『海だ――――――――――――』

「若いつていいねえ~」

「…'うん」

「老けこまないでくださいよ~一人とも。それにユノさんが一番若い
でしょ」

「そうは言つがあいつらのあのテンションにはついていけないよ。
「ほらほら、みんなの様子を見に行きましょ~」

「お前もテンション高いな」

「だつて海ですよ? 南の楽園ですよ?」
「あげなくていいつあげる
んですか?」

やつぱり相坂も2・Aの一員か…。

適当に歩いていると足元にビーチボールが転がってきた。

「あ、クースさん。ボールとつて~」

ボールを拾つて佐々木に投げて渡す。

「ありがと~」

そのままビーチバレーをやつている集団に近づいて行く。

「大河内、隣いいか?」

「あ、どうだ~」

大河内に許可をもらつてから隣に座る。そのままビーチバレーの試合を見ていると大河内がちらちらこつちを見てきた。

「どうした? 聞きたいことがあるなら聞くが?」

「いや、その、全身にあるんですね」

「ん?… ああ、刺青のことか。やつぱりになるか? 私が副担任になつた時も質問してきたし」

「はい、おまじないつて言つてましたけど、いつものなんですか

？」

「簡単にいえば語りかけるためのものだ」

「語りかけるですか？」

「そう。精霊や妖精といった存在要するに目に見えない者たちに『私はあなたたちと仲良くしたいんです』『あなたの力を貸してくれませんか？』と語りかけるものだ」

「だから、私が惹かれてたんですね！」

「あ、相坂さん。いたの？」

ガーン！！

「『』ごめ…」

「いいんです。いいんです。私なんて姿が見えるようになつたところでこの存在感の薄さはなおんないんです。大河内さんが悪いんじやありません。私が、存在感ない私が悪いんです」

相坂がしゃがみこんでの字を書き始めた。

「『』ごめん！悪気があつたわけじゃないんだ。ただクラスさんの刺青が気になつてそつちに目が言つちやつて。だから、えーとつまりこれはクラスさんのせい？…じゃない何私は人のせいにしてるんだ？」

大河内が頭を抱えて悩みだした。どうしたらいいんだこれは？ん、

ユノ？

なでなで

「どーせ私なんて…ユノさん？」

「えーとつまり…ユノちゃん？」

ユノが一人の頭を撫で始めた。

「…落ち着いた？」

「あ、はい」

「う、うん」

「コッ

「それじゃそろそろ次の所に行くか。大河内もしつかり楽しめよ

「ハイ」

「やつほー。クラースさん。両手に花だね
しばらく歩いてくると寝ながらデジカメをいじつている朝倉が話しかけてきた。

「ネギ君にはかなわないがな」

「ナハハハ。ネギ君にはかなわないよ。そうだオイル塗つてよクラースさん。さつきネギ君に断られちゃつてさー」

「鳴滝姉妹。朝倉がオイル塗つて欲しいそーだ」

「いくよー虫伽ー」

「了解ですうー」

「えつ、ちょっとーー?」

「ん? 神楽坂か」

「あ、クラースさん」

「どうしたんだ? そんな顔して。神楽坂らしくもない
今日の前にいる神楽坂からはいつもの元気は感じられない。
「ちょっとね?」。クラースさんは幼馴染の人と喧嘩したことってある?」

「そりゃあ、何度もあるが…」

「どうやって仲直りしたの?」

「私たちの場合は私が家を出てお互い一人の時間を作つたな。それでしばらく一人で考える。それで頭が冷えて家に戻るとまるでそんなことなかつたみたいにいつも通りの生活に戻つてたな」

「そんな簡単に?」

「長く一緒にいるとな。お互いの考えもわかつてくるんだよ

「ふ〜ん」

「で、いつ仲直りするんだ? 君たちは

「だつて…」

「もう許してるんだろ？それにお互いの考えがわからないなら話し
あうしかないじゃないか」

「そうね…。クラースさんネギ呼んで来てくれない？」

「ああ」

さてネギ君は…あそこか。

「つーん兄貴やつぱアスナの姉さんがいねーとカツコつかねーなー
ー」

「はつー！そだアスナさん。僕アスナさんに謝りに行かなきやーー
「落ち着けネギ君」

「クラースさん」

「神楽坂なら向こうにいるからしつかり話し合ひて來い」

「はいっ。わかりました！」

そう言うとものすごい速度で走つて行つてしまつた。

「クラースさん。聞きたいことがあるのですが…」

「なんだ綾瀬」

「クラースさんの研究とは魔法関係のことですか？」

「ああそうだよ。私が研究しているのは召喚術だ」

「私に教えて欲しいのですが」

「本気みたいだなだが…」

「無理だな」

「なぜですか」

「いくつか理由はあるが、なかでも三つが問題だ

「それはなんですか？」

「ひとつは刺青。ただの人間が召喚術を学ぶなら最低でも私の体に
刻まれているぐらいの刺青を刻まないといけない
体に刻まれている刺青を見せながら言つ。

「ひとつは契約の指輪。精霊たちと契約するにはそれなりの力がこ
もつた宝石が必要だ」

契約の指輪を見せて言つ。

「最後は契約する相手。契約する際には相手の同意が必要不可欠だ。そして無償で力を貸してくれる相手なんてのは滅多にいない」

「そうですか」

綾瀬が目に見えて落ち込む。

「ファンタジーな力が欲しいならネギ君に魔法を教えてもらえばいいだろ？」

そう言つとそこにはいる全員がぽかんとした顔をした。

「どうしたんだ？」

目の前にいた綾瀬に聞くと。

「いえ、てっきりネギ先生のように危険だからかかるなど言つやうだったので」

「そんなわけないだろ？ いちらの世界を知つてしまつたんだから最低限自分の身は守れるぐらにはならないとな。いつ巻き込まれるかわからないし」

「巻き込まれるとはどうことですか？」

「どうこうともなにも実際に巻き込まれただろ？ 修学旅行の時あのクラスには普通じゃない子がたくさんいるしな。

「いちらの世界に踏み込めばあの時以上の危険があるとこうひとは覚えておけ」
さてそろそろ寝るか……。

その夜

「わるいですナジ今回は勝たせていただきまわー、ドローリーー。」

「…ドローリーー」

「ふああ。ドローリーー」

「負けへんでー。ドローリーー。」

「読んでもしたよ。」の展開-れひびきローリーー-ナシトウノー-「

「…ドローリーー」

「奥の手は最後まで取つておくれものだ。ドローリーー」

「それがさよちやんの敗因や。ドローリーー」

「うう、ぐすつ、なんで勝てないんですかあ～～～～もつ一度で
す次は負けませんー」

「…月夜ばかりと想ひなよ（ボソッ）」

「…」

丘嶺士、南の島へ行く（後書き）

感想待つて待つてます。

音の精靈、現る（前書き）

あのトトが巻き込まれちゃいます。

音の精靈、現る

「龍宮。桜咲はしつかりやつてるか?」

「ちゃんとクラスさんの作ったプリントをやらせてあるよ。今日は警備の日だが中間がもうすぐあるので勉強させている。それじゃあ、いくぞ」

「ケケケ」

「…うん」

「ちょっと待つてくれ、クラスさん」

見回りを始めようとした瞬間龍宮に止められる。

「どうしたんだ?」

「刹那の代わりの警備つて彼女かい?」

私の隣にいるユノを指さしながら訪ねてくれる。

「そうだが?」

「心配スンナヨ。俺ト旦那ト妹ガ直々ニ鍛エテンド。アイツニ負ケ
ネエグライベエゾ」

「…よろしく」

「あ、ああ。よろしく」

しばらく歩いていると何か違和感を感じた。立ち止まってあたりを見回してみる。

「どうしたんだい、クラスさん」

「静かすぎる」

虫の鳴き声や風が木の葉を揺らす音をつづけたり前の音が聞こえない。

「周りを警戒しろ」

「了解」

「…うん」

「ケケケ」

四人の背中を合わせてまわりを警戒する。

「「「「」」」

「敵を討て」

「上だ！」

上を見ると無数の魔法の射手がこちらに向かつて来ていた。それぞれ回避する。全てを回避してはなつてきた相手を見る。

「妖精？」

上空には30センチほどの小人が背中の羽をパタパタ動かして飛んでいる。

『魔法の射手連弾・光の11矢！！』

『魔法の射手連弾・光の11矢！！』

『魔法の

射手連弾・光の11矢！！』

『魔法の

射手連弾・光の11矢！！』

『魔法の

射手連弾・光の11矢！！』

11矢！！』

『魔法の射手連弾・光の11矢！！』

『魔法の射手連弾・光の11矢！！』

『魔法の

射手連弾・光の11矢！！』

射手連弾・光の11矢！！』

「これはネギ君の声？」

ネギ君の声が壊れたプレーヤーのように何度も同じ詠唱を続けて魔法の射手を生み出し続けている。

「全員私の近くに集まれ！粗暴な紅蓮の猛者よ、翠の風まとう姉妹よ、奔放なる大地の精よ、蒼き水流の女傑よ、地水火風を司りし四大精靈よ…」

呼びかけに応じて魔法の射手をよけながら私の近くに集まってくる。

「我らを守る堅固な盾と化せ！ テトラシールド！」

詠唱が終わり四面体が私たちを囲み魔法の射手から守る。

「あれは一体何なんだ？」

「おそらく、音の精霊だな。しかしながらこんなところへ。

『なんじゃこりやーー！？』

この声は！？

「つたぐ。よりにもよつて新田の授業の宿題を学校に忘れるとは… クラースさんとかなら簡単に許してくれるけど新田はなあ…」

「せつさと行くか」

…ドォン…ドォン…ドォン。

「な、なんだ？」

ロボ研の奴らがまたおかしなものでも作つてんのか？近所迷惑だつての。

そう思い音がする方を覗いてみたり。

妖精みたいな小さな奴。その小さな奴の前から無数に放たれている光の弾丸。その光の弾丸を受けている半透明の四面体。その中にいるクラースさんとクラスメイト一人と人形。

ここから導き出される答えは…。

「なんじゃこりやーー！？」

あれは長谷川！？何でこんな時間に！？しまった精霊が彼女に気付いた。

「ノーム！ 彼女をここまで連れて來い！」

四面体の一つが外れ彼女のもとへ飛んでいく。長谷川のもとまでいくと彼女を包みこみこちらに戻つてくる。

「おい！ ビーウー」とだよこれー光の弾丸とかビーのアニメの話だよ！？」

「とりあえず落ち着け、長谷川。手短に説明するぞ？ これは現実で

この中にいる限りは安全だ。私たちの今すべきことはあれを倒すか説得して無力化することだ。質問は？」

「……」

「にも言えないか。確かにいきなり巻き込まれたら困るよな。

「チャチャゼロと龍宮は長谷川を守れ。怪我ひとつさせぬな

「ショウガネエナア」

「了解」

「ユノは私が精霊の気をひきつけるからそのうちにマナを流し込んで暴走状態を止める」

「わかった」

「いぐぞ！ 来い！ イフリート！ シルフ！ ウンティイーネ！ ノーム！」

そう叫び今まで盾となっていたそれぞれの精霊が元の姿を取る。

「音の精霊よ！ 私たちが相手だ！」

クラースがそう叫ぶと音の精霊は新たな呪文を唱え始める。

『ラス・テル・マ・スキル・マギステル。来れ雷精、風の精！』

『リク・ラク・ラ・ラック・ライラ

ック。来れ氷精、闇の精！』

『雷を纏いて吹きすゞ南洋の嵐』

『雷の暴風！』

『闇の吹雪！』

かつてエヴァとネギ君が打ち合つた呪文が並んで飛んでくるが…。

「四大精霊を舐めるな！ 受け止める！」

四大精霊がそれぞれ火、風、水、土を操り受け止める。

「ユノ！ 今だ！」

魔法を受け止められて戸惑つている精霊の後ろからコノが飛び出し精霊を抱きしめる。

「大丈夫。怖くないから」

ユノからマナが送られるとともに高ぶつていた精霊の感情が静まつていく。

「ボクは…ボクは…」

「落ち着いたみたいだな。話を聞かせてくれるか?」

「うん」

音の精霊エトスは自分の存在に気付いてくれる人を探して世界中を旅した。その途中で出会った魔法使いに麻帆良へ行くように言われおまじないをしてもらいここで来た。そこからは記憶がないようだ。

「わかった。お前が望むなら私とこないか?」

「いいの? あなたたちに酷いことをしたのに?」

「かまわないさ。その代わり君の力を貸してほしい」

「うん。アズライトの指輪がいい」

「我、いま音の精に願い奉る。指輪の盟約のもと、我に精霊を従わせたまえ…。我が名は… クラース・F・レスター」

エトスが光となり指輪に宿る。

「終ワツタミタイダナ」

「ああ」

「クラスさん。あんたに聞きたいことがあるんだが…」

精霊との契約が終わりチャチャチャゼロ達のもとへ戻ると長谷川が話しかけてきた。

「お前の気持ちもわかるが今は寮へ帰れ。聞きたいことは明日…いやもう今日か。今日の放課後に教えてやる。龍宮送つてやつてくれ」

「了解」

龍宮と長谷川を見送りまだ残つて居る一人に話しかける。

「私たちも帰るか」

「…うん」

「ケケケ」

「すいません。宿題忘れました」

「長谷川！お前たるんで……どうした顔色が悪いぞ？」

「ちょっと調子が悪いので保健室で休んできます」

保健室

長谷川さん大丈夫やろか？

ガラ

「長谷川さんだいじょうぶ……」

「あり得ない。あり得ない。あり得ない。あり得ない。あり得ない

……ブツブツ

「……」

そつとしてあげるのが一番やな。別にかかわりたくないとかそんな
んぢやうで？

音の精靈、現る（後書き）

感想待つてます。

世界樹の落とし子の設定（前書き）

モノの設定です。

世界樹の落とし子の設定

名前	ユノ・G・レスター ^{グレイア}
年齢	肉体年齢15歳 実年齢数週間
身長	157センチ
体重	?キロ
容姿	髪の色は茶々丸と同じ少し薄い緑、長さは肩にかかる程度。瞳の色は海のような青。そして昔のすずのよつたな無表情。
性格	無垢。好奇心旺盛。
趣味	調べもの。小物作り。
能力	
その一	ディセンダーの能力により様々な武器を使いこなすことができる。また魔法も使える。
その二	自らのマナを分け与えることで相手の感情を落ち着かせることができる。
その三	
?	

ネギまの世界の世界樹により生み出されたディセンダー。クラス

を手伝うために生み出されたためかクラスによくなついている。
無表情だが感情がないのではなく出し方が分からないだけ 3 - A の
生徒たちこよつて表情が豊かになりつつある。

世界樹の落とし子の設定（後書き）

感想待つてます。

召喚士、向きてこなる

「… というのが魔法とそれに関係する裏の世界の概要です」「ふうん」

魔法がばれるとオ「ジョ」とかどこの魔女っ子ものだよそのベタな罰則。ついて行けねーぞ。ん? ちょっと待てよ。

「なんで私の記憶は消されないんだ? ばれるとまずいんだろ?」

「そのことはクラスさんに聞かないとわかりません」

「じゃあ行くか」

「案内します」

それにしてもファンタジーとしか言いようがねえな此処は。

「「」うち側のことは大体わかつたか?」

茶々丸が連れてきた長谷川に話しかける。

「わかつたけどよ。なんで私の記憶は消されないんだ?」「ん? ああ、説明してなかつたか。

「それはお前の体质に問題があるんだ」

「体质?」

「「」の学園にはな、認識阻害の結界があつてあり得ないことが起つても大体は『まあ、麻帆良だから』って感じで不思議に思わないようになつてるんだ」

「だから、10歳のガキが先生をやれるのか」

「そう、で、問題なのは長谷川の体质だ。長谷川はそういう魔法が効きにくいんだ。だから昨日のように本来は近づけない場所にも入つてしまつし、周りの奴らとの感覚の違つてしまつんだ」

「マジかよ。こうことはまた巻き込まれる可能性があるつてことか? 私の日常が…」

そう言い頭を抱えてしまつた。

「大丈夫だ」

長谷川の頭を撫でながら言つ。

「たとえどんな危険が長谷川を襲つても私が守つてやる」

長谷川は顔を上げ。

「クラースさん……あんたつて強いのか？」
ピシッ。

「千雨さんクラースさんは…」

「あんときだつて敵の攻撃受け止めてただけだし。防戦一方だつた
じゃねえか。そんなんで守るとか言われても」

ブチッ！

「え？」

「いいだらうそこまで言つなら私の本気といつものを見せてやる」
ちょうど新しい技も考へていたところだ。

「プラクテ・ビギ・ナルー——！」

全くよくやるな。わざわざ平穏を捨てているようなものだぞ。

「エヴァー！久しづりに模擬戦をやるぞー！」

珍しいなこいつから勝負を申し込んでくるなんて…。なんか笑顔が
怖いぞ！？

「私は一人でいい。そつちは三人で來い。なんなら桜咲を入れても
良いぞ？」

「どういうことだ茶々丸」

こいつの様子は明らかにおかしい。

「ハイ、実は…」

ふむ…………ガキかつ！！！まあ、久しづりに暴れられるから
よしとするか。

「刹那！ちょっとこっちに來い」

まさかクラースさんと戦うことになるとは、しかしクラースさんの
あの太刀筋、あれは剣を習つて居る者のものだ。一度手を合わせた
いと思つていた。

「エヴァンジエリンさん。最初は私にいかせてください」「いいだろう。ただし十分だ。そしたら私たちも手を出す」「わかりました」

「最初は桜咲か」

エヴァたちはまだ手を出さないみたいだな。なら…。

「クレス！」

姿をクレスに変えエターナルソードを構える。

「来い！」

「斬岩剣！！」

ガギンッ！！

「甘いよ！秋沙雨！」

素早い突きを繰り返すが全て逸らされる。なら。

「奥義！獅子千裂破！」

やはり逸らすか…だが！

ゴウッ…！

「ぐあつ…」

そんな状態では決めの獅子戦吼は避けれないだろ？

「くつ！斬空閃！」

「守護方陣！」

「なつ！？」

「いくよ…空間翔転移！」

これでお終いだ。

「消えた！？」

「上だ！刹那！」

「遅い！」

連撃を叩き込み吹き飛ばす。桜咲の動きが止まつたのを見て姿を戻してエヴァたちに言う。

「さつと全員で来い！」

「やつせと立て剎那。あこのつの中のひとおり全員でござぞ」

「は、はい。エヴァンジリンさん」

さあ、あいつは何を見させてくれるんだ。

「チャチャゼロ！茶々丸！行け！」

「精靈装填・ワイバーン『飛竜乗雲』」

クラスの背から竜の羽が生えて足は鱗で覆われる。

「いいぞクラス！ もつと私を楽しませろ！ リク・ラク・ラ・ラッ

ク・ライラック。来れ氷精、闇の精！！闇を従え吹雪け常夜の氷雪、

闇の吹雪

ブレスで相殺だと！？相変わらずでたらめだな。

「ケケケ！ 横ガガラ空キダゼ！」

「失礼します」

だが、この二人の攻撃はどうする？

ガキイン！ ドゴッ！

あの一人の攻撃を受けて無傷だと！？どんだけ固いんだあの鱗は！？

「崩竜双武掌」

「ウオ！？」

「グッ！？」

「リク・ラク・ラ・ラッカ・ライラック」

「屏」

「ちつ！」

「おまえ、七勿れ！」

「崩竜牙突！」

「どうして？」

「かは」の文

ケテロフの攻撃を受けて飛はれながら見る夕田はいゝもより細く見えた。

「私の実力はこんなものだが不満か？長谷川」

「さつきはその生意気言つてすいませんでした…」

「つか、早くその格好やめるよ！…昨日の夜とは比べ物にならないくらい…」
「えーよ！…なんだよその翼！鱗！爪！もう悪役じゃねえか！？」

…

「クラス！貴様、私を殺す氣か！？なんだそのバカみたいな防御力と攻撃力は！」
「いやいや生きてるだけで十分化物だよエヴァンジエリン…！」

はあ…。…」ついでに比べたら麻帆良の非常識なんて可愛いもんか。

召喚士、向かひしなる（後書き）

精霊装填・ワイヤーバーン『飛竜乗雲』のようにカッコイイ四文字熟語を募集します。

出来れば風や水などその精霊の属性を入れてください。
感想待っています。

時空戦士たちの過去～物語の始まり～（前書き）

時空戦士の過去。 まずはクレスとヒュスター です。

時空戦士たちの過去～物語の始まり～

夜

ネギ君の記憶を見た。

父親を夢見て無茶をするネギ君。

紅く燃える村。

無数の悪魔。

石になつた村人。

助けに来た父親。

杖を渡し去つていいく父親。

「今でも時々思つんです。あの出来事は『ピンチになつたらお父さんが助けに来てくれる』なんて思つた僕への天罰なんじやないかって…」

あれは天罰なんかじゃない。襲つてきた奴らに対してネギ君の存在が『ペンドント』あるいは『魔科学』そのどちらかだつたのだろう。だが…

ネギ君を中心に集まる彼女たちを見て思つ。私たちと同じで一人じやないきつと乗り越えられるさ。

「……」

「どうしたのゆえつち？」

「いえ、今見た悪魔と修学旅行の時にクラースさんが召喚したもの

が随分違うと思いまして…」

「それはそうだろ。あれはまったく違う存在だ。いい機会だクラース。こいつらにお前の過去を見せてやれ」

まあいいだろ。

「これから見せるのは私たちの記憶だ。ネギ君の記憶より酷い場面もある。それでも見たい奴は私の周りに集まってくれ」

カードを見せながらそう言つと全員が私の周りに集まつて来た。

「いいだろ。…心の精靈、ヴヨリウスよ。我らの心を彼らに見せたまえ」

そう言うと私たちの周りが一変した。

「天光満つる所に我はあり…」

どこかの城の中。4人組のパーティーが金髪の男と戦つている。剣士が剣を振り、男がそれに反撃する。その間に魔術師が詠唱を続ける。

「黄泉の門開くとこに汝あり…出でよ、神の雷…」

「なに！？それは…」

「これで最後だ！インティグネイション！」

凄まじい雷が男に直撃する。

「そんな…そんな馬鹿な！うわああああ…」

男が叫び倒れる瞬間、男は光となつてどこかへ消えた。

そして舞台は地下墓地に変わる。雷を放つ魔術師にそつくりな者と剣や杖を持った四人のパーティーの前に雷と共に現れる男。

「き、貴様！？なぜ、ここに！？やめろおおおお…」

その刹那、男は結界に閉じ込められ、その力を2つのペンダントに封じられた上で石の棺の中に閉じ込められる。

「これで…私の家に代々続いた使命も終わりか…」

「Jの人たちは？」

「見てればわかるぞ」

場面は変わりあるのどかな村。剣術道場で赤いバンダナを巻いた少年が大人と老人に話しかける。

少年「こんにちは、トリスタン師匠。お久しぶりです」

トリスタン「おお、クレスか。久しぶりじゃのう」

大人の男性「クレス」

クレス「なに、父さん？」

クレスの父「母さんの具合のほうはどうだ？」

クレス「熱も下がったみたいだし、もう大丈夫だと思つよ」

クレスの父「実はな、クレス…お前にやつたペンドントについて、話があるんだ」

クレス「ペンドント？ああ、15歳の誕生日の時にもらつたペンドントのこと？あの時、父さんに言われたとおり大切に持つてるよ。あが、どうかしたの？」

ある家の前青い髪をした少年が同じく髪の青い少女に話しかける。

少年「それじゃ、狩りに行つてくるよ」

少女「気をつけてね、お兄ちゃん」

少年「ああ、留守番たのむぞ」

少女「お兄ちゃん、クレスさんに渡したいものがあるつて伝えてほしいんだけど」

少年「ああ、わかつたよ」

少女「行つてらつしゃーい」

剣術道場に向かう少年。

少年「おーい、クレス、行ぐぞー！」

再び道場の中に視点は移る。

クレス「あ、父さんごめん。今日は、チエスターと約束していたんだつた」

クレスの父「ああ、ペンドントのことは夕食の時にでも話そひ」
クレス「はい。トリスタン師匠、ゆつくりしていつて下さい」
家の外に出るクレス。

クレス「悪い悪い、待たせたな」

チェスター「気にするなよ。それより、誰か来てるのか？みんなの声が、いつにも増して気合入つてるように聞こえるけど…」

クレス「ああ、師匠が来てるんだ」

チェスター「師匠つて、トリスタンとかいうじいさんか？あんまり、すごい人には見えないけどな」

クレス「昔、父さんは師匠に厳しく剣の手ほどきを受けたという話だけど…」

大人の女性「クレス」

女性が玄関まで出でてくる。

クレス「母さん、まだ病み上がりなんだから外に出ちゃダメだよ」

クレスの母「でも、お前が心配でね。ケガしないように気をつけなさいよ」

クレス「わかつてゐる。チエスターの『』と僕の剣があれば大丈夫さ」

チエスター「おばさん、心配しないで。山ほど獲物を狩つてくるから」

クレスの母「わかつたわ。でも、くれぐれも無理はしないでね」

チエスター「それじゃあ、そろそろ行こうぜ」

クレス「ああ、そうしよう」

チエスター「あつ、そうだ忘れてた。アミィが、お前に渡したいものがあるつてさ」

家の中に入つていくクレスの母。

平和な風景を見せる村。少女、アミィにお手製のマスクシットをもらつたり、雑貨屋からもらつたりんごをアミィにあげたりした。結婚を控えた村人はその事を幸せそうに語つていたりと、平穏な日々の情景がそこにはあった。村の外に出ようとすると、

トリスタン「クレスよーい」

トリスタンもまた帰る所であった。

クレス「師匠、お帰りですか？」

トリスタン「実はな、先程、見知らぬ者が来て急に呼び出されたんじゃ。何の用事か告げもせぬ。まったく、無作法者じゃ。おんしはどこへ行くんじゃ？」

クレス「南の森まで猪狩りに行つてくるんです」

トリスタン「そうか、精進せいよ」

そう言いトリスタンは村を去つた。

南の森にて。

チエスター「あつ、猪だ！！」

一目散に逃げていく猪。

チエスター「追いかけよつ！」

森の少し奥にて先程の猪を見つける。

クレス「いた、あそこだ！！」

またも逃げる猪。

チエスター「逃がすもんか！」

森の奥の大きな枯れ木の近くにやつてくる一人。

クレス「あれ？見失つたか…」

チエスター「間違いなく、この辺にいるはずなんだけどな…オレ、近くを探してくるぜ」

クレス「確かに、こっちへ来たと思つたんだけど…」

その時、精靈のような女性の声がする。

？？？「樹を…けがさないで…」

そしてクレスの眼に映る、枯れ木がまだ生きていたころの姿。しかし気がつくとそこはまた元の大きな枯れ木であった。

チエスター「こっちには、いなかつたぞ。そつちはどうだ？クレス、どうした？」

チエスターの声に我に返るクレス。

クレス「いや…」

その時、猪が目の前に現れる。

チエスター「いたぞ！」

猪との戦い。勝利した後、

クレス「大物だな！」

チエスター「これだけ獲れれば十分だろう。それじゃあ、村に戻ろうぜ」

その時、村の危急を告げるための半鐘が森の中に鳴り響く。

チエスター「なつ、なんだ！？」

クレス「あれは…村の半鐘の音だ！何かあつたのか！？」

チエスター「急ごう！…」

大急ぎで南の森を出て、村に戻る一人。しかし一人を待ち受けていたのは火をかけられ、廃墟と化した村の姿だった。

「ひどい…」

あまりの光景にほとんどの者が顔をそむける。

クレス「そ、そんな…」

チエスター「オレ…家を見てくる！アミイ！」

アミイの名を呼びながら、単身家のほうへ走つていくチエスター。村人たちはすでに息絶えたものがほとんどであった。先程まで平穏な日々を過ごしていたはずの村人たちが何故？クレスは剣術道場まで戻るが、そこには瀕死の重傷を負つた父の姿があった。

クレス「と、父さん…」

クレスの父「クレス…母さんは…無事か…」

クレス「父さん、何が起きたの？」

クレスの父「…ぐふつ…」

息絶えるクレスの父。

クレス「父さん…！」

その時、家の戸口からクレスの母が現れる。

クレス「母さん…！」

しかしクレスの母も瀕死の重傷を負つていていたようで、クレスの前で倒れる。

クレス「母さん、しつかり！」

クレスの母「クレス、逃げなさい。伯父の住む北の都ヨークリッドに…あいつらは、お前のペンドントを…」

クレス「あいつらって誰！？いつたい誰が…こんなことを…」

クレスの母「父さんは…私が人質にとられなければ…ああ…」

息絶えるクレスの母。そして降り出す雨。

クレス「母さん、母さん…！」

クレスの母「…」

クレス「目を、開けてよ…母さん…！」

クレスの悲痛な絶叫が空に木霊する。

クレス「うわあああああ…！」

そしてチエスターの家。チエスターがアミイの亡骸のそばにいた。
クレス「…チエスター…チエスター…」
ドの僕の伯父の所へ行こう…」

チエスター「…アミイや村の人達をこのままにして、逃げるつて
いつのか？オレはいやだ！行くんなら一人で行け！…みんなを弔
わないと…オレ一人だけでも…」

クレス「村を襲つた奴らが戻つてきたら、殺されるかもしねいん
だぞ！」

チエスター「…すまん、クレス…それでも、オレは…」

クレス「チエスター…」

チエスター「先に行つててくれ…一人とも残るのは危険だ。オレは
後から必ず行くから」

クレス「必ずだぞ…」

チエスター「ああ、必ずだ…一人で必ず敵を討つぞ…」

クレス「ああ！」

チエスターの家を出ようとしたとき、クレスの母の最期の言葉が甦

つてくる。

クレスの母「あいつは…お前のペンダントを…」

クレス「父さんがくれた、ペンダントを狙う奴ら……早く」
から離れよう…そうすれば、少なくともヒュスターが狙われる」と
はないはずだ…」

そしてクレスは単身、ユーハクリックドを団地の村を出る。となる。

全部書くことはできないのでとりあえず、それぞれの出来ことアーリイのイベント、最終決戦～ヒローグまでのことを書きたいと思います。他にもこのイベントは外せないというモノがありましたら感想に書いてください。おつりの限り書きたいと思います。感想待っています。

マイソロさまでした。

クリースさんあなたの帽子はしつかり受け継がました。

时空戦士たちの過去～語られたる因縁～

壊滅した村を単身旅立つたクレスは、ヨークリッドの伯父オルソンの元に向かうが、オルソンに裏切られ黒鎧の男に捕えられた。

「どうして…クレスさんを」

「やつしなければあの街が壊滅していた…まああの男も生かされてはいらないだろ？」

兵士「ミゲールの息子を、捕らえてきました！」

黒鎧の男「うーん、ふ、貴様のような若造が持っていたとはな…」

クレス「村を襲つたのはお前だな…」

黒鎧の男「だとしたら、どうだところのだ弱き者よ」

クレス「くつかつ、返せ…！」

黒鎧の男「このペンダントは、もうつとおぐ…おこ、この若造の武器を奪つて牢に入れておけ。ふふ…これでつよい！」

番兵「よし、入れー長生きしたかつたら、おとなしくしていろ」と
だな」

クレス「くわつ…！」

牢屋に入れられたクレスは周囲を探る。

クレス「うーん、この穴からじや出られないな…」

牢屋に空いていた小さな穴を調べると声が聞こえた。

女性「私の…声が、聞こえますか」

クレス「なんだ？今…女人の声がしなかつたか？」

女性「手をこちらへ…」

クレス「誰…ですか？」

女性「手をこちらへ…差し伸べて下さ…あなたの助けに…なりた

いのです……

クレス「……」

クレスが穴の向こうに手をかざすと手の上に何かを置かれた。

クレス「これは、イヤリング？」

それは角を持った白馬、ゴーラーンをかたどったイヤリングだつた。女性「それを壁にかざして……そして、牢屋に捕まっている女の子を助けてあげて……あなたなら……きっと、館から出られるわ」

クレス「ちょ、ちょっと待つて！あなたは……」

女性「……お願い……」

クレス「……とにかく、イヤリングをかざしてみよう」

壁にイヤリングをかざすとまばゆい光が溢れだし、その光が治まる

と壁にあつた小さな穴が人がくぐれるほどの大ささになつた。

クレス「これは……さつきの人に会つて、お礼を言わなければ……そこでクレスが見たのは鎖でつながれ剣で貫かれている女性の姿だつた。

クレス「そんな……あの手の温もりは、何だつたんだろう……」

ほとんどの者が田をそらす。裏にかかわっている桜咲も顔をしかめている。

クレス「剣が突き刺さつてゐる……ひどいことを……使わせてもらいます」
クレスは女性から剣を引き抜き牢屋の扉をこじ開けた。牢から出て出口を探すと一人の少女を見つけた。

クレス「大丈夫？ケガはない？……心配しなくてもいいよ。僕は、君を助けに来たんだ。僕はクレス、君は？」

少女「ミント……私はミント＝アドネードですあの……助けていただいてありがとうございます」

クレス「僕も捕まつたんだけどね。さあ、一緒にここから出よう。いつまでもここにいるわけにはいかないからね」

ミント「あの……私の母も助けて下さい……向こうの牢に捕らえられて

いるはずです」

クレス「えつ？」

その方向はさつき自分が出てきた方向。そこで見つけた人は自分を助けてくれた彼女しかいない。

クレス（この子は母親の死を知らない。現実をこの子に見せるのは、あまりにも気の毒だ…）

クレス「……あっちには誰もいなかつたよ」

ミント「で、でも、確かに、母の声が聞こえていました！私を、励ます声が、確かに、母が…」

クレス「時間が無いんだ、早くしないと見つかってしまうかもしないし…」

ミント「わかりました…」

地下水路を抜け一人は外へ出た。

クレス「ここまで来れば、もう大丈夫だらつ…ミント、危ない…！」木の上から落ちてきたなめくじ形のモンスターにやられて倒れるクレス。

クレス「くつ…！」

ミント「クレスさん！！」

クレス「くそつ、油断した…」

ミント「クレスさん、しつかりして！クレスさん…！」

倒れた拍子に転がり出たイヤリング。

ミント「これは！？」

それを拾い胸に抱くミント。

ミント「お母さん…」

涙が一筋彼女の頬を伝った。その時遠くから馬が走る音が聞こえた。

ミント「追つ手？逃げないと…」

ミントはイヤリングをしまい、クレスを背負つとよりめきながら歩き出す。

「強いなこいつは…」

目が覚めたクレスはモリスンと名乗る人の家にいた。そこでチエスターと再会する。モリスンにペンドントのことを聞かれ奪われたことを話すとクレス達を置いて地下墓地に向かう。残っていたクレス達はモリスンの家にやつて来たトリスタンの話を聞き地下墓地に行くことを決意する。数々のトラップをくぐり抜けて奥に進むクレス達。そして地下墓地の奥。結界に囲まれている棺の前に黒鎧の男とその部下らしき人物が一人。それに相対するようにモリスンが立っていた。

モリスン「お前の悪だくみもこれまでだ！ マルス＝ウルドール！」

マルス「ふん、わざわざ見物に来るとはな…ほら、仲間も来たようだぞ」

モリスン「お前達…あれほど来るな…」

モリスンがクレス達に気を取られているうちにマルスが結界の中にに入る。

モリスン「しまった！！」

マルス「ははは、間抜けが…」

マルスがペンドントを一つ棺の上に置くと結界を作っていた二つの水晶が砕け結界が消えると同時に地下墓地が揺れ出した。

チエスター「な、何だ？」

マルス「さあ、いにしえの王の復活だ」

クレス「何だと！？」

マルス「そうだな、冥土の土産に教えてやるつ…ヴァルハラ戦役…貴様らも知つておろう、今より100年ほど前に起こつた戦いを…当時最大を誇つた二国の連合を相手に圧倒的な力を見せつけた一国の王がいたその王の名はダオス！！しかしその男も、ある冒険者達の前に敗北することになる」

モリスン「知つていいるさ私は、その冒険者の血をひいているからな」

クレス「！？」

モリスン「私だけではない。クレス君、君とお嬢さんは…私と同じく、その昔、ダオスと戦った者達の子孫なのだ」

クレス「僕が？」

ミント「私が！？」

モリスン「君達が襲われたのは、偶然ではない。昔から続いた、ダオスをめぐる因縁ゆえなのだ。そのダオスの復活を、この男は私欲のためにたくらんだ。そうだな…！元・ヨークリッド独立騎士団長

マルス＝ウルドール」

マルス「ふ…ダオスの復活は、定められたことだ！止められぬわ！」

クレス「…」

チエスター「うるせえ！ダオスだか因縁だか知らねえが俺には…そんなことは関係ねえ！てめえは…・・・てめえはアミイの仇だ…！それだけで十分だ！」

マルス「愚か者どもが！もう遅いわ！」

棺の中から光が溢れだし蓋を破壊しながら金髪の男が現れる。

マルス「おお…これが、いにしえの王ダオス」

マルスはダオスに語りかける。

マルス「ダオスよ、いにしえの王よ、我の命ずる所を聞け。我が名はマルス・・・マルス＝ウルドール…」

ダオス「ふふ、運命の糸に操られていたことに気づかぬ愚か者よ」

マルス「何を言っている！封印を解いた俺が、貴様の主なのだ！！」

ダオス「私を封印した者どもを殺し、封印を解く鍵を奪わせたのは、他ならぬこの私自身…思い出させてやろうつか？三ヶ月前、お前がここに訪れた時に何があつたかを…」

マルス「ぬ、ぬかせ…！」

モリスン「危ない、よけろ…！」

マルス「何！？」

ダオス「お前には、もう用はない」

マルス「う、うわあ…！！！」

ダオスの手から光線が放たれマルスとその部下が消え去る。

ダオス「私が背負う重大な運命もわからず、我利のみを求める勝手な振る舞いを続ける人間達…そして私を封印した者どもの生き残り…そこのお前…！断じて許せるものではない！」

ダオスはモリスンを睨みながら話す。

モリスン「奴は剣では倒せない私が法術で、君達のある場所へ送る。そこで、奴を倒す方法を学んでくるんだもうこれしか方法はない！」

クレス「どういふことです！？」

モリスン「説明しているひまはない…それと、この本を…」

クレス「これは！？」

モリスン「ミゲールとマリアの遺志を、継いでくれ…頼んだぞ…」

そう言うとモリスンが詠唱を始める。

ダオス「ククク、死ね」

ダオスの手に力が集まり始める。

チエスター「くそつ、間に合わない…！」

チエスターがダオスに殴りかかり、力を集めるのをやめたダオスに殴り飛ばされる。

クレス「チエスター…！」

ミント「チエスターさん…！」

クレス達が叫んだ瞬間モリスンの呪文が発動し、青白い光となりクレスとミントはどこかへ飛んで行つた。

モリスン「チエスター君、しつかり！」

ダオス「あの輝きは時間転移の光。答える…奴らをどいへやつた？」

モリスン「言うと思つているのか！？」

ダオス「こしゃくな奴め…いつの時代に送つたかは知らぬが…自分自身を転移できないとは、まだ未熟だな」

モリスン「…くそつ…！」

ダオス「ククク…ここで朽ち果てるがいい…！」

ダオスを中心に光が押し寄せ何も見えなくなつた。

時代戦士たちの過去～語りたる因縁～（後書き）

感想待つてます。

时空戦士たちの過去～集まりだす英雄達～（前書き）

クラスとアーチュです。ロトはこれらをややこしくなつやうなので過去を見終わった後軽く説明するのみにしたいと思います。

クレスとミントが目を覚ました場所はどこかの草原だった。二人はモリスンの本を読みダオスと自分たちの関係を確認する。その後二人は近くの村に行きここが100年前だということを知り魔術でしか傷つかないというダオスを倒すため、村長に聞いたクレスを訪ねることにした。

ミント「あの、あなたがクレスさんでしょつか？」

クレス「ん？」

「あつ。クレスさんや～」

クレス「そうだが…この私に何の用かな？お嬢ちゃん…」

ミント「クレスさんの魔術の知識を教えていただきたいのです」

クレス「魔術？…ああ、魔術学の受講希望者か。ならば、奥にいるミラルドにそう言ってくれ。受講料は前金で2万ガルド」

ミント「え？、お金？そんなには…」

クレス「それでは、教えるわけにはいかないな。出直しておいで、お嬢ちゃん」

ミント「……その呼び方はやめて下さい」

クレス「すまないね。何しろ、まだ君の名前を知らないものでな。初対面だと思ったのは、私の勘違いか？」

ミント「あつ、す、すみません。私は、ミント＝アドネードと申します。こちらは、クレスさんです」

クレス「クレスさん、僕達には魔術がどうしても必要なんです！」

ダオスを倒すために！」

클래스「ダオスを倒すだと？本気か？ふん、魔術についてタダで学ぼうという口実にしては、大風呂敷すぎると思うがな」

クレス「なつ！」

ミント「ひどい…」

「…クラス」

「このころはあまり人が好きではなくてな」

女性「クラス！そんな言い方はないでしょ…」

クラス「ミラルド！」

ミラルド「まつたくもう…どうしてあなたはそうぶつきらぼうで、がさつで、思いやりがないの？初対面の人でしょ？あなたを頼つて来てるんでしょう？もう少し優しくできないの？ほんとにばかばかばか…もう…ごめんなさいねこの人、精神的に子供なの。…そうだわ！こんな人じゃなくて、もっと頼りになる人を、私が紹介してあげるわ。こ・ん・な・人…じゃなくてね」

クラス「な！おいつ…！こんな人とはなんだ…！こんな人とは…！」

ミラルド「悪い？頼りにならない人になんて、こんな人で十分でしょ…」

クラス「頼りにならないとは、どういう意味だ！この辺じゃ私以外に誰がいると…うんだ…？」

ミラルド「あら、わかつてゐるじゃない」

「くつくつく。尻に敷かれてるな。クラス
「つづるわ…！黙つてみてる…」

ミラルド（あなた達、もつひと押しよ…）

ミント「あの、私達…」

クレス「どうしても、クレスさんの協力が必要なんですね」

クレス「協力?」

ミント「はい、そうです」

クレス「ふう、なんだか知らんがわけありらしいな……いつたい、どういうことか話を聞こうじゃないか」

クレスたちが自分たちのことを話す。

クレス「ううん…未来からねえ。信じがたいな…」

クレス「信じてもらえなくとも仕方がないことです…。僕もそうでしたから…。どちらにしても、ダオスを倒すためには魔術が必要なんです」

ミント「お願いです、力を貸していただけませんか?」

クレス「残念だが、私自身が魔術を使えるわけではない」

クレス「私は、エルフでもハーフエルフでもない普通の人間だからな。耳はとがっていないだろ?」

ミント「それは、ベルアダムの村長さんからもうかがいました。でも…クレスさんならきっと力になつていただけるはずと」

クレス「……実は、魔術使えるのはエルフだけではない。精霊もまた、魔術に等しい力を持っている。私の研究テーマは、精霊達の力を借りて魔術を使用する方法を探ることだ。その名を召喚術…」

ミラルド「でも、まだ使えないのよね」

クレス「いちいちうるさいな。理論的に可能なことはわかっているんだ。あとは、精霊と契約することに成功すれば、魔術と同等の力を使える。…だが、契約には様々な危険が伴うんだ何しろ精霊というやつは、人間がなかなか足を踏み入れないような所にいることが多い。クレス君にミントさん、だつたかな?そこで、だ…。君達が私に協力してくれるというなら…私の召喚術を君達の目的のために役立てようじゃないか。それでいいかな?」

クレス「は、はい!」

ミント「ありがとうございます!」

クラース「それなら、早速で悪いがローンヴァレイにつき合ってくれ。あの谷には風の精靈のシルフが住んでいるんだ。ミラルド、帽子を取ってくれ。……しばらく帰れないかもしねえが……」

ミラルド「私のことなら大丈夫よ。そうそう、帰ってきたら、今考えている新しいパイを作つてあげるわ」

クラース「ならば、それを励みにがんばるとするか。それじゃあ、行つてくるぞ」

クラース「ここが……」

クラース「風の精靈が住む谷、ローンヴァレイだ。この世の全ての物には、靈が宿っていると言われている。その多くがまだ未確認なんだが、強い力を持つ四大精靈は、存在が確認されている」

クラース「四大精靈ですか？」

クラース「そう、地水火風にそれぞれ宿る精靈を四大精靈と呼ぶ。風の精靈シルフはその内の一つなんだ」

ミント「それでは、これからシルフの助力を得るわけですね」

クラース「まあ、簡単にはいかんがそう考えて構わないだろう。実は、精靈との契約にはルーンリングと呼ばれる指輪が必要なんだ。私は『契約の指輪』と呼んでいるがな。まずはそれを手に入れる」

クラース「必要……つてクラースさんが、召喚術を考えたんじやなかつたんですか？」

クラース「実は、古文書が残つていてね。私はそれを元に研究し、完璧なものにしたのさ」

クラース「クラースさん一人ですか？すこいですね！」

クラース「頭の固い学会の連中には、できるわけがない、と言っていたがね。まあとにかく、その家に入るぞ。会いたい男がいるんだ」

クラース「失礼だが、あなたがパートさんですか？」

パート「あなたは？」

クラース「私はクラース、風の精霊との契約に挑戦したいんだ」

バート「しばらく待つた方がいい。以前に地震があつたろう？その後から精霊達が妙に騒ぎだしてな。一人じゃ近寄れんし、原因もわからないままだ」

クラース「事情はわかつたが、急ぐんでね。それと、君のところにあるルーンリングを譲つてほしい。もちろん、それに見合つ対価は払おう」

バート「……あんたがなぜ指輪のことを知つているのか知らないが……私の頼みを聞いてくれるなら指輪はタダで譲つてもいい」

クラース「どういうことだ？」

バート「実は、私の娘が何日か前から行方知れずになつてな。心配して精霊の様子を見に行つたかもしれないんだ」

クラース「女の子が一人で？ 危険すぎるだろう！？」

バート「無鉄砲な娘でな……困つている」

クラース「よし、引き受けよう」

バート「娘の名はアーチェといつてポニー・テールが特徴だ。誰に似たのかオテンバでね。とにかく目立つ子だよ」

クラース「わかつた、捜してこよう」

バート「風の精霊は、谷の一番奥のつり橋の向こうにいるはずだ。娘を頼む」

瘴気によつて精霊たちが苦しんでることが分かつた三人は瘴気が出でている穴を塞ぎシルフのもとへ向かつた。

シルフ「あなた達が……瘴気を取り除いてくれたのですね……」

クラース「いにしえの指輪の命に従い、風を司るそなたとの契約を結びたい」

シルフ「まあ……その紋様、心地いい鳴子の音、そして指輪から感じられる波動……人の身で、よくぞ召喚術を完成させましたね」

クラース「では！」

シルフ「あなたの力になりましよう。でもその前に、一つお願いがあります」

クラース「精靈が人間に願い？」

シルフ「はい、実は…今まで私は私達と契約しても近いには必ず、全くの無駄になってしまいます」

クラース「意味がわからんな。どういうことだ？」

シルフ「私達の力の現でもあるマナが、世界から失われようとしているのです。その結果、精靈も魔術も、世界から消滅してしまいます」

クラース「何だって！？それは、なぜ…？」

シルフ「精靈の森に生える世界樹ユグドラシルに一度会つて下さい。これを持つていけば、世界樹の精靈に会うことができます」

シルフ「話が聞ければ未然に防ぐこともできるかもしません」

クラース「…わかった、行つてみよう。その前に、一つ聞きたいことがある。この谷に少女が一人で迷い込まなかつたか？教えてくれ」

シルフ「この数ヶ月の間、谷を訪れたのはあなた方だけです。あなた方以外の人間は誰も見ておりません…」

クラース「そうか…」

シルフ「では、契約を結びましょう。オパールの指輪を…」

クラース「我、今、風の精に願い奉る。指輪の盟約のもと、我に精靈を従わせたまえ…。我が名はクラース…」

バート「やつたのか！？風が、すっかり元通りに戻つてゐるぞ…」

クラース「ああ…」

バート「それで？」

クラース「あんたの娘が谷に入った形蹟はなかつた。正氣を取り戻した精靈にも聞いてみたのだが…」

バート「そうか…。いつたい、どこに行つてしまつたんだ…。アーチェは？」

ミント「そう氣を落とさないで下さい。これから向かう町でも、娘さんのことは聞いてみますから」

バート「……ありがとう」

クラース「よし、それじゃあシルフの言つていた精靈の森とやらに行つてみるか」

ミント「確か、ベルアダムの村の南でしたよね」

クラース「ああ、そうだ」

クラース「これがシルフの言つていた世界樹ユグドラシルなのか？」

「ん、な、何だ！？」

クラース「この光景は……」

樹の精靈「私が、見えるのですか？声が、聞こえるのですね？ならば、聞いて下さい。滅びの時が、近いことを…あなた方だけにでも、知つてもらいたいのです。私は、世界樹『ユグドラシル』に宿る精靈『マーテル』今、世界樹ユグドラシルの死期が近づいています」

クラース「それは、寿命ということか？」

マーテル「いいえ、創世の時代より大地に根付く世界樹に、寿命はありません。マナが枯渇しようとしているのです…。精靈達と魔力の現であるマナはこの世界樹から生まれているのです。御存じではありませんか？」

クラース「何だつて！？本当なのか？この樹一本で、世界中に満ち足りるだけのマナが？」

マーテル「そうです」

クラース「にわかには信じがたいな」

マーテル「嘘は、申しません。世界樹が、枯れた後でなければ信じてはもらえませんか？精靈も魔術も、全てが失われてからでなければ…」

クラース「……」

クラース「この精靈が言つてることは、本当だと思いますよ。僕とミントが住んでいた100年後の世界には、魔術は存在しませんでしたから。それに、僕は見たんです。この樹の、枯れ果ててしまつて

いる姿を…」

クラース「本当なのか? だとしたら…」

マーテル「マナは、世界樹ユグドラシルが生き続けるために必要です。しかし、魔術で消費されたくらいで枯渇することはないのです」

クラース「では、なぜ?」

マーテル「わかりません… 何らかの強い力がマナを大量に消費しているとしか…」

クラース「何とか樹を助ける方法はないんだろうか? 魔術がなければ、ダオスを倒すこともできなくなってしまう」

クラース「私の研究も無駄になってしまふな…」

クラースがつぶやくとマーテルの姿が少しづつ薄くなり消えてしまった。

クラース「待つてくれ!… まだ、聞きたいことが…!」

ミント「私が、やってみます」

クラース「え?」

ミントが世界樹に法術をかけるが何も変わらなかつた。

ミント「私の力が、足りないようです。私に、母のような強い法術の力があれば…」

クラース「そんなに、都合良くなきないか: マナが消えたら、魔術は失われてしまう…」

ミント「ダオスが、未来に時間転移してしまつ前に倒すことはできないのでしょうか?」

クラース「とにかく、マナを大量に消費する原因を取り除かなければなるまい。このままでは、歴史は繰り返すばかりだ」

クラース「取り除くつて言つても… これから、僕達は何をしたらいいんでしょう?」

クラース「マナが魔術に関係があるとすれば原因はやはりダオスかもしれない」

クラース「じゃあ、ダオスを倒せば…」

クラース「可能性としては高いだろ? まあ、それも簡単にはいか

ないだろうがな………… 現在、存在を知られている精靈の中で最も強い力を持っていると言われているのが『ルナ』という月の精靈だ。そして、そのルナと契約するために必要な指輪がモーリア抗道に、あると言われている「

クレス「モーリア抗道？」

クレス「アルヴァニスタにあるドワーフ族の鉱山跡だが、詳しいことはわかっていない。アルヴァニスタ王国は世界で最も魔術文化が発達した国でね。そこに行けば必ず重要な情報が得られるはずだ」クレス「ルートは、北にベネツィアという港町がある。そこから、定期船が出ている」

クレス「では、ベネツィアの町に行つてみましょう」

ベネツィアに向かう途中立ち寄った町は廃墟と化していた。

クレス「町が…」

ミント「ひどい…」

クレス「生存者はいないのか？」

クレス「…」

街の中を搜すと少女がいた。

クレス「大丈夫か！？」

少女「あ、私は…何ともありません」

クレス「いつたいこの町に何が起こったんだ！？」

少女「デミテルが…」

クレス「えつ？」

少女「この町を襲つた魔術師です。私のパパとママも殺されて…」

クレス「仇討ちなら僕が力になる！」

少女「えつ？」

クレス「おいおい、私達には時間がないんだぞ！」

ミント「で、でも、見過ごすなんてできません」

クレス「おいおい、ミントまで！」

クレス「急がなければいけない時なのはわかっているけど僕は…」

クレース「二人とも、どうしたんだ？なんだか様子が変だぞ」
クレス「……え、何でもありません。ただ、放つておけないんで
す」

ミント「私も、クレスさんと同じ気持ちです。彼女の力になりたい
…」

クレース「ふむ…まあ一人がそこまで言つなら、私も反対はしない
がな。それなら、その魔術師の話を詳しく聞かせてくれないか？相
手が魔術師なら魔術に関する情報が手に入るかも知れないからな」
少女「デミテルの居場所ははつきりとわかつていませんが…。北の
方へ去つて行つたのを見ました」

クレース「なるほど…。それならベネツィア方向に搜していけば見
つかる可能性が高いわけか…」

少女「あの…何とお礼を言えбаいいか。本当にありがとうございます。申し遅れましたが、私の名前はリア」スカーレットです」

ミント「私はミント。リアさん、どうぞよろしく。彼はクレスさん、

こちらがクレースさん」

リア「はい、こちらこそ、よろしくお願ひします」

デミテルが住んでいるという西の孤島の館に向かい、デミテルにあ
つたクレス達。

クレス「お前がデミテルか！」

デミテル「いかにも。それがどうかしたのかな？」

クレス「お前はリアの両親の仇！覚悟しろ！」

デミテル「ほう、スカーレット夫妻を御存じか。しかしあの方を師
と仰ぐ私を仇呼ばわりするとはどういうことかな？夫妻は事故死だ
つたはずだ」

クレス「何だつて！？」

デミテル「いつたい誰にそんな話を吹き込まれたのかね？」

クレス「スカーレット夫妻の娘、リアに決まってるだろう…」

デミテル「確かに、スカーレット夫妻には一女がおられたが…この

娘が夫妻の御息女だといつのかね？……おとなしく立ち去るがよい。

真実を教えてやろう」「

デミテル「我が師匠の愛娘リアは、両親と共に事故死している。その娘が本当は何者で、何を考えてこのようなことをしているかは知らぬが……何とも、間抜けな話よ。その娘、リアとは似ても似つかぬわ！」

クラース「いつたいどつちが本当なんだ？」

クラース「リア、あいつの方が嘘をついていと黙つてくれ……」

デミテル「その娘を残していくば館に勝手に踏み入ったことも許してやろうではないか」

クラース（僕はこの子を信じたい……きっと何か事情があるはずだ）
鏡に映るデミテルの後ろには黒い影がまとわりついていた。その影はペンダントを奪つたマルスの後ろについていたものと同じだった。クラース「あの影は……どうしつぽを出したな！お前もダオスの手先か……」

デミテル「何！？ちつ、貴様見えるのか」

クラース「きみは隠れているんだ！」

デミテル「ふはははは……貴様ら、生きて帰れると思つなよ……！覺悟！……」

デミテルを倒した後クラースは戸惑っていた。

クラース「……これで本当によかつたのか？」

そう思つていてるとリアが突然倒れた。

ミント「リアさん！？」

クラース「大丈夫か！？」

リア「みなさん……あ、ありがと……ございました……」

ミント「しつかりして……」

リア「こ、これで私も……両親の元へ逝くことができま

ミント「え？」

リア「最後のお願いです……私の心優しい友人を、どうかよろしく……

クラース「リア、しつかりするんだ！」

ミント「リアさん……」

リアが目を閉じるとリアの体から茶色い髪をした幽霊が空へと向かって飛んで行つた。

ミント「み、見ましたか？」

クレス「見た！」

クラース「今のは、いつたい？」

ミント「リアさん、手に何かを持つているよつです。これは……リボン？」

クレス「リボン？」

リア？「ここは、どこ？リアは？リアはどうなつたの？」

ミント「リア……さん？」

リア？「リア？違うの……あたしは……あたしはアーチェ」

クラース「アーチェだつて？」

アーチェ「リアはあたしの親友なの……」

バート「アーチェ！」

アーチェ「『めん…実は…』

バート「いいんだ、帰つて来てくれさえすれば……」

アーチェ「お父さん、ごめんなさい……」

クラース「仇への憎しみがはれぬあまりに嘆きをまよつ友の魂に、

自分の体を貸し与える……か」

ミント「リアさん、天国に行けたでしようか？」

クレス「行けたさ、きつと」

クラース「あのアーチェつて娘に魔術の才能があつたからできたことだらうが……まったくおどろいたな」

クラース達が外で話していると家の中からアーチェが出てきた。

ミント「リアさん……あ……すみません……アーチェさんでしたね」

アーチェ「いいのよ、気にしなくても。ミントちゃんだつけ？私がいつまでもこの格好をしているのが悪いんだもんね」

アーチエ「これでどう?」

アーチエがリボンを結びポニー テールにする。

ミント「あ…ええ、お似合いです」

アーチエ「リアの力になつてくれてありがとう、ね 今度は、あたしがみんなの力になつてあげちゃうから」

クレス「同じ顔なのに、口調ががらつと変わつたのでなんだか違和感があるな…」

アーチエ「まあ、これがあたし本来の話し方なんだから許してよ。あつ、そうそう。これは、あたしのお父さんからのお礼だつてさ」

クレス「契約の指輪か」

アーチエ「さ、行こうよ!」

クレス「よし、アルヴァニスターへ向けて出発だ!!」

時空戦士たちの過去～集まりだす英雄達～（後書き）

感想待つてます。

魔界戦士たちの過去へ変わってしまった過去へ（前編）

s yuooちゃん、お見あいがとうございました。

今回はジーストーナ編です。

モリスンさんの手紙は今でも、胸に残っています。

時空戦士たちの過去へ変わってしまった過去へ

クレス、ミント、クラース、アーチェの四人は旅を続けた。精霊と契約をしつつ、ある国の王子をダオスの手下の手から救いだしたり、モリスンさんの祖先のエドワード・D・モリスンに出会つたりした。そこでクレスは戦争で力になると言い、エドワードはすべてが終わつた後クレス達が未来に帰れるようにしようと言つた。そしてダオスに対抗する国ミッドガルズ…

ライゼン「待たせて申し訳ない。私はこの国の騎士団長でライゼンという者です。あなた達のことはモリスン殿から聞いております。まだお若いのに一騎当千の勇士と聞きおよんでおりますぞ」

クレス「いえ、若輩ですが、戦列の端に加えていただければ幸いで

す」

モリスン「ありがとうございます、やつぱり来てくれたんだね」

クレス「ええ、力を合わせてダオスの野望を阻止します」

アーチェ「ヤボウ？ そういうえば、ダオスの野望って何なの？」

ライゼン「何を言つてあるのかね。ダオスはこの世界を滅ぼそうとしておるのだと！」

アーチェ「ホントに？」

ミント「アーチェさん…？」

クレス「何か、気になることでもあるのか？」

アーチェ「世界を滅ぼすために？」

ライゼン「その通りだ！」

アーチェ「……ま、いつか

クラース「申し訳ない。何か考えすぎていたようだ」

モリスン「と、とりあえず、改めて礼を言わせてもらいたい。来る戦いにそなたらが加勢してくれること、何よりも心強く思う所だ」

城から出たところでアーチエが突然話しだした。

アーチエ「あたしは納得してないよ」

クラース「は？」

アーチエ「ダオスの目的のことだよ。確かにダオスは町を襲つた。人を殺めた。魔物を操つている。だけど…」

クラース「だけど？」

アーチエ「だけどベネツィアやヨークリッドを襲つたことつてある？アルヴァニスターではレアード王子を操つて動けなくしただけじゃ？内部から崩すことだつてできたはずなのに…ダオスつて直接にはミッドガルズにしかちょっとかいで出してないじやん。これつてどういうこと？」

クラース「そう言われてもなあ」

クラース「いつたいどうしたんだ？奴はハーメルを襲つたじゃないか！」

アーチエ「……」

クラース「リアやリアの両親を殺したのもダオスが裏で手を引いていたんじやないか！何とも思わないのか…？」

ミント「クレスさん、言いすぎです！」

アーチエ「そこなの」

クレス「へ？」

アーチエ「そこだけ変なのよね。どうしてハーメルだけ襲つたのかなあ？」

クラース「ううん…」

アーチエ「考えすぎかなあ。ミッドガルズとハーメルに、またはアの両親に何か共通点つてあるんじやない？」

アーチエ「やっぱ変じやん、他の町が無事なのは…」

クラース「ダオスの目的か…そう言わると、少し妙かもしけんな」

アーチエ「一度、あたしの家に行ってみようよ。お父さんに聞けば何かわかるかもしねないし…それに、少し文句も言いたいしね」

クラース「い、今からお前の家に！？少し遠すぎやしないか？」
アーチエ「だいじょーぶ、ダイジヨーブ。パッと行つてパッと帰つ
てくれればいいじゃん？さ、行こ」

クレス「ふう、やつとアーチエの家に着いたな。アーチエ？」
家に着くなりアーチエは家の中に入つてバートを問い合わせ始めた。
アーチエ「お父さんの嘘つき！－お母さん、死んでないじゃん！」
旅の途中ハーフエルフ禁制のユミルの森にアーチエが入つてしまい
殺されそうになつたところを助けてくれたのだ。

バート「ななな…あ、会つたのか？」

頷くアーチエ。

バート「そうか…」

アーチエ「どうしてお母さん、家から出て行つちゃつたの？浮氣？」

バート「ばつ、何てことを、何でそつなる」

クラース「エルフは種族として団結する道を選んだ…確かに、そうじ
やなかつたか？」

バート「その通りだ…ほんの十数年前まではエルフと人間は共存し
ていたんだ。しかしある時、突然彼らは人間を嫌い…エルフの血が
人間と交わることを拒んで今のユミルの森に移り住んだのだ。もち
ろん、エルフ族全員がそう考えていたわけではない。むりやり人間
と引き裂かれた例もたくさんあつた。私とルーチエもその中の一つ
にすぎないんだ」

バート「ルーチエ！…どうしても、行くのか？」

ルーチエ「はい…」

バート「…なぜだ？なぜ、もう一緒に暮らせないんだ？ルーチエ、
考え方直してくれ！」

ルーチエ「…バート…」

バート「一緒に…もう一度…」

ルーチエ「…」

しかし彼女は戻らない。

バート「ルーチェ、なぜなんだ！！」

エルフ「種族の隔たりは、考へる以上に大きかつたということだ。お前達人間が、今までしたことやこれからしようとしていること…その愚かさをもう一度よく考へてみるとことだ」

バート「何だと、いつたい、どういうことなんだ？」

エルフ「でなければ、一度と我々が人間の前に姿を見せる」ともあるまい」

バート「どういう意味なんだ…ルーチェ…」

クレス「人間がしようとしていることの愚かさ？」

バート「私には全くわからんよ。とにかく、自分を死んだことにしてくれというのは、ルーチェたつての願いだつたんだ」

アーチェ「お母さんね…」

バート「えつ？」

アーチェ「お母さん、謝つてたよ、『めんなさい』って…お父さんは、お母さんのこと、恨んでる？」

バート「……私は、一度たりとも、母さんを恨んだことはないよ」

アーチェ「……それじゃあ、今でもお母さんのこと…愛してる？」

バート「もちろんだよ」

アーチェ「……だつたら…いつかきっと、もと通りになれるじゃん！じゃあ、この話はもうおしまい！」

バート「ああ…すまなかつたな、アーチェ

クライス「アーチェ…いいかな？」

アーチェ「あつ、『めん。ねえ、お父さん…リアの両親のことなんだけど…何か悪いことしてたの？』

バート「へ、どうこうことだ？」

クライス「スカーレット夫妻とミッドガルズの間に、何か共通点がないかと思つてね」

バート「…以前はミッドガルズに住んでいたらしく。数年前にミッド

ドガルズから引っ越してきたくらいしか…何でも、城で未知の力の研究をしていたとか聞いているが彼らがどうかしたのか?」

クラース「未知の力? もしや、それは魔科学のことでは…」

アーチエ「魔科学とダオス、何か関係でもあるのかな?」

クレス「さあ…」

ミント「そもそもミッドガルズに戻らないと…」

クラース「そうだな…」

ミッドガルズに戻ると魔物が少年を人質に取っていた。

クレス「モリスンさん、これは! ?」

モリスン「…」

魔物「ふふ、ようやく役者がそろつたか」

モリスン「ジエストーナ、何が望みだ?」

ジエストーナ「これから戦争をしましょうと言つだけで、そのまま帰るのは、俺の性に合わんのよ。ここで、ついでに貴様らの命を絶つておけばダオス様もお喜びにならうといつも…」

クレス「何だと! ?」

ジエストーナ「動くなよ! 少しでも動けば、このガキの命はないぜえ…」

クレス「汚いぞ!」

ジエストーナ「自害しろよ! 小僧とモリスン、それにそこの三人全員だ!」

モリスン「みんな、よく見るんだ…」

モリスンが何かを呑くと青白い光となり空へと飛びジエストーナの後ろへ現れた。そして体当たりをして子供を逃がした。

ジエストーナ「うお! ! き、貴様あああ! !」

ジエストーナが手に持つた剣でモリスンを貫く。

クレス「モリスンさん! !」

モリスン「近づくな! !」これをもつと拡大すれば、時間転移を引き起こすことも可能になるはずだ…」

ジエストーナ「ははは、とどめだ！！」

モリスン「うぐう…この力の研究を完成できなかつたことが…残念だ…」

モリスン「はあ、はあ、これは、まねするなよ…」

ジエストーナ「な、何を！？」

モリスンがそうつぶやくとモリスンとジエストーナの間に結界が張られ、魔力が圧縮し…爆発した。

ミント「こんな、こんなことつて」

クレス「モリスンさん…」アーチェ、まだダオスの目的に疑問を持っているのか？見ただろう？…奴は僕達を殺すためならどんなことだつてするんだ！」

アーチェ「わかつた…もう言わない…」

ミント「クレスさん…歴史が…本当に書かれていたことと違つてしましました…」

クレス「モリスンさんは…一度も助けられたよ。もうたくさんだ！僕達で奴を倒すんだ…！そして…そして、全てに決着をつけよう！」

…

その後クレス達はミッドガルズ軍とともに魔物の軍勢の陸軍部隊長を倒しミッドガルズに戻つていた。

ライゼン「みんな、よくやつてくれた。これで戦争に勝利したも同然」

兵士「階下…………！」

ライゼン「なにごとだ、騒々しい！！」

兵士「た、たいへんです…！敵が、敵が攻めてきます…！」

ライゼン「何…？そんなばかな…すでに平原は我々の手に」

兵士「そ、それが空から…」

ライゼン「空戦部隊か…すぐに投石器、大砲部隊を投入するのだ、急げ…！」

兵士「はっ！」

ライゼン「階下は安全な場所へ」

国王「いや、わしもここに残る。民をおいてわしだけ逃げることなどできるか」

ライゼン「……わかりました。よい機会です。魔科学兵器の力、ダオスに見せつけてやりましょう」

クレース「まずいぞ…私達も加勢しよう…！」

クレース「でも空からじゃあ…」

クレース「何もしないわけにはいかないだろ！」

空から来る魔物の軍勢ネギの村を襲つた魔物の何十倍の数の魔物が空を覆い尽くしている。魔科学兵器の魔道砲が三分の一ほどを消し飛ばすが一撃目を放とうとしたところ魔道砲が暴走し壊れてしまつた。しかし今までどこかに消えていたクレースがペガサスとともに現れアーチェとともに空軍部隊長を倒し魔物たちは統率がとれなくなり引き返して行つた。城に戻るとライゼンがモリスンの手紙を渡してきた。

『この手紙が読まれているということは、私は志半ばで倒れたということだ。』

陛下やライゼン殿には、心から謝罪をしたい。

しかし、必ずや私の志を継いでくれる者がいると、そう信じている。

かつてダオスは言った…

『この世に悪があるとすれば、それは私ではない。貴様ら人間の心に中にあるのだ』

それはある意味、正しいのだろう。だが、あくまでも一面でしかない。

私は人間を信じている。自分の血の半分である人間を。

だから、私の志を継いでくれる者達に、私が知る限りの呪文を託そう。

その魔術を使いこなし、どうか世界を救うために役立てほしい。

『エドワード＝ロ＝モリスン』

モリスンの意思を継ぎ四人はダオス上へ向かつ。

時空戦士たちの過去へ変わってしまった過去へ（後書き）

読めばわかるんですが別にダオスの命令ってわけでもないんですよ。クレスの早とちり。まあ、あの状況で冷静になれるはずありませんが。

それは置いて置いて皆さんには聞きたいことがあります。

ロディは必要ですか？

ファンタジアをプレイした回数が一桁いつてるのに対してクロスの方は一周しかしておりません。そのため、ロディを入れようとすると違和感が半端ないです。（なら最初から入れるなよって感じですが…）

これからことを簡単に考えてみましたが活躍する場所が皆無です。ですので編集でロディの部分だけカットしようと思つのですがどうでしょうか？

意見待つてます。

歴戦士たちの過去～過去から未来へ～（前書き）

ロードマップのことは消すことにしました。近づいて修正します。
本編に関してはややこしくなったと思います。

時空戦士たちの過去～過去から未来へ～

ダオス城の中を進みついにダオスを見つけた四人。

クレス「ダオス、ついに見つけたぞ！覚悟しろ！…」ソード、全ての決着をつけてやる…！」

ダオス「…」

クレス「どうした、怖じ気づいたか！」

ダオス「なぜ私に剣を向ける？私には、お前達と戦う理由はない」

クレス「お前にはなくとも、僕達にはあるんだ…！」

ダオス「笑止！しょせんお前達もミッドガルズの手先というわけか。降りかかる火の粉は振り払わねばなるまい」

クレス「ダオス、覚悟…！」

ダオスと戦うが戦いの途中で未来に逃げられてしまつ…。

クレス「逃げられた…ちくしょう…！」

ミント「クレスさん…どうすればいいの？」

クーラース「…いつまでもここにいても仕方がない、いつたん戻ろう」

その後四人はクレス達のいた時代でダオスを倒すためにユニコーンの力で世界樹を癒し、モリスンが残した文献に書いてあつた古代都市トル（今は海の底に沈んでいるが都市機能は失つておらず、科学で時間転移をも可能にした都市）に向かう。そして四人はクレス達の時代へ時を越える。

ダオス「あの輝きは時間転移の光。答える…奴らをどこへやつた？」

モリスン「言つと思つてゐるのか…？」

ダオス「こしゃくな奴め……いつの時代に送ったかは知らぬが……自分自身を転移できないとは、まだ未熟だな」

モリスン「……くそつ……」

ダオス「クククク……」こで朽ち果てるがいい……な……？……き、貴様らは！？」

モリスン「おお……」

チエスター「クレス……」

クレス「仲間も世界も、お前の好きにはさせない……」

ダオス「ふん、望むところだ。私には、やらねばならぬ使命がある！……こんな所で倒れるわけにはいかないのだ……」

四人はかろうじてダオスを倒すが地下墓地が崩れ出す。

モリスン「危ない、逃げるんだ……！」

クレス「い、いつたい、どうなつているんだ！？」

モリスン「おそらくダオスが復活する時に膨大なエネルギーが解放されたんだ！！地殻に異常が起きたとしても不思議じやない！！」

クレス「早く！！地下墓地が崩れるぞ……！」

トリスタン「おお、クレス無事じやつたか……モリスン、これはどうなつとるんじや！？」

クレス「トリスタン師匠、早く逃げて下さい……」

モリスンの家で戦いの傷を癒したクラースとアーチュはトールへ向かうためクレス達に別れを告げる。

クレス「お別れ、ですね……」

クラース「ああ……後は、我々だけでトールに行くことにするよ」

アーチュ「忘れちゃやだよ……あたしは絶対みんなのこと忘れないから……絶対、忘れない……」

クラース「ミント、泣くな。私達は、本来できるはずのない出会いをしてしまった……いや、することができた。私はむしり、みんなに出会えてよかつたと喜ぶべきだと考えているんだ」

ミント「……はい…」

クレス「クラースさん… アーチェ… 一人とも、お元氣で」

クラース「ああ、お前達もな…」

アーチェ「それじゃ、バイバイだね」

モリスン「な、何だ！？」

アーチェ「みんな、あれ見て！…」

地震が起こった後アーチェの言う方を見てみると無数の隕石が降り注いでいた。隕石が治ると時空転移の光とともに一人の男が現れた。彼は五十年後の未来からダオスを倒すため四人の力を借りるためにやつて来た使者だった。チエスターを加えた五人はトールで五十年後へと向かう。

そこで五人は時の魔剣のことを知る。時の魔剣工ターナルソードがあればダオスの時空転移を防ぐことができる。その魔剣を手に入れるため五人は旅を続ける。その中で彼らは一人の少女と出会う。彼女は藤林すず。忍びの里の忍者でダオスに操られた両親を探すために世界を回っていた。すずの祖父、里の長、乱藏の言葉を聞き五人は旅の先ですすの両親を探すことを約束する。そしてヨーコクリッドで自らの腕を磨きつつ、旅の資金を得るために闘技場で一人戦つていたクレスの前に二人の忍者が現れる。二人はすずの両親、銅蔵とおきよだつた。連戦の後で疲労している体に鞭を討ちつつ戦つてゐるとすずが現れた。

クレス「すずちゃん！」

すず「父上、母上、もう人を殺めるのはやめて下さい…！」

銅蔵「すず…わ、私達を斬るのだ…！」

？？？『だ、黙れ！完全に洗脳できなかつたか！』

銅蔵の口から銅蔵とは違つ声が聞こえる。

すず「父上…私には…できません…」

おきよ「う…」

銅蔵「うおおおおおおおおおお…」

「…な、か、体が…ことをきか…」

「…ギ、ギヒヒヒイイイ…」

二人が叫ぶと互いの武器をお互いに刺し合つた。

すず「父上、母上…」

クレス「そ、そんな…」

「…こ、こんなばか…」

すず「父上…、母上…！こんな…こんなことひて…」

一人に駆け寄りすずは涙を流す。

銅蔵「よ、よいのだ…わ、我らの罪は我らの手で償わなければならぬ…すずの…手を汚す必要はない…」

おきよ「今まで親らしい…ことをしてやれなくて…『めんなさい…』でも…最後にあなたの涙を見て…安心したわ…」

銅蔵「これで我らも…心…おきなく…地獄に…いける…」
すず（父上、母上…すずは、もつ泣きません。この涙が最後の涙…
すずは立派な忍者になります）

クレス「すずちゃん、何て言つたらいいか…僕は、取り返しのつかないことをしてしまつた…」

すず「クレスさんが謝る必要はありません。あなたは両親の心を救つてくれた恩人なのです」

クレス「でも、僕は…両親の命を救うことはできなかつた…」

すず「これも忍者の捷。忍者は…忍者は…非情でなければ務まらないのです」

その後すずはクレス達に恩を返すべく共に戦うことを誓つ。すずを加えて六人になつた彼らは炎の剣、氷の剣を手に入れ、オリジンの力で一つを合わせエターナルソードを作り上げた。そしてダオス城があるところ常闇の町アーリイへ…。

时空戦士たちの過去～過去から未来へ～（後書き）

かなりの駆け足ですいません。すずが仲間になると、JUNIですが、技場にいた理由はテキトーです。

次はいよいよアーリイのイベント。

その次でようやくネギまに戻ると思います。

遅くなつてすいません。

なぜか新しい小説のアイデアが浮かんできてそれを書きとめていました。

アンケートですが生徒との契約については打ち切ります。

時空戦士たちの過去～決戦前夜～

常闇の町アーリイ。この時代にダオスが現れてから朝が来る」とのなくなつた炭鉱の町。この町でダオスの城が見られたと聞き、クラース達はアーリイへ向かつた。そして明日に備えるために宿で休むことに。

クラース「うう、寒い寒い…ストーブ、ストーブ…」

クレス「どうしたの、ミント?」

皆が宿に入つていく中ミントは入り口で立ち止まつた。

ミント「クレスさん…」

クレス「えつ、なに?」

ミント「クレスさん、あの、実は…お話ししたい」とが…あります。宿屋の裏で待つてあります…あとで…来ていただけますか?」

クレス「え、あ、は…」

そういうとミントは宿から出つて言つてしまつた。

アーチエ「あれ、ミントはどうしたの?」

クレス「えつ…散歩かな」

アーチエ「散歩?」

クレス「そつ、そう!散歩だつてや」

アーチエ「よりによつて、何で散歩しなきゃなんないの?」

チエスター「人の勝手だろ?」

クラース「何もこんな寒い場所で…」

アーチエ「ふつーはお風呂なんじやない?」へんな寒いのよ。それなのに、なあ~んで散歩なのさ?」

チエスター「それじやお前はそつしたらいいじやないか?」

アーチエ「だつてえ…一人じゃつまんないじやん」

チエスター「…」

クラース「とにかく、今は暖まろ?…つづく、ますます冷えてきた」

皆が暖炉の前であつた待つていてる中クレスはしきりに窓の外を気に

していた。

クラース「どうしたクレス？」

クレス「えつ、いや、その……ちょ、ちょっと散歩に行つてへる……」

アーチエ「じゃ、あたしも……」

クレス「ひ、一人で行きたいんだ」

そう言うとクレスはさつさと宿屋を出て行つた。

アーチエ「へんなのぉ~」

クラース「こんな寒い時にクレスまで……若いうのは良いことだな」

アーチエ「オヤジくわいこと言わないでよねえ」「

クラース「そうか？」

アーチエ「まだ、二十代なんじょ」

クラース「まあ、一応はな……さて、時間もあるし、何をしようか……」

やつと暖炉の前から動いたクラースはクレスが置いて行つたエターナルソードを見て何かを思いついた。

アーチエ「どうしたの？」

クラース「何、ちょっとしたイタズラを思いついたのぞ」

契約の指輪を出しオリジンを呼び出す。

クラース「オリジンよ、あなたは時間を越えた世界を見せる力を持つているのではなかつたか？」

オリジン「……確かにそうしたことも可能だ。だが、未来を見ることには許されぬ」

クラース「私が見たいのは過去の世界なんだが……どうしても、気がかりなことがあつてな……」

オリジン「…………」の私の、初めての主の願いだ。一度だけならば許そう

クラース「一度だけか……ああ、それで構わない」

アーチエ「なにしてんのさ？」

オリジン「それでは、いつの時代、どの場所を望むのだ？」

クラース「……すまん、二人とも部屋から出ていてくれないか？」

アーチエ「えへ、何でえへ？ 寒いじゃん！」

클래스「頼むよ…あとで、好きなものをいひやうするから…」

アーチエ「まつたくもう、何なのよー。みんなして」

そう言つてアーチエとチエスターが部屋から出ていく。

オリジン「それで、びいするのだ？」

クラス「…」

オリジンを呼び出したときと反対に小声で「ふふふ」とオリジンに伝える。

オリジン「は？」

クラス「…」

オリジン「…ふむ、わかつた。しかし、なぜそのような小さな声なのだ？ 恥らう年でもあるまい。では、いくぞ…」

エターナルソードから溢れる光の中に見えるのは故郷にいる幼馴染。ミラルド「はい、それじゃあ今日の授業はここまでね。基本的なことはだいたい今日で終わりね」

生徒「ありがとうございます」

生徒「ところで…クラスさんはいつ戻つて来るんですか？」

生徒「あのダオスをやつつけたんですね？」

生徒「村長も大喜びで村をあげてパーティーやるんだってはつきりますよ」

ミラルド「ああねえ…まあ、あいつはゾンビみたいにしづとい奴だから、そのうちに帰つてくるでしょ」

生徒「はは、そんなもんですかね」

生徒「それじゃあ、また明日」

ミラルド「ええ、またね。まつたく、ビーをまつつき歩いてんのかしらねえ…あれでも少しほは役に立つてんのかしら？ ま、村長に待つててあげるわ」

クラスが過去を見ているころ宿の入り口では。

チエスター「おい、アーチエ」

アーチエ「な、なによ？」

チエスター「おまえ、クレスが何してるか、のぞきにいくつもりだろ。まったく…おまえは」

アーチエ「うつさいなあ！あたしがなにしようが、あんたに関係ないでしようが」

チエスター「クレスは俺の親友だからな！関係あるぜ…」

アーチエ「つたく！」

ひとしきり睨みあつた後アーチエが溜息を吐く。

アーチエ「……あーあ、やんなつちゃう！なんで、こうケンカばかりなんだろ！」

チエスター「おまえが売つてるんだろ」

アーチエ「なに言つてんのよ！いつもからんでくるのはあんたでしうが！あたしが嫌いなのはかまわないけど…いいかげんにしてほしいんだよね…」

チエスター「だ、誰が、嫌いだつて言つたよ！だいたい、お前を初めて見た時から…」

アーチエ「えつ…みた…とき…から…？」

チエスター「…！…何でもねえよ」

アーチエ「ふうん……ね、チエスター…外行！」

チエスター「いいよ、オレは…」

アーチエ「来て、ほらほら」

宿屋の裏。

クレス「ごめん、待つた？」

ミント「ううん」

クレス「一人で出でてくるタイミングがなかなかなくて…となり、いい？」

ミント「ええ」

クレス「で…話つて、何？」

ミント「これを…見て下さい」

クレス「このイヤリング…」

なくしたと思つていたミントのお母さんのイヤリング。

ミント「ゴーラーンの飾りがついたイヤリング、珍しいでしょ? これは、法術師の証です。私の母が、いつもつけていたものと同じ…母は、もう…いませんですね」

クレス「……ごめん…」

ミント「謝らないで…あの時、もし…クレスさんが、母の死を隠してくれなかつたとしたら…私、きっと取り乱して…」

ミントの頬に滴が一粒流れる。

クレス「ミント…」

ミント「本当に…ありがとうございます…」

その後二人はどちらかともなく体を寄せ合つた。

宿屋の入り口。

アーチュ「ミント…」

ショスター「おい、もう戻るつぜ。また、雪も降つてきたし…」

アーチュ「も、もうちょっと…」

そういうアーチュをショスターは引きずつて中に入る。引きずられていく中アーチュは一人で作った雪だるまを見てくすつと笑つた。

宿屋の屋根の上。

すず（父上、母上…もうすぐ、ダオスとの決闘です。…父上、母上…今、すずは迷つています。…父上、本当に忍者は非情でなければなりませんか? クレスさん達と一緒にいると、なぜか、すずは不思議な気持ちになります）

胸に手を当てて考える。

すず（それは…それは、すずの心の弱さでしょうか?…母上、この気持ちは何なのでしょう…私には…わかりません…でも…でも、せめて…最後の戦いは…クレスさん達と心を重ねて戦いたい…

それで、この身倒ることになろうとも…後悔はいたしません)

六人にとって最後かもしれない夜が過ぎていく。

時空戦士たちの過去～決戦前夜～（後書き）

感想待つてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9372o/>

麻帆良に来た召喚士

2011年5月2日23時51分発行